

特12
534

十九年四月十一日 務印局付



曲亭翁著

俠名傳

東京文事堂發兌

識讀
如非

俠客傳第一集自序

老氏曰。大道廢。有仁義。仁義者。道之異稱也。而有似而非者。故韓
非比儒俠。擯斥之。曰。儒以文亂法。俠以武犯禁。二者皆譏。而學士
多稱於世云。夫俠之爲言。彊也。持也。輕生高氣。排難解紛。孔子所
謂殺身成仁者。是已。司馬遷及傳游俠。其序援韓子。且曰。季次原
憲。閭巷人也。讀書懷獨行君子之德。不苟合當世。當世亦笑之。又
曰。今游俠。其行雖不軌於正義。然其言必信。其行必果。已諾必誠。
不愛其軀。赴士之阨困。旣已存亡死生矣。而不矜其能。羞伐其德。
蓋亦有足多者。此有憤激而言之。是以其語厚。而意深也。班固不
原此意。以其進奸雄譏之。可謂誤矣。今于彼書。檢之。則有延陵孟
嘗春申平原信陵之徒。皆卿相富厚之俠也。至如閭巷之俠。又有

朱家田仲王公劇孟郭解數人自漢而後迨唐有劍俠有女俠小說所載不遑毛舉也

國朝自古必有其人在焉但無論記傳載之以余所聞近世有大鳥居逸平關東小六幡隨長兵及號茨城革袴白柄大小神祇者皆是閭巷之俠而其所爲或未必合於義帝立氣齊作威福結私交以立疆於世者也較諸古者道德之士不動聲色消宇內之大變者相去非唯霄壤而已然氣豪以此至捍當世之兇暴此戰國之餘習未改其私義廉潔以有然也使當時無此人則士風自是衰俠客之義曷可少哉余有感焉而無所憤激不激不憤猶且傳俠客所以然者何也蓋以仁人抱道猶不免菑是故新田殂于足羽楠氏陣歿湊河大凡此二公誠忠與日月爭光德義流芳而不

既惜乎枝葉不再振榮枯得喪與南朝終始矣是以世人不平以爲遺憾余之固陋不敢自料寧思欲排其難解其紛叨補舊記之闕文慢載野乘所未言演義立傳以快人之心若夫興絕顯隱非游俠則其事不潔使人心愉快非寓言乃其談不博無財而能俠其俠此益奇也用滑稽善談罔不出人意表宜名不虛立書不虛行竊有賴于此又惡問虛之與實哉是書數十卷然後可以結局今茲所著才五卷是爲第一集其第二集以下應陸續刊行云浪華書賈羣玉堂與江戶書賈文溪堂相謀乞余之著三四年矣此塞其責者及刻成聊亦識歲月

天保二年端午前一日

曲亭蟬史撰



女仙
九六媛





第六助則

楠姑摩姫

翠新の書



木綿張如
荷二郎

楠式部少輔
正直

翠新の書



小夜二郎

長

五



新洒霧

木造木三介
春勝持

五

奇卷 俠客傳總目錄

俠客傳第一集目錄

每集五卷

第五回	第四回	第三回	第二回	第一回
演 <small>二</small> 便 <small>一</small> 宜 <small>一</small> 老 <small>一</small> 尼 <small>一</small> 薦 <small>一</small> 村 <small>一</small> 酒 <small>一</small>	陽 <small>一</small> 卜 <small>一</small> 緣 <small>一</small> 鬪 <small>一</small> 鷄 <small>一</small> 倡 <small>一</small> 主 <small>一</small> 僕 <small>一</small>	陰 <small>一</small> 德 <small>一</small> 入 <small>一</small> 老 <small>一</small> 鄉 <small>一</small> 得 <small>一</small> 奴 <small>一</small> 婢 <small>一</small>	照 <small>一</small> 黑 <small>一</small> 夜 <small>一</small> 螢 <small>一</small> 火 <small>一</small> 導 <small>一</small> 海 <small>一</small> 濱 <small>一</small>	封 <small>一</small> 白 <small>一</small> 紙 <small>一</small> 英 <small>一</small> 直 <small>一</small> 託 <small>一</small> 孤 <small>一</small> 君 <small>一</small>
七十三丁	六十二丁	三十八丁	二十四丁	一丁

第六回

福草村三兎奏奇功
釀藥酒郡領詳來歷

九十五丁

第七回

七里濱洪波洗衆惡
千葉城土瘵埋湖毒

百十二丁

第八回

啓衣箱小六得遺書
救癩疾著演失劍笄

百三十丁

第九回

鄉士二遇癩病人
光棍初懺悔舊惡

百四十九丁

第十回

相摸川小六視橫死
遊行寺著演葬螟蛉

百七十二丁

俠客傳第二集目錄

每集五卷

第十一回

深林孤俠訴忠衷
山莊衆僕靜舊功

百九十三丁

第十二回

安同首喪溫泉舍
庶吉淚濺節死場

二百十二丁

第十三回

感義烈俠民斂身首
說露夢聞人建墓表

二百廿七丁

第十四回

足柄除長總伴奸夫
吉野山小六遇女仙

二百五十二丁

第十五回

齋統遺跡助則知隱逸
臍帶志歲老樹話以往

二百六十七丁

第十六回

不毛山麓路義士憐童女
野井地藏堂俠客避驟雨

二百八十九丁

第十七回

滿泰駐駕見壯士
助則走馬捕奸黨

三百〇三丁

第十八回

理應外合濫法
理論方正繫枉

三百廿五丁

第十九回

託鴻便義兒齋書信
避豺狼毋女附海船

三百三十九丁

第二十回

姑摩姬夜夜禱神祇
九六媛月下譚劍俠

三百六十一丁

俠客傳第三集目錄

第二十一回

姑摩姬苦學讀劍書
無上玄通化現仙觀

三百七十九丁

每集五卷

第二十二回

論順逆九六媛授復箭
踏香煙姑摩姬過北山

三百九十三丁

第二十三回

金閣女俠燈籠
葛城僊嬢與警

四百十五丁

第二十四回

禱考墓楠女擊殘仇
結基局沙彌訟災祥

四百三十五丁

第二十五回

滿家計遣羅網輪
維盈囚免投石

四百五十四丁

第二十六回

正直受命送姑摩姬
彼岸二謬開八九莊

四百八十

第二十七回

縫殿自燒飛樓
安次送死會生

四百九十七丁

第二十八回

山上千里鏡 克闕莊院
佛前本命錄 初知病妹

五百十四丁

第二十九回

隆光千速驅 他賊
長総逆旅 遭騙局

五百三十丁

第三十回

疑似孽小夜 二殞命
瘞金計木綿 張越牢

五百五十一丁

俠客傳第四集目錄

每集五卷

第三十一回

以毒製毒 造化小配劑
臨機應變 奸賊投名狀

五百七十三丁

第三十二回

暴論勵親雷 九郎撈龍譚
夜察殺氣 姑摩姬夷群虎

五百九十四丁

第三十三回

姑摩姬莎庭 斬四賊
復一 郎後門 逞石技

六百十丁

第三十四回

喪子恨 五十槌 作偽書
投名悔荷 二郎陷同惡

六百三十五丁

第三十五回

柱主婦 筆柿分 賊財
誅殘盜 就盛置 放免

六百五十五丁

第三十六回

滿家 二旋 密策
楠女前知 得失

六百八十五丁

第三十七回

假密使 鐵傳 令旨
楠女俠明辨 玉石

七百十丁

第三十八回

持永借山 春戀 姑摩姬
正直 京囑漫 做月下翁

七百廿五丁

第三十九回

女俠購死猿一擬駿馬骨
心猿發狂大徵艾姦黨

七百四十二丁

第四十回

隱形術豪袁救長總
如醜交泰勝結荷

七百六十八丁

俠客傳第五集目錄

每集五卷

第四十一回

豪袁說管領密助奸謀
泰勝乞放死且遇舊僕

七百八十七丁

第四十二回

媚權門一就盛偽君命
逼姪女一正直促親事

八百三丁

第四十三回

假諾婚姻一家資復舊主
巧揮智辨一女俠害叔父

八百廿三丁

第四十四回

狼眼岳翁漫售恩愛
痴情新郎暗抱燕石

八百四十五丁

第四十五回

宥怒守護讓再策
忘義縉紳做擬使

八百五十七丁

第四十六回

飛一賊一賢婢捉強人
感奇遇一忠士話既往

八百七十五丁

第四十七回

遠江洋中奸黨瀾良善
難波港口老僧示將來

八百九十三丁

第四十八回

感義騙賊知昨非
授計勇婦免偷兒

九百拾丁

第四十九回

鬼窟越豪俠斬妖物
榊原宅莊官誘勇士

九百二十七丁

第五十回

受恩忽忘救
救禍却得禍

九百四十六頁

六百五十五頁

六百五十五頁

六百五十五頁

六百五十五頁

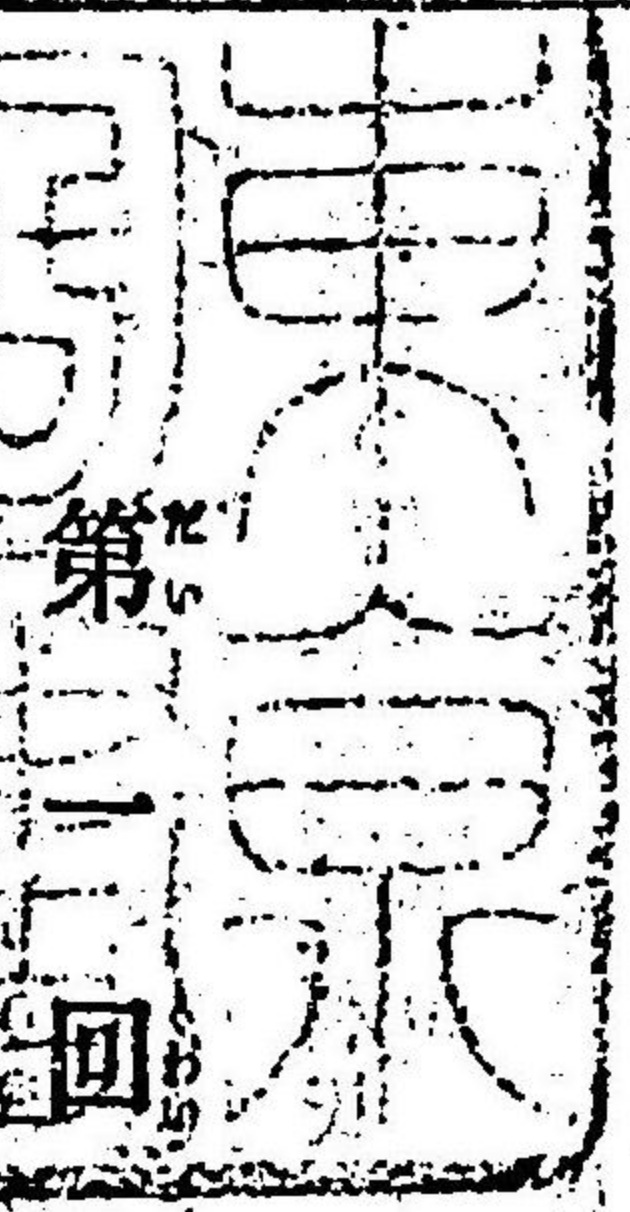
六百五十五頁

開卷 俠客傳總目錄終

奇驚

開卷奇驚俠客傳第壹集卷之二

東都 曲亭主人編次



青囊を製りて著演脚體を購ふ
白紙を封じて英直孤君を託す

鹿鹿尾足利義滿相國の將軍たりし應永の年秋と相摸州高座郡藤澤道場の左盡頭に野上
世尊と喚做しねる一個の郷士有けり。その祖貫を尋るに美濃の野上の人氏なりける。莊司著
源氏一統の後鎌倉に召措れ藤澤南郷の邊にて莊園三千餘貫を賜り藤澤東西八ヶ村の目代に
ぞあされける。是より數世を累て今の著演が大父なりける。野上目著佐といひしもの後醍醐天
皇のおん時元弘三年閏六月の鎌倉攻戦に新田義貞朝臣に從ひて又兵糧運送の事をうけ給ひ
りその功なきにあらねども新田足利の確執よりいく程もなく世は又乱れて恩賞の沙汰まで
もなく。利南北兩朝に立わかれ給ひつゝ義貞朝臣の足羽にて陣歿の事聞えしかば著佐是を

いと惜み世を債り隠隠して遂に亦足利家の催促に従ひせされば鎌倉將軍の時よりして所帯
不易の御教書を賜たる郷士なるをもて愆ても崇りなかりしかば世をいと安く送りけりその
子村主義種ハ生涯多病なりければいよく官途を絶て只讀書をのみ事としつ戦國に種な
るべき博士にてありけれども好て人の師とならば素よりその名を食らねば人に知らるゝよ
しもあらで年六十にして身まかりつその子ハ史著演義り著演の総角より文を學び武を嗜て
心ざま父祖より劣ら老既に壯年に及びし比二親の喪に在ると三年にして亦は倦老常にその妻
晩稻にいふやう忠臣ハ革命の時なく孝子の終身の喪あり三尊今の在るさまとも豈一今日も忘
れんや且俺大父の當初新田殿に従ひまのりて南朝のおん爲に一臂の力らと盡したまひさ今
ハ足利一統の世となりきにといふといへども媚て榮利を求むべからず俺ハ只わが分を守り
て法度を犯さず不義に與せず名利の奴ことならずもあらば世に恥ることなかるべしと論し
て鎌倉の管領満時足利氏にハ年始の嘉儀を稟すのみ参り仕ふることを欲せず況その方さま
なる權家に交へるといなければも素より饒裕なるをもて常々施しと好みたる性として俠氣
あり尙凶年ハ値ふとわれハ倉庫を盡し粟を散して里人の餓たるを賑ひし救ざる事なく豊年

にハ亦路を造り橋の朽たるを修復して衆人の資とす只これのまゝあらすして大約鄰郷近郷
の兵燹に家を焼れたる或ハ世ま落魄て饑饉ま過り或ハ久しく病臥て妻子を糧ふ便着なきも
の然らでも厄弱不具のもの孀孤おびのよるべきにハ親疏の差別なく米を贈り錢を取
らせて必厚く恵むを幾人といふとを知らずこれにより境を隔じものまでも其名を傳聞さる
と奇く不幸にして世を渡り難たるものハ折々は野上許尋ね来てよしと告ふとわれハその
居所と姓名を質しも問ハでその人別に永樂錢三百文と米五升を取らせけり愆てもそのもの
足らずとて兩三回來るとありともその折毎に推辭む事なく形のごとくも與へしかばある人
竊にこれを諷めて千仞の海に測るとも人の心の好否ハ量り知られぬものなるに名を聞徳を
慕ハとて來つゝ救を乞ふものハ名をも宿所も問糾さで東西を取らせ給ふと人の及ハぬ所行
あれどもそが中にハ搦鬼ありて然らずに困窮せざるものも愆々とハ誘へて食るとのなか
らざるハそこらに斟酌おらまほしといふを著演うち聞て和殿の意見定によしあり俺も亦初
よりそを思ひぬにあらねども君子ハ塵來の食を受せし疑ふて名を語ぬその居所を質しも
問ハそわわが施行の義に違ひて人を辱るものに似たり乞食悲人の素より論さしその人由緒

あるものされども世に幸あらで飢渴に得勝せしを俺に乞ふとき根穿り葉を欲し素生を問ひ、その人いかでか羞むるべし。さればその義を思ふをもて東西と與へてその名を問ひ、又乞ふもの虚實に、些も掛念せざるをなし、維その人告るがごとき困窮者にあらざるもその方をもて庇と受なば盜賊するに、なほ優と云し俺の質素を旨とし、奴婢などを多く使はず。妻子に、鹿布を被せて身も亦疎食を喫へ、吾も義の爲に、財を惜ず親の笑を承じより、只、施を事として、一日も疎略にせしとなければ幸よし、莊園に水旱の患なく、又年來俺郷の戦場、ありにたる事しもあらねば、軍兵の乱妨、あへる禍なし、ををもて施と、その年來を歴たれども、然とて東西の端もせせ陽報われど、願ひねども天墜おしといふべからず、然も心地すやと、説諭せ、バ諫しもの、感嘆しつゝ、取て悔しく思ひけり、恁ても野上著演、いなほ飽ぬ心地やしけん、有一日里の壯俊を、これ彼となく召聚つて、酒うち飲して示すやう、得る元弘の擾乱より、近き比まで五六十年来、都も鄙も、闘戰絶ねば、それが戰場に尸を曝して、野徑の草叢を肥すもの、抑幾億万名なりけん、數るゝ遠なかるべし、就中不便なる、名もなき棄武者、雜兵也、矢石に命を隕しても、頸を捕るゝまでもなく、その亡骸を扛もて還る身方も、亦罕されば、その白骨、路傍ある

砂石と俱に朽すも、あらん汝達、今より然る鬪をもし見ると、あるならば取わけてもて來よ。かし鬪、鬪一個を錢百文と價を定めて買とらん、等閑な思ひぞ、いひれて兼皆三議に及ばず。言語齊一、答るやうそ、いといと易きとにこそいへ、道郷にこそあるとなければ、鎌倉近郷、箱根以東、這首の溝、經那首の野邊にて見たる鬪、鬪の病坊なる犬糞より多かるを價よろしく買れなば、驛路遠く小荷駄の尻を、趕ふて畑肥を攫んより遙に、贏て持甲斐ある生活よこそ、さるべけれ、そいこゝろ得ていと承引つ歡びて、兪共侶に退りけり、是よりして後、彼此より鬪をもちて來るものあり、れば著演必直鈔を取せて、且褒て青布の囊を、懸けり、この復鬪と拾ひしとき、件の囊に、裝よとて也、これにより、那壯俊、俺の著演を、相稱へて、福老長者と喚做しつ、その前約に違ふとなく、多きを敵への作善を、感じてとゞゞ、需に應るもの、日毎に、間斷なかりけり、かくてその鬪の敷、一百級に及ぶ、毎に著演、これを瓶に、飲て遊行寺へ送り遣し、豫て寺僧と相謀て、寺内の岡を、伐ひらき、最大なる穴を、穿して、その鬪を、瘞ると、大凡一稔可りの程に、一萬餘級に及しかば、著演、則その岡に、萬人塔を、勸做たる石塔、婆を、建て、墓表としつ、ふたゝび住持に、請まうして、大衆を、聚合經を、讀して、水陸の施餼、餼を、修行し、且墓所料と、寄進して、後々までの菩提を、吊ひけり、恁れば



吉野の皇居を出させ給ひて嵯峨の大覺寺に渡御ましし。のち北朝と後々の御契約を定められおなじ月の初の五日に御讓位の鏡をもつて三種の神器を北朝へ御讓渡しありしかば是より後龜山天皇を新院とぞ稱しける。徳てより中間一稔を歴たりける。應永元年の春二月の廿三日に新院に先規の如く太上天皇の尊號を上り給ひしかども猶且嵯峨の大覺寺を仙居に定め給ひけり。往る延元元年の冬十二月廿三日は後醍醐天皇御こゝろならせも武臣足利尊氏が暴逆を避させ給ひんとて吉野へ臨幸ましますせしより後村上後龜山まで爰に御三世を累ね給ひて五十あまり七稔の春秋を歴たる。今この時は南朝北朝兩天皇稱御合體ましくしけれ。ば麻の如くに紊れたる世の是よりや風波のため長閑くあるべからんと萬民歡ぶ思ひしよ。似す武家足利氏よて、尙南朝の公卿武臣を執念深く憎みて、刺太上天皇山院の皇子を春宮に立奉らず。締ひとつとして前約を叛ぐることもかりしか。南朝忠義の卿相雲客累世義烈の武臣們の齊一怨憤りて或は山林に隱遁し或は赤ほも孤城を成りて戰歿するも多かりけり。恠れば新田楠の世々に携ぬ忠魂義膽武勇智畧も今さらに施し甲斐のなきまで。自方の漸々に落ち亡て有禦に憑む樹下に漏る雨繁くありにたる。新田貞方義隆の兩大將のせん橋なさに

一圓遺地を退きて且く時運を俟んとて貞方朝臣の殘兵を百名あまり従へて越路を投て落給へば義隆ぬしも残れる士卒を二三十名可爲て武藏相摸に隠れをる。自方の勇士を聚へんとて姿を窺と旅衣五名七名主従が引わかれゆく。弓張の月も竿聲と首途起光を包む玉鉾のみらの奥とらすみかたき濁れる世にも田字草安積の沼にわらねども外視鬱悒くたつ鳥と身を傲す。までに燭竹のしのぶの里を夜をこめて潜び出させ給ひけり。時は應永六年の秋九月のまになんこの時にしも右少將義隆をの郎君五才になり給ふをなほ陸奥に遺されたり。這郎君の母上の亦是新田の氏族なる大館左馬頭義ぬしの女弟也。然れば郎君の外祖ありける。大館左馬頭兼伊豫守氏明ぬし。當初新田贈中納言義貞卿の隊に属て特に武勇の譽ありしを惜むべし。興國二年北朝にての夏六月年二十八にして任國伊にて陣歿してけり。その嫡子上総權介氏宗ぬし。正平七年北朝の文の秋九月年二十七にして本國野まで卒りつ。三男大館左馬頭義主の初名を彌三郎といひけり。去後叙爵して從五位下右馬介に補任せられ。天授二年北朝の永の秋九月軍功の賞として從五位上に昇進し左馬頭にあされたる。尤き武略の達人にて義隆朝臣と侶共に陸奥に在りて。軍家の大敵と戦ふと屢なりしに。天授六年北朝の康の冬の比流矢の爲

に傷られたる金猪竟に急すして年三十九にて卒りけり然れバ氏宗氏義胞兄弟の大父なりは
 大館二郎宗氏主元弘三年北朝の正夏五月新田殿貞の隊に属て鎌倉にて陣歿せしより父祖
 三世忠義撓まず南朝の爲に始終死力を盡したる勇將なりしも夢の世に皆是齋齋とあり
 果て郎君の爲にしも後見をせん者もあらざ臙郎君の母上の産後の病着肥立すして五稔前に
 世を逝給ひ今亦れん父少將の弓折れ勢究りて往方も定めず落亡給ふと辞訪ふもの軒端の
 松風簀子の下に鳴く虫より外に絶てなきものかと獨大六英厚の大館氏の庶流にて忠臣無
 二のものなりけれバ則君生れ給ひし比より英直を傳られて妻の母屋を郎君の乳母にぞせら
 れける只是のみにあらざして義隆四十一の歳に郎君生れ給ひしかバ俗よいふ四十二の二
 歳兒也恁る子の二親に幸あらずとて俗よ思へバ義隆朝臣もその義に據りて郎君に襁褓の
 中より大館氏を冒らして英直が兒とも見よとて乳名さへに英直の俗稱よ因みて小六丸と名
 づけさせ給ひけり恁ま由緒ある主従なれば義隆武藏へ落給ふ折英直夫婦と召近つけて俺
 今日方を鳩ん爲に武藏と投て赴けども那者とても敵地にあるなれば安危を越に科りがたか
 りそを愁に穉兒を携ん便なき所爲也然らでも武運盡くに由なく父子一所に撃れなばいよ

遺恨の事あるべし汝の這地に留りて迹を埋め貌を變て小六丸を守育よしからんに今
 番の伴よ立て先途を看たらんより遙く優て第一の忠臣と名もいせんよくせよかしと宣示し
 て家の系圖と重代の菊一文字の名刀を英直に預け給ひけり是により英直の妻の母家共侶に
 小六丸に冊きて姓名を變形貌を變し關と渡瀬の間なる字を楯鏡といふ冷色よて禰小なる白
 屋を購求め僅に膝を容たれども鄙語にいふ坐して食バ山も空しき譬論に漏れず貯祿とても
 變たらねバ英直の箭竹を磨き母屋の糸を繰りなせしつ細き烟を立てどもあほ東西足らぬ
 そがうへに英直に一個の女兒ありそが名を信夫と喚做したるが小六丸と同庚にて今茲五才
 にありにけり母屋が乳傳に召されし比より乳母して字せしに英直が小六丸に俱して府城
 を落るとき女兒信夫が乳母よは身の暇を取せたり今の主従親子此み左も右もして育つ年
 稍七才になりし秋城隍祭の試樂の日に信夫のひとり外に出しを悪人なせよや扱されけん
 往方もしらせなりしがバ英直母屋の驚愛ひて日を歴るまでよ彼方を遣る限なく索しかど
 も竟に據もなかりしを忠義の爲に思ひ捨てなは郎君に恚もあきと幸也と思ひつ深くも
 潜ふ世にしめれば小六丸を英直が家子也と人に告て荷にも主従のごとくにせず小六丸

にも成長の後に至て、（せいのちのちのち） 悉くと素生を知らしむらせんと思ひにければ、何事もいひで歳月を歴る（ま）。隨に小六丸の英直親子を實の親也女弟ぞと思ひとりつゝ、時々信夫が事をいひ出て、（い） 袂を濡したる穉き身にも孝友に賢しきを見つ聞もせし英直母屋の辱さに泣じとそれを島通鳥らさを遣る瀬のなかりける艱苦の中に年關て應永も既にはや十年になりしかば、小六丸の年も稍九才にぞあり給ふ去歲の春より英直の生活の暇ある毎に手習讀書を教まらせ行儀正しくものせしに、その性伶俐かりければ、（た） 一を聞て二三を知る子貢が賢才あるのまならで人權せども駭かせ又これ子路が武勇あるべき久後憑じかりければ、英直夫婦の歡しく思ふにつきて心にかゝるへ主君少將のうへなりけりはや五稔になるまでになほ御本意を遂給ひねば、（こ） づれの里にか整伏れてをいしすすらんと思へども然とて訪んよとがもわらず其方の空を左もすれば眺めくらしつ不樂つゝ在りしに、今茲三月の下浣微吹との風の音の信り義隆朝臣のこの年來武藏相模路に世と潜びて舊思ある武士勇卒を招集んとし給へども世にづれ勢に従ひて義に仗り道を守るの稀也、（し） 愁にいひ出て毛を吹き疵を求るとのなかりせやいと遠慮して旅宿あがらに立とはやと光明を送り給ひつゝ去歲より相模の厚林ある某甲許御座せしに、

みちのく今も三十一町と六里又六里と一里と小みちとあり

猛可に腰痛の病痾發りて起居自在ならざりけり。この六七年年さきつ比陸奥の戰場よて落馬せしとわりけるが、今その撲傷の發りしならん湯治せば宜からんとて年來左右に從ひまつりし船田鳥山高柳江田堀口など喚れたる近臣、（ふ） 織に五名を將て驛に馳姑峰の麓路なる底倉に赴き給ひて姑湯治し給ふよしその方ざまより消息して、（あ） 詳細に聞えけり然程に英直のこの音耗を得てしより左さま右さま思ふやう右少將のおん痛着の撲傷のみにてまいらさば程なく瘡り給ひなん然とも老少不定の世也、（か） 尙その温泉の相應しからで餘病發らせ給ひさば臍を噬とちからせや遣首にてもを思はんより豫て仰置れたる御誨に違ふとも郎君に俱し奉りいかで相摸よ赴きて御容体をも伺ふべく今の大さうなり給ひたる郎君を外あがら見せ奉るゝ優とあらじと尋思としつゝ母屋にのみ思ふこゝろを聳き示して、（さ） 猛可に逆旅の準備を整へ小六丸にのみの里の住むしさに皆共侶に相摸なる親族許越く也といひ誘て却里人にもき々として速別を告て家具雜具いへばさら也家を借て盤纏としつ主従夫婦織に三名最慌忙しく首途しつゝ相摸を投ていそぎけり却説館大六郎英直の妻の母屋で共侶に小六丸を扶掖てその日大路三十六七八里を走りて馳て宿りを投め稍三四日をゆく程よ折しも拜月

の初旬にめなれば天寒からず暑からず馬の尾筋に追る、蠅も千里ゆくらん俺もかも去向の
いと、長き日に睡癖つく早百合の花珍しく開初し野田に注連結ふ種御し翌こそ踏さめ厚薄
き山の新樹は朝露降らねばよまや蘆鶴の集る方遠く見かへれば快過よとてや喚子鳥おはつ
かあしといへばえにいので夫婦が慰る尙総角の初旅路日數累ねて武藏なる澁谷の郷を過り
し比より英直猛に胸隔疼みて心地死ぬべく思ひしをなほ然らぬ面色してこの夜の假名川さ
る客店に宿投りつ初て母屋に箇様々々と恙あるよしを知して貯藏る丸薬を飲下しなごせし
かども些の効驗もあらざりければ母屋のさら也小六九も驚憂てわくよしもあく枕邊にとり
足方に侍りて背を捺りなごせる程に夏の夜なればとく明けり登時母屋の逆旅主人に良人の
病着恁々と告て醫師を徵めしかば主人の聽てこゝろ得て這驛なる醫師許人を遣し召來たし
てよしを述て療治を請けり是により件の醫師の且英直の脈を診ひ容体を互細に諮て却退さ
て母屋収いふやう丈夫のこの月比大く心勞し給ひたるをなごや有つらん病症の心痛はて霜
露の恙にあらねば一ト町池と歩行を忌へし瘡る日まで逗留して等閑にな看とり給ひそと
尋きつ方薬を吹咀して復そ來りて出てゆきけり然程に母屋の宿の泥爐を借りて藥を煎

し良人に薦め小六九も心ばかりに側を去らで慰めつ六七日を歴る程は英直の絶なんとせ
し病苦聊退きて夜も日も呻吟かきなりしかとさほ一ナ日に半碗も粥を啜れるのみ也けり然
らぬだも旅の悲しきものあるに瘵兒の杖箭向の盾と憑みし人の草枕恁る旅宿に病臥たりし
瘵瘦と氣力の衰へを見るに就き思ふにつきて妻さへ子さへ心の憂ひの遣る方絶てささまで
にももの思ふ身の目睡もせぬ曉毎に聞く杜鵑も不如歸と鳴くとかいへど適もゆかれ陸奥よ
り遠く來よける悔しさを神に告佛に啣つ願甲斐ありや夏樹拉鎮守の神社へ兩個して迭代
に幾回かかよひ熟たる朝夕を籬笆の雪と見し花も長き日影に班消て立ことはやき兎月も
既に三十日適く也し此鎌倉より來といふ旅客們がうち譚ふと重紙戸隔なる這方の夫婦の心
ともなく聞く程に那旅容のいへけるやう脇屋少將義隆主の年來相摸なる所親許深く潜ひて
をいしけんそを知るものゝあかりしに近會恙あればにや従者織に四五名を俱して晚故峯の
麓路なる底倉へ赴給ひて且湯治し給ふ程は隣郷の人民なりける藤白棚九郎安同と喚るゝ
武士のいかにして聞知りけん快推寄て討捕れとて竊かに夜襲の準備をしつゝその身の隊兵
のみならぬ士兵野武士等さへ招聚へて百四五十名迎梅雨降ぞと夜に紛れ暗號と定めて辨

推帝來つ義隆主のをいしなと浴屋の四下を捕籠て叫と揚たる関の聲姑く鳴を静ませて
 馬乗找めし柵九郎四下に響く聲苛めく宮方の浴人ある脇屋義隆快出よ鎌倉管領家の御説
 に依て隣郷氣賀の人氏なる藤白柵九郎安同が多勢を以向ふたり遣な逃そな兵等と呼りる聲
 と共侶に齊一競ふ寄隊の軍兵色を到し戸を打破りて先を争ふ三三十名不替三七二十一稠入
 たり思ひがけなきとながら義隆主の近習の侍船田小二郎島山七郎堀口五郎江田唸柳これ彼
 五名よ過ぎれども孰劣ぬ忠臣勇士の必死の聲期に些も騒がすこゝろ得たりといふ隨ふ手に
 く大刀を抜翳し稠入る敵を砍伏し駈散し擊摩けて此を先途と戦ふたる烈しき修煉の刀尖
 に向ひしもの、誰か免れん眞領梨削車所鎌もて髪を變るとく瞬間に三三十人鮮血に塗みれ
 て軀ぶもあり兩個に成て伏もあり枕を並べ撃れけりさばれ寄手の視に餘る大勢なれば物と
 もせず自方の尸骸を踏踏々々嘘叫で直攻に前みし自方に遮られて後し皆弓に箭つがひて
 透間々を射たりける矢柄の今降る雨より繁く鳥夜に晃めく鎗長刀の雲間を洩るく月よりも
 隈あかりける奮撃突戰何時果べしとも見白ざりけりしものあれども衆寡の勢ひ人鎖石にあ
 らざれば然しも一人の當千の船田鳥山江田堀口高柳等の一個として數ヶ所深痕を負ぬもな
 ければ是まで也と思ひけん近づく敵と引組んで刺違々々雨夜の星をさざりなく一歩も去ら

で戦歿しけん多く得がたき勇士等也有恁程に義隆主の出居の杉戸を盾にしつ用心の爲枕に
 建たる角弓拿て差詰鬱詰敵十四五名射て仆ふしたる箭種も竭んどせし折近臣等の皆撃れ
 しかば誘然らば退きて腹を切らんと獨語て臥房を投て入り給ふを藤白が昆弟也ける田子勇
 傳次屹と見て鎗を拵て跟て來つ耶と聲被て刺んとせしを義隆閃りと身を反し輕巻左手に圍
 まへ留めて透さす右手を拔取る刀頭を見かへり乍擲ち給へばねらひ違へる勇傳次の胸前丁
 と撃申ぬかれて苦と叫びし聲と共に仰反仆れて息絶たりその間に義隆主の奥ある一室に退
 きて腹掻切てぞ俯給ふ最期に本月廿四日 應永十年の眞夜中比の事にして享年四十九歳と聞
 ねし痛しいかき三世の名將南朝股肱の武臣ありしも多年の大義時至らで命運其處に竭給へ
 ば藤白連が鈍き軍慮に攻惱されておん腹を斫されたることを無慙あれ然程に藤白柵九郎安同
 の隊勢に下知して脇屋殿のおん首級を賜らせこの餘近臣五名の首級も知れものはそのなを
 尋ねて一箇々々牌を付首函に歛め相携て次の日管領の御館へまわりて恁々と聞ねおげし
 かは當主鎌倉の管領足利滿兼朝臣 基氏の子 斜ならず歡び給ひて懸て首級實檢有却柵九郎よ
 宣ふやら義隆の朝敵にて且當家累世の誓なれば獲に他が陸奥を没落しつと聞ねし比よりを



さく往方を索ねしかども。久しく知るよしあかりしに。安同輒く討捕てまぬらせし事神妙也。この義京師へ注進に及ぶの日。室町殿も大かたならぬ満足よこそ思召し。迺這回の功賞として。安同に氣賀底倉二ヶ莊を賜ふもの也。又隊兵にも功あるに感状を取とべし。今より本府に在往して。なほ忠勤を勵むべし。とつから仰下されければ。棚九郎の身に餘る恩と拜して退出けり。恁而又その次の日に。義隆主従の首級共を由比の濱邊に梟られしを。我目前に見て來たり。その爲体の恁々なりむかし野間の内海にて。義朝主の撃れしたも又そのおん孫頼家卿の伊豆の修善寺にて絞られしも。這回底倉にて。義隆主の撃れしも皆浴室也。恁れバ源氏の大將達の三箇あがら浴室をのみ死所にし給ひし。不思議の事よあらずやと寝ながら話説と相宿の外の哀れを知らせ鏡よ一調高き離聲の雲時旅宿の愛遣し人愈然なりと應つ。嘆息の外なかりしを。渡聞く母屋の初より頭顱擡し良人と俱ふ。故る耳轟く胸の内や苦しき泣聲を立じとて楚と喘締る袖に涙の玉霰散りしとをまた知らぬ。小六丸さへ義に聴ければ。快らぬ世の轉變よ。拳を捺る憐みより英直の堪がたき愁歎遺恨に。腸斷れ忽地に胸塞りて。一ト聲高く叫びつ。血を吐くと夥しく仰ぎまに控と倒れしかば。母屋のさらなり小六丸もこの什麼いかにと

驚騒ぎて抱起しつ呼活る聲に主人も走り來つ共侶に勸りて人を醫師の宿所へ走らせ召來たし藥を徵めし。術擡に由斷をけれバや英直のやうやくに。われにかへりて主人と醫師に歎びを術てさり氣なくふた。び枕よ就たれども左ても右ても本復の心もとなく思しか。バ腫られぬ隨にその通宵ひとり久後の深念をそるに。右少將をいふ。隆の御武運微く撃れ給ひしと聲をし。我亦こゝに命終らば誰か又郎君に守圍きて養育せん。新田の餘類と知るならば。兪擊捕んとおもふのみにて。一ト日もれ宿を致んもの。なき世になりしといかや。せん傳聞に。藤澤よの野上史著演と喚れたる最饒裕なる郷士あり。世に有がたき豪傑にて。義を守ると城の如く惡を病むと仇の若く弱きを資け。我たるを憐み生平。施を好みて財貨を惜まらず。その性をさく。俠氣ありて。勢利に隸かず。權家に媚ひ。老嚮よ鄰郡近郷なる戰死の鬪骸一萬餘級を集めて。塚と築き好事を修行し。慈善の譽を得たりとぞ。知るも知らぬも人いふなる。今の世にして小六殿を託さんもの。那人ならで。亦あるべしと思ひねども。我この年來縁をければ。まだ一面の交りあらずよしや。我身の死後に至りて。書を寄せ毫にいのするとも。何といふべし。術もあし。いかにすべしと思ひ難て。左さま右さま尋思をしつ。僅に便點を得たりしかば。その詰且小六丸

と母屋も側にをらぬ折辛して身を起しいと長やかなる白紙を書状のごとく巻籠て手づから固く封皮をしつゝ墨斗の筆と振筆で野上史殿まゐらとる新田の餘類館大六郎英直とやうやくに標寫し果て息吻めへずその封状を枕の下へ布んとて思はず撲地と臥たりける恠まで危き病痾より苦しき世とてあられ也。

第二回

遺訓に依て賢童踏躑を知る
旅概を迎て義士母子を憐む

却説この朝小六丸の又只親の病着の平愈をけふも祈らんとて鎮守の神社へまゐりしかば英直の母屋を呼て扶起させそが儘に枕に靠れて權の四下よころをつけさせて再側に招き近つけ然らでも細りし聲を低めて渾家へ何と思ふらん右少將主従の底倉にて擧れ給ひしその事既に分明なれば宿念六日の昌蒲になりたりそのみならで我露命はや旦夕に還りたり恠てむぢくなるならば何人か亦郎君を一日も舎敷まゐらそと今この世の人心新田の餘類の樹を伐彈し草を焚燬しても索出さんとのみ思ふらめよしや隠形五遁の幻術隠襲笠ありとてもあめの下に小六殿を潜せ参らさんよすがもなきとなは幸に一個の知己ありそ

この假名川の驛より路程遠くもあらぬ相摸州藤澤の郷士にて野上史著演と喚做すものなり。幾歳我少かりし時鎌倉近く潜ゆきて敵地の虚實を探れとある主君の密誑を稟奉りて藤澤に旅宿しつ且く逗留したりし比那著演と邂逅て交淺からずある隨に迭に意中を諦せしより遂に捨がだき思ひありよつて寐を結びて異姓の兄弟になりたりきこれらによしに昨までも益なしと思ふて渾家に知らせず二十稔あまり歴し事なれども他へ義に叛くものゝあらず我死かば柩と共に小六殿に俱しまゐらせてはやく那首へ赴き給ふの故に病苦を忍びて著演へ與るべき書翰一通寫め措たり那宿所に到らん日これを主人に遞與しなば留られんと疑ひなし。しかりとも小六殿の主君のおん子なるよし著演にもあを匿みて是までのことく我々が兒也といへんと勿論也又小六殿にもしりぞかし櫛櫛の中より手人又被て育まゐらせたりけれバ只、我を實の父實の母とのみ思ふておん二親のうへへさら也新田の餘類なるをたよもまだ告されば知し召れず痛じき事限りもなきをばや九歳になり給へば世を潜女身の情由をのみ知せまつりて後々の用心に備へせむ不覺を覺せ給ふとあらんこの義をこゝろ得給へかし却去後小六殿の年十五六になり給へば竊に素生を告まうして嚮に大殿右少將の遺

し給ひし系圖の一卷、一文字上に見えたり。この餘の東西も遺なく、返與しまわぬ。然るときは、
 渾家の功績、良人に代る忠也。貞なり久後、憑しかりぬべし。いられしとを方寸に収めて、渡し給
 ふ。あしくり返たる今般の遺言、一句毎、息迫ても、病苦に屈せぬ。忠義の魂、枕邊近く、措せたる行
 包の裡よりして、件の三種をとり出さして、封書と共に、返與せにぞ。母屋の涙にかきくれて、慰め
 難し。後の事いられし事を云云と、汲見ていと、臆向ふ心細輪の田井の水とみ易からぬ。世にな
 がらへて、いかに成べき身の往方、別れ悲しき生死の海によるべの岸をなみ、底量りなく千仞成
 ふかき、歎きに俯淪みしを思ひかへしつ、頭を擡て、宣ふよし、の悉く皆是忠義の爲にして、理りな
 らぬ事もなきをよくと、る得て侍れども、然しも覺期なほは、やかり假染ならぬ病着に、搦て
 加ひて、底倉の凶計の洩聞、はしより、藥餌もすゝみ給ひぬ。から世に長からじと思ひ給ふのみづ
 から、棄るゝ侍らせや、果敢なき、浮世の口順も、死して千年を歴たらんより、生て一ト日を勝れ
 るといふものあるを、いかまぞや、及ぶぬまでも、將息して、養育君のおん爲に、年を延んと思ひ、ず
 に心よわき、八年来の氣質に、似げなく侍るゆり、返らぬ事を思ひ出で、いんん、愚痴に侍れども、
 信夫がうへに事もなく、在らば、今茲の九歳也。かゝる折、よの慰めて、親の爲に、しなるべさに、世に

ありなしも、しらぬ火の築石の盡處、歎京師のぞら、歎事ばかり、かさねきて、おによし、絶てなつ
 衣薄き親子の縁し、はこそ、啣つを、英直推禁めて、益なき、諄言人にや、聞れん、信夫が事、不便也。
 と思ひぬに、わらぬとも、忠臣の親とも、忘る況、幼穉き女の子の事を、今さら思ふ暇、わらぬ哀別
 離苦の、悟道の捷徑、しかりとして、後世のみを、念して、我樂んで、死を俟たや、主君の、誓たる、藤白奴を
 撃たで、この儘、黄泉の客と、ありなんとの、朽をしく、九の世を、あゆるとも、忘るゝよし、なき、怨なれ
 ども、定業なら、いかい、いせん、丸のか、へらせ、給ひぬ、間に、快その、三種を取、藏め、せやと、勵されて
 も、ちからなき、妻のやうやく、引締とる、行袂、舊の如く、東西とり、歛れて、引結び、中帯、被る、韓組紐
 の、断れて、短くなりぬれ、と、長き、別れを、後に、知る言の、端さへ、表れて、燈火、滅んど、するとき、さよ、光り
 を、増せし、例も、似たる、英直が、病痾、間ありて、盡せし、遺訓を、健氣ある、然程に、英直の、その、夜艾より
 胸痛の、病苦、ふたゝ、び劇しく、なりて、又、血を、多く、吐きしかば、母屋、小六丸も、共侶に、胸を、苦しめ、愛
 悶て、湯藥を、しやく、薦しかども、英直の、衰果で、水粒、共に、吐に、下らぬ、次の、日の、臘昏に、一ト、聲叫
 で、呼吸、絶たせ、危ゆるべし、と、涙より、思ひ、ひび、しに、わらぬ、とも、又、今さらの、事に、覺し、母屋、小
 六丸の、哀傷、悲感、の、響るに、物な、かるべし、泡沫、夢幻の、浮世を、映て、生死、流轉の、苦海に、漂ひ、また、來

も果ぬ旅衣を經字衫に脱更て往て返らぬ人の數に入りて心人を留め難し妻の孤雁の伴侶も
 後れ子に亦狙猴の林木に離れし至悲斷腸の血の涙呼べと答もぐらなしの花塗椀に白粥の枕
 遺る一身もさめて果敢なき夢の跡見れば思へば身ひとつよかゝる歎きを知らず貌も緯訪
 ふ者なきものから亦只逆旅主人のみ正首に慰めて不慮にお宿と致せし夜よりねん夫子の
 長き病着竟に瘡り給ひせして這間で身まかり給ひしかば御後悔も推量られて不便いふべう
 もいへせ亡骸を本驛に葬らんとならば地方の法わり私に執措かたかり驛長の指揮を稟て
 左も右もつかまつらん或はこゝより近きわたりは由縁の方ざまあどわりてその人許亡骸を
 引とらせんと思ひ給ひ驛長に報るに及ばせ御こゝろ任せならんものといふに母屋の涙を
 といめていへる趣こゝろ得侍り一河の流を汲むとも一樹の蔭に寄るものも皆是他生は縁
 しぞと世よひへをも殊さらばなき人の病中より大かたならぬ厄介になり侍りたる甲斐も
 なく道首にて身まかり侍りし過世ありてのことにこそあらめ知るゝごとく女の身ひとつ十
 才も足ぬ子ひとりなるに隣知らずの旅宿にて憐る不幸にあひ侍りぬる心細さを察し給ひ
 いこの後とてもおは日く商量敵手になりて給ひね頼りの事な亡も亡夫の遺言あり道首より

しと遠くもあらぬ藤澤に亡夫の舊由縁の侍るかしその名ばかりの這間にも傳聞れしとも
 あらん野上史と喚れたる地方に世を歴し御士に侍り年來疏遠なりしかを適て頼まば身に引
 請て葬の事母子のうへさへ等閑にせらるべからし翌の夙めて亡骸を行橋より乗して藤
 澤へ供してゆかまほしこの義を憑み侍るなりといふに主人のこゝろ得て野上大人の高名な
 る這間でしらぬものなきに那人さまの大かたならぬ慈善にして俠氣あり戦死の獨體一萬餘
 級を葬り給ひし仁者にをいせばこれに優たる由縁あらんや然る人さまの近郷に在りぞ知り
 つゝ病中になどて告遣り給ひざりけん憂苦も他事を迷れ給ひし女儀の脱落歎是非に及ばず
 然らば恚つかまつらん箇様々々にし給へと翌の準備を助言しつ快桶をかかぬをその夕昏
 よ買と、のへその身も馳て手傳ふて英直の亡骸を件の柩に歛めけり恚而母屋のその通柄良
 人の柩をうち成りたるその甲夜間も小六丸に密びやかに示すやう阿兒のいまだ知るべし
 御父公の薪田の餘類にて脇屋殿の御家臣なりき去るに御主君少將さまの陸奥を落給ひし折
 なまじひに執遣されて御在處だも知で有心に今茲に相摸の底倉に御座とよし聞かしか心實
 の那處へまゆらんとて起行給ひし甲斐もなく二日路に足らぬ程にして病ひの爲に推留られ

本意を得遂ず御主君の庭倉まで撃れ給ひ、公も遂に世を逃り給ひて、緯のこゝに及べる也。誓は償は報たりし野止ぬしの事、しも吾情もいまだ對面せず、名を聞くも這回はじめてなれども、昔歳々公と義を結びて弟となり兄となられし好み、れは骨肉の親類より優して憑しからん。那處へゆきて身と寓せよといひ遣し給ひに、きしかりあれども世に憚る親子がうへを人に知れて、緯の難義も及ん日のあらしとぞ思ひ決めかたかり小六八年尙十にも足らぬ。総角あれこれらのよしをいまだ知さで過せしかども、竊に示して覺期をさせよといわれ、志ともはへりたり外にな洩し給ひると告るをうち聞く小六丸の落る涙を、振絞る頭を擡て貌を更め仰うけり、ひひぬ脇屋殿の陸奥を落させ給ひし比、しも我四五才許ある時にもや有つらん見果ぬ夢の心地して人の噂に聞たるのみ、親の故主でをりせしを知ざりしに、そ悔しけれ今さらいふかひなきとながら、公のうへに恙もなくはやく那處へまゐり着て、俱に戦致し給ひ、左ても右ても存命がたき本意に愜せ給ひんに、なまじひに生遺たる我身も同恨なれいかで故主の警敵、那藤白を討捕て、禮を思ひ奉らん且く俟せ給ひねといひつゝ、腕を扼れ、母屋の吐嗟と推禁めてや、聲高人もや聲かん獅子の生れしその日より百獸威伏の勢はひあり蛇蝎

の僅に一寸あるも物を呑んと欲する氣ありといふの、儕のうへにも似たり、年に倍て遠く響と撃んと、いづるを叱るに、あらねども潜れぬ世を、潜ふ身に、崇なくの幸ひならん及ばぬ事を思ひ起して、氣色を人に悟られなば、親さへ身さへ亡ぶべし不覺にもものをいふまかひと、做られて小六丸の過言なりと、思ひけん誠に然なりと、應つゝとやくも口と、銚たり然程にその夜さり母屋の主人に、儲賃と醫師の謝銀、椀の價行、輪の損料まで、いづるに、隨に遺さく還して後や、そしと思ひつゝ、俟といたしに、夏の夜の向明とする比、は豫て宿より、詭たる兩個の轎夫、門の時を違へ、走無常籠輿をうち肩掛て來つゝ、恁々と叩門に、主人の聽て、指揮して、柩を擡起させ、て件の籠輿に乗せ、さきと是より先に、母屋小六の早飯を薦られて、齊一膳に向ひしかども、恁る折に、の箸も進まず、身装しつゝ、行包の籠輿にも、附け親子も、眺みて、草鞋を引提て、出ると、主人并に家の内なる女婢們も、別れを告たる口、誼も胸のみ、塞りて、鮮寡く、哀情多かりと、かくとせる程に、天の明て、茂林をはなる、鳥の聲も、常よかわりて、心裏哀しく、涙は路のわかねども、去向の僅に坂東路一里三十里に、足らざるに、最も日長き比なれば、いまだ亭午にならぬ間に、件の籠輿に引添ふては、や藤澤の郷に來にけり、世は知られたる野上の宿、所の隠れあるべうあらざれ

母屋の籠輿をうち御さして故意後門より抄み入り兩三聲呼門程に執次の若黨なるべし應
と答て立出けり登時母屋の小腰を折めて奴家の道里の御主人は親類某甲が妻子より侍り密に
憑み奉るべきよしありて備總角なる拙郎を俱してはるゝと來つるもの也此よし稟し給へ
かしといふに件の報次人のこゝろ得果て退きつ且して又出て來つ勝こなたへとて先に立
客房へ案内をしけり當下母屋の小六丸を後門前に遣し措きて英直の柩を成らせその身引
れてとが儘に客房へ赴けり娘なるべし少き女子の茶を看めあとしけり有恚し程に著演の
執次の若黨の恚々と告しとき獨こゝろよ訝りて我の他郷に親類なし什麼何人の妻ありけん
こゝろ得がたき客にこそと思ふものから然氣なく且客房の案内をさせて茶を看めさせなど
する程よ遠しく袴を穿つ、一刀を腰よして出て遇んとしつる折隔亮の際より間窺るにいま
だ認めぬ婦人也今對面して詳し問ふにあらすはいかまして我疑ひを解くよしあらんと思ひ
にけれバ咳きながら客房に進み入て扱母屋に對ひていふやう某則野上史著演でいもよく
こそ訪せ給ひたれ親類の妻子ぞと報られたりしを當面に問ふは無禮に似たれども今まで對
面せしとなければ何處の人にてをらすらん聊疑惑なきにあらす願ふに名告らせ給へかしと

いひれて母屋の四下を見かへりおん疑ひの理りなり人傳よの告がたき世に憚りのよしも侍
れべいと无禮んとの思ひながらいまだ名告らで侍りにきこの義を察し給ひてよといふに著
演領きてその然るともあるべからん我家の奴婢の心腹のものは波聞とて悪から
ず況四下に人なしとくく示し給ひぬとふたゝび問れて今さらに匿むべくもあらざれば
しからば允させ給へと膝を打て聳くやう奴家の年來陸奥ある楫鎖の里に僑居せし館大六
郎英直が妻よして母屋と喚るゝものよ侍り那地の闘戰敗れし折良人英直の故ありて主君に
別れ奉りそれより以來おん在處を知るよしなれば思ひ不樂て五年あまりを過せしに今
茲に相摸の片山里に御居せよし聞はしかばいかで主君の見參に入らばやと思ひ起しつゝ奴
家と今茲五才なる獨子小六を携て極可に逆旅の準備を整へ相摸路を投て急ぐ程に武藏の假
名川まで來つるその夜よりうたそや良人の胸痛の病着にうち臥て意からせも假名川なる客
店に逗留の日數を其首よ累もつ晦近くなりし比世の風聲に隠れもなく主君のうへに事あり
けりと聞ゆれば良人の御天是より病苦も初に倍して遺恨やる方なかりけん血を吐くと
覺しくこの後僅に三日にして竟に息絶侍りにきその終焉の前一日聊病ひの聞ありし折いひ

遺されしとはべり二十年ばかり前つ比良人の主君の仰を棄て這地に來つゝ逗留せし折恠々の事により竊にねん身と義と結びて弟となり兄とあられしその緯の趣を初て奴家に説示して我と那人といかくの如く素より異姓の兄弟なれども相別れしより天の一方山河千里を隔たるわが身年來多事也ければ胡越のごとく過したり然ればとて野上生の義に背くべくもあらざ我死あば柩を擡て那里に到りてよしを報よ契りしことを忘れずして汝們母子を憐れんず那人の戦死の鬪體一萬餘級を購集めて壘りにさきと聞えたる信實慈善二人と得がたき海内一の俠者也今の世にして英直が妻と子供を憑んもの那人あらで誰やのある這義を心得いへと町寧に遺言しつゝ、病苦を忍びて寫指たる書翰をその折源與されたりこを綴さば漏たるをも具に知られ得りてんいかで御庇を仰ぐのみといふ聲雲る袖の雨蓑代衣にあらぬとも照る日に疎き世を陝布の行袂をうち披きて英直が遺したる那一封を遞與すにぞ著演いひなれしよしの緯ひとつとして記憶のあらず素よりしらぬ情由なれども且その書翰を受とりて見れば正しく標識に野上史殿まゆらとる新田餘類館大六郎英直とあり臚て封皮を推折きて披きて見れば白紙也訝しき事限りもなきを然らぬ貌にてさやくとそが儘はやく巻籠て肚裏

まおもふやう英直我と一面の交りあるにあらねども我行狀を傳聞て妻子を託せんと欲するに書記すべしよしのなければ標書にのみ姓名を寫して白紙を封せしむらぬいふに優るといふ苦しき意中を示せしならん然るを其身の姓名に新田餘類と題書したるの忌憚るべき素生を隠さず悔わらせじとの赤心なれどもその本心を妻子よそら明々地に知らせずして異姓の兄弟なるよしにいひ瞞めつゝ恠々ど我に對して告させし白紙の狀の自注よて世に憚りある人の妻子を知るといふとも義の爲に後難を辭せずして必よく扶持すべし著演也と思ひれけん倘然らざらばいづにして是等の事に及んや聞くが如きは英直の脇屋少將義隆朝臣の家諱あるを疑ひなし我大父著佐大人の新田左中將に從ひて元弘に功ありといへとも義貞亡させ給ひしかば世を憤り退隱せしより不肖の我身に至るまで出て足利家仕へざりき那英直のこれらのよむを知りたるや知ざるやそは左まれ右もわれ今この母子を家に留めて羈旅の難義を極す未見の知己に背くべく父祖の遺念は違ふに似たり嗚呼然なりと立地よ尋思をしつゝ母屋に對ひて自今示談せられたる緯の趣實に由わり館生といふ少かりし時天地に誓ひ義を結びて竊に異姓の兄弟になりけるものを這郷へ程遠からぬ假名川の旅亭に病て

身まかるまでなきてや告も来さうりけん只一たびも訪ひずして長き別れになりたる遺
 憾を猜し給ひね非如自筆の書翰きくともその妻その子よ訪るゝといかでか強面くものと
 べき況その終は臨みて恚叮嗶ある一通を遣されたれば今さらに疑ふべくもあらせかし些も
 介意し給ふなげうよりれん身母子のうへに著演が身に引受て生涯疎略にそへからせ扱も極
 と子息を何處に遣し給ひたる詣來給ひし初より側に引着措きひせで我等に隔あるべきや
 と世に懇しく承引れたる人の誠に又袖濡らす母屋の扉をうちかきて年來良人の疎遠なりし
 を舊契りに違はせ給ひていと美しされん應の歎きの中の歡びにてなき人の爲よしも是に優
 たる追薦の亦あるべうもあらせかし小六の柩を成らして後門前に遣し措きにさ緋恚々を報
 知せなばさを辱く思ひ侍らん快歡し侍るべしといひつゝ立を推禁めてやよなほ雲時這首に
 坐せよ我等の禮服に更めて俱に柩を迎ふべしと言せわしく説示して掌うち鳴らせば一個
 の若黨應をしつゝ遠しく來にけるを側に招き近づけて汝等もこゝろ得よ後門前にも來客の
 り総角なるハ我侄也そがうち成る旅柩はいぬる日假名川なる客店にて身まかりたる我親類
 の亡骸なるぞ今我出て迎へければ汝ハ老僕と侶共ハ莊客四名許にて我侄に恚々と報て柩を

成れかし快くせよと急いで追立遣りつゝ母屋に對ひて自今聞れたる如く某ハ興へ退りて御
 母子來意の趣を荆妻にも知せべくはやく衣裳を更めて柩を這首へ迎入れてん且く允し給ひ
 ぬと辭して興へ退きたる發時著演の妻の晩稻ハ母屋親子の縁由を説示すに件の機密をあ
 らいさす英直を年來の義兄弟ぞとのみいひ知して猛に凶服に衣更させその身も衣裳を更め
 て復客房より出て來つ誘とばかりに母屋と俱に後門前へ赴く程に母屋の先へ走りつゝ小六丸
 に著演が承引て今柩を迎る緋の首尾を告しかば小六丸ハ感涙の進むを覺す柩を離れては
 や著演をぞ迎へける著演遙にこれを見遠しく進み近づき和服ハ小六賊我こそハ和服の伯父
 なれ著演也旅亭に父を喪ひたる哀傷艱苦を推量れば痛まじきこといふべうもあらす然れば
 とてうち歎くとも死したる親の懸るにわらねばみづから愛して後榮を搦るも亦是孝どかし
 任ハ猶子のごとしと禮記に本文見えたればけふよりして著演を父とれもひね我も亦子也と
 思ふて養育せんよろづに後やすかるべしと慰められて小六丸ハ忝しく拜し見はて時の不祥
 にゆくりなく蔭によるべの歡びを述る言葉の露よりも脆き涙ハ孝子の情狀年才に倍して
 大人しき達止に著演の且感じ且促して莊客們ハ指揮しつ柩を乗したる行籠輿を受取してぞ

門内へ徐に擡入させける。是よりの下着演が諷ふ趣甚麽ぞや。その次の巻のはじめは解分るを聴ぬかし。

開卷奇驚俠客傳第一集卷之一終

開卷奇驚俠客傳第壹集卷之二

第三回

黒夜を照して螢火海濱に導く。明察に誇りて風聲恥辱を被る。

其説野上史著演の後門前より立出て小六丸は對面しつ。莊客們を急してそが儘に英直が柩を宿所へ迎容れて且客房に處させたり。登時母屋小六丸も俱に柩の後方に跟きて躡て客房に赴く程に著演の妻晚稻はやく凶服に更て這所へ俟てをり母屋小六丸は對面きて哀戚の涙を拭ひあへず遠く他郷は旅宿して父を喪ひ良人に後れし悼み然こそと正首に舒て勵り慰れは母屋のざら也小六丸も思ふにましたる主人夫婦の恁丁寧なる款待態に且感じ且うち歎きて姑くの應も得せず繫ぬ舟の竿絶ててこゝをよるべの磯衝なく音と共に久後までの親子のうへを

ぞ想みける恁し程に著演の英直の柩を昇て送り來ぬる轎夫們は酒價に錢を取らせあせして籠輿共侶は返し遣し却出居の北のかたなる一室を猛可に播播して机案二脚を上座に推並て臺にしつ柩を這首に移さして屏風をもて亮格子とその餘も三方を隔遮らしたる前机より櫛を立香を焼つゝ手向の飯の準備はやくも整ひしかば誘として母屋と小六丸を齊一立して拜さしめ次に著演立替り進向ひて合掌し心の中に念とるやう維我未見の兄弟館生尙靈わらば著演が只今報るよしを聴ぬ某弱冠の昔より惟兼愛と旨として人の危窮を救ふといへども位高く富榮て民の父母たるものならねばその九牛の一毛のみ普く人に施すに由なく虛名徒に年を歴て徳の非薄を差たりしに豈思はんや和殿に知られてその妻と子を託せらるゝに。迺空翰を以し未亡の人母屋をよいにするは異姓の兄弟ある義をもてせらる。因て竊に推量るに紙中又一字も寫れざりしに千万言にもなほ優て人を知りたる意味深かりされば唐山の常言にも女子の己を歡ぶものゝ爲に勉て眺くり男子の己を知るものゝ爲に必死するといへり。某既に和殿に知られてかくの如き遺託ありいかでか死力を盡さるべき。只這奇偶のみならず和殿ハ則新田の類族脇屋次將の家臣なるべし我大父野上目の贈中納言義貞卿の鎌倉攻は從ひ

まつりて元弘に功ありしもの也。料ら老又這舊縁あり何でふ一時の値偶ならんや。陰鬼陽人異
 ちれども柩を留めて義を結びぬ。應に異姓の兄弟たるべくけふより總麻なり。九十日の服を稟て威
 々の情を盡とべし。恚れば内室分郎のうへに萬事に後やどかりてん妹と思ひ我兒とおもひて
 致るに師を擇み禍を避け侮りを禦ぎて人とあさまく欲す某天性不幸にして齡半白に近かる
 まで絶て一個も嗣のあらざいかで小六が成長を待て我這莊園を譲りて俱に祀を受ん。是某が
 情願也。微言誠を示とに足らず。衷情述るに餘りあり。即便香華の清奠を薦めて旅魂を迎るもの
 也。冀くは纏給ひね彌陀佛々々と唱れば。晚稻も良人の後方に侍りて念誦の時を移しけり。緯
 果て野上夫婦の母屋小六丸に飯を差めて旅宿の艱苦を問慰めいと懇切に管待と程に事多け
 れば。莖薪長き日ながら果敢なく暮れて又夕饌を薦めらる。羹菜の一種にして精進にこそるを
 用ひられたる母屋の今帯も柩を成りて明さんといひけるを著演聞て頭をうち掉り。おん身の
 なら人の病中より睡ざりける疲勞もあらん。我門夫婦にうち任して息子と俱に這次の間へ快
 退さして就寢給へ臥置も儲てあらん。すといふを母屋の推かへして。その辱く侍れども非如幾夜
 艾睡らずとも。一生涯の別れに侍ればいかでか疲勞を敷ふべきと固辭むを晚稻も共にも諫

めて御こゝろざし然ることながら他人に任したもふよあらぬ。我く夫婦がかくて侍れば。
 今よひのはやく睡らせたまへつかれを増してやまひおこらばのちのうれひをいかにせん。
 またよくみづから愛するもその子の爲めにはべらせや。おん身の道首にとりそるほさ。小六
 どのも就寢たまひと快々休らひたまひねと夫婦齊一論したる。その言親切なりければ。母屋の
 竟に推辞かねて。小六丸と共侶に告別しつ退をきて。やうやく枕に就きにけり。然るほどに小
 六丸の睡らんとせむるに。いもねられ。老獨り熟々おもふやう。我父の亡骸の野上の翁の資けを得
 たれば。葬むりのことこそ。ろやどかりなほ朽をしくも悲しき。親の主君と聞てはたる。右少將
 の首級なり。由比の濱邊に梟けられしより終に。犬鳥の腹を肥やしやまらん。痛ましけれ。我
 假名川の宿に在りし時。那旅客等の噂に聞きし。六日己前のことなりければ。おん首級の今
 ひきは。那濱邊にこそ。あらん。せらめ。今よひ那首に潜ひゆきて。奪ひ取り。將て還りて。竊かに大人
 の柩のうちに斂めて。葬むりたてまつらば。便是主君の爲めに。また亡親のこゝろざしを繼
 ぎて。做すことありといひまし。我豫てより。是等の所行に。こゝろざしあるをもて。けふ假名川よ

り將て來つる轎夫等に問ひ試ろみて鎌倉路を租しれり這首を距ること遠くもあらねば鳥夜
 なりとても迷いんや嗚呼爾なりと肚の裏にかもひ決りつ快れども甲夜のほせの外見ありて
 出づるに便り宜ろしからねばしばらく時を移つをにぞ既にして人定まり母屋の疲勞れて熱
 暈やしけん只上の間ある主人の妻の咳ふき罕に聞こわけり小六丸の折こそよけれと夜着掻
 遣りつ身をおこして枕邊に措きたりける小刀を奪りて腰に跨たへ燈し火をうち滅して掻撈
 りながら潜び出で、縁類なる遣戸の末を半開らきて庭口より後門のかたにかもむくに奴婢
 等が甲夜の遮がしさに紛れてや忘れけんさいひにして角門のいまだ鎖さでありければ密
 と推し開けて走しり出づるに五月の天の癖あれば降りそふらそを定めなき如法開夜に辿る
 くも嚮又聞きしをこゝろ當に鎌倉を投して急げども人家離れて田に畔に岐道さへに多
 ければ去向の右敷ひだり敷とおもひかねつ、停在てせん術もなき折から駿蔭より忽然と
 許多の笠群飛びて小六丸の身邊に來つ、路を照らし先に進みて這の身の爲めに郷導を倣
 す歎と見白て奇なるかな車胤が夜學の燈し火に易ぬよきといふ故ことの人作にして自然に

あらざ此の是れ童子の忠孝を神明佛陀の相憐れみてかゝる冥助を錫ひけん小六丸のいまこ
 の奇特に感歎しつ、些とも礙々せせ盛の進むにむがひて只管に走しるほそにいまのはや
 坂東路一里十五六里にもおよびぬらんとおもふ比果たして由比の瀨に來にけりこの時まで
 も許多の燈のその四下を去らせしてなほも隈なく照らせしかば小六丸の怡悦に勝へを竊
 かに四下を見かへるに義隆主従六個の首級を掲げて小塘隄のうへに在り浸ましきことい
 ふべうもあらねど猶豫せば遂に成卒に知られやとらんとなおもふばかりは傍への樛樹の枝に
 携がりて走しり陟りつまたよく視るに主従の姓名の掛けたる牌に云くと紛れあるべう
 もあらざればいまだはじめて死顔を見るの實の父なりとい神ならぬ身の知るよしなきも
 自然と備ひる孝子の忠勇義隆のん首を扛抱さつ、樹下へそがま、檜と降り立ちたりか、
 りしほどは道の濱なる古屋に夜を成るを兒們が件の響きに駭ろき覺けん癖者ありと叫
 りて垂れたる庭戸拂ふがごとく突きひらかしつ兩三人手にく棒を引き提げて走しり出
 でつ、佶と見れば浦風和たる夏の夜の四下に群飛ぶ白千の螢火の光りの薪樵る鎌倉山の名
 にしかふ星月夜より鮮明かりこれそら今よひの一奇事なるに怪しむべし一個の童子が義隆



由比の濱よ小六
首級を奪ふ



梁野の葉

の首級を奪ふて走しり去らんとしてけるを他逃すなと呼りて先に進みし一個の乞兒が拿つたる棒を振り閃めかして撃ち倒さんとして走しり驚るを小六丸の快見かへりて脱れがたしどおもふよぞ左手に首級を取りなほし右手に小刀を引き抜きて受け流がし欲り拂らひて防ぎ戦かふほほしむあら老跡より進む兩個の乞兒が左右一捕り籠めて競ひかゝれる勢ほひになほも怯まぬ小六丸勇敢といへども九才の小腕に支へ得べうもあらぬべいと危うく見おたりけるかゝるところに一個の武士の夜行衣裳に覆面したるが小塘隄の橋より顯れ出で、拿つたる潜行蕉灯を投げ捨てつ走しりかゝりて小六丸の左右より撃たんと進む一個の乞兒の項髪掴み引さ着けて足と飛バして礮と蹴る蹴られて乞兒の身を空さまよ斤ヨリつ濱邊の石に勝を打たして吐嗟とばかり叫びもあへて仆れけりほほもあらせまた一人の利手を捕つて引き送らして肩に引掛けて投げしかば三間ばかり怪飛んで己が拿つたる捍棒にて頭を拂らひつゝ苦と叫ぶ聲の汀渚の友衛立ちたるまゝに仰反りて沙石に塗みれもがさたり先に進みし一個の乞兒の今このことの光景に駭るさ恐れ度を失ひて逃げんとするを小六丸の得たりと透さを跟入りて閃めかしたる刃の牙に乞兒の首を撃ち落されて

の後に倒れけりかゝりしほほに件の武士に投げ置まされし兩個の乞兒の苦痛と忍び身をかこして組まんと進むと件の武士のまた推隔て左右の手は兩個の手首捉り禁めて揉かへしまた投げ居て推累さねたる背のうへへ膝折布きて動かせどおもひがけなき援けを得たる小六丸の屹と見かへりて走しりよらんとしてけるを件の武士の手を抗げて這首管のぞに快ゆきぬと推禁めたる好意の一言主を離れとらしら浪の寄せては返へす真沙路の迹を埋めて歡こびを逃ふる間さき磯松原の樹の際立ち潜く故來しかたへへさば暁月の雨催ひ有りつる螢の見はせなりて雲の絶間に洩る星の路の宿潔に映りたる景を乗にいそぎけり然るほほに小六丸の好悪も別ぬ暗さ夜を足に信して走しりつゝ稍踰越まで來にける時暗號なるべし笛簫の音猛然と吹き暢りして首級竊兒を逃がすと罵しる諸聲騒がしく土兵幾人歎手にく蕉火振り照らして赶ふこと既に火急かり小六丸の這の形勢と見かへりながらおもふやう虎の胆を逃がれても蟻の口をいかいのせんざりとてこゝにて狗死にせば右少將のおん首級をとり復へさるゝのみあらで母御の歎きも痛ましく猶且恩人野上の翁を

運まき係けいせらるゝことあらば。そのた仇あだをもてい報いふに似たり。いまはや追兵おいつの近着ちかづきぬとも。また只時ただとき
 運うんを天あまに任まかして。脱のがれんものをと尋思しんしんをしつゝ。こゝろばかりの急いそげをも投なげて。往方むかへの野干玉のべたま
 の鳥夜やみにしあれば。替者かきの杖つえに離はなれたらんも。斯かくやと覺おぼえて。歩あしの運はこびの果敢はかをらぬ。後のちろに通とほ
 る雜兵ざいひやう等らが。見みめかしたる。十手じゆしゆの電光御でんくわご謎めさふと。呼よりて。捷あつを捷あつたせ。身みを淪しまして。閃ひら
 りと避よけたる。小六丸せうろくまるの一期いちごの危き窮きゆうに。こゝろ迷まひて。前まへ面に小川せがなのあるを覺おぼえ。その時とき追捕おいつの
 雜兵ざいひやうのあり。趕おひ携たり。耶やと聲こゑと被かけて。復またた捷あつ。十手じゆしゆと小六丸せうろくまるの背せに受うけて。快走くわいそうしる勢いきほひ。白しろ
 を輾まろ。バをとく。われにもあらで。件くだんの小川せがなへ。忽たちまち地水ぢすい入いり。陥おちりて。吐はき。叫こゑけ。女め聲こゑと。共いに。愕おど
 然ぜんとして。驚おどろさ。覺おぼれば。是これれあん。南柯なんかの夢ゆめに。ぞありける。小六丸せうろくまるの覺おぼての。後のちも。胸むねうち。騒さわぎて。安やす
 からぬ。こゝろを鎖くわめ。頭かぶを擡たげて。彼か此こと見みかへる。身みのあほ。甲夜かひのま。にして。母ははの側かたへに
 臥ふして。在あり。つゝ。とあもひ。惟たるに。我われか。ねて。より。右少將うしやうしやうの。おん。首級しゆきゆうのこと。こゝろに。か
 かりて。奪うばひ。取とら。ば。や。と。お。も。ひ。し。か。ば。それ。どの。なしに。輪夫りんぷ等らに。鎌倉路かまくらぢを。問とひ。し。こと
 あり。その。この。こと。の。爲ために。して。こゝろの。初旬しよじゆんの。鳥夜やみな。れば。潜ひその。ふに。便たり。よ。き。もの。が。ら。

不知あきら案内あんないの夜行よみちなる。逆さかその准備じゆんびもなく。不覺ふせきに出いて。過失あやまちあら。本意ほんいを得えず。ぬのみならず。這
 身みを其處そのところに。喪なふべし。と。了得りやうとく。危あやむよし。も。あ。れ。ば。い。ま。だ。果はたさ。で。思おもひ。寐ねの。勞頓ろうとんによりて。恁かまで
 に。奇あし。さ。夢ゆめさ。へ。見みし。に。や。あ。らん。然しかるに。て。も。夢ゆめの中なかに。俺われを。援たすけ。し。那武士なぶしを。誰たれと。知しる。よし。な。か
 り。しか。ぞ。も。語音ごおんの。野上ののの。翁おきなに。似にたり。き。件くだんの。翁おきなの。往いる。年とし。戰死せんしの。鬪とくろ。一ひと萬餘級まんじゆきゆうを。聚あ合あて。葬はなり。に
 さ。といふ。義氣ぎぎ任俠じんげきの。趣おもむきを。傳聞でんぶんたる。事ことしも。あ。れ。ば。右少將うしやうしやうの。おん。首級しゆきゆうを。隠かくさんと。欲ほしたる。同氣どうき
 同愛どうあい俺われ夢ゆめに入りて。幻まぼろし見みへたる。歎なげ尙なほ然しからん。に。俺意われい中ちゆうと。告つげて。資たすけに。做なそ。あ。ら。ば。それ。に。優やさしたる
 後見うしろみあらん。や。然しかと。て。果敢はかな。夢ゆめを。憑たのみて。明あ々あ地ぢに。譚かたひ。が。た。かり。い。か。に。と。べ。き。と。思おもひ。難かて。
 深念しんねんに。時ときを。移うつす。に。遊あそ行ぎやう寺じの。鐘枕かねまくらに。響ひびきて。窓まどより。し。ら。む。夏あつの。夜よの。明あく。と。て。鳥からの。屢しばしば鳴なけ。ば。母
 屋やの。さら。也。小六丸せうろくまるも。起出おきいでつ。激あぎ。て。懸かつ。て。樞しゆの。頭あたまに。ゆ。さ。て。主人しゆじん夫婦ふうふに。昨日きのうの。通夜つうやの。疲勞つかれさ。こ。そ
 と。問慰とんゐれ。ば。夫婦ふうふの。且しかく。う。ち。譚かたふ。て。辭ことして。便室べんしつに。ぞ。退しりぞき。ける。登時のぼるとき小六丸せうろくまるの。母親ははおやと。共い侶りよに。香かを
 燒水やきみづを。手て向むかて。樞しゆを。拜はいする。こゝろ。の中なかに。昨夜きのう夢ゆめみ。し。趣おもむきを。告つげて。冥助みやうすけと。默禱もくたうし。頭あたまを。擡たて。つ。ら。く。
 視みれ。び。ぎ。の。ふ。ま。で。の。あり。と。も。お。ぼ。へ。ぬ。樞しゆの。上うへに。置おけ。し。もの。あり。白布しろぬのの。大袂おほよろしきも。て。下した垂たる。
 まで。覆おほれた。れ。ば。な。に。か。あ。ら。ん。と。詠いふ。のみ。人ひとも。や。來きると。影護えいごさ。に。う。ち。も。披ひらか。で。あ。り。ける。に。

母屋の淨手に立にけり奴婢等も亦朝の炊きの遠しきに紛れてやまた茶を看るものもあけれ
 ば小六丸の這間にと思ふ心の慌しく柩の後へ立廻りて密と袂を掻揚て見れば水二三升装べ
 かりける六箇の小瓶をうち果ねて柩の上に措れし也訝しきといふべうもあらねば上なる一
 雙を拿卸し手ばやく蓋を推開きて見れば人の斬首ありその面影の夢に見たりし脇屋右少將
 に肯たりけるこの什麼いかにとばかりに駭嘆トてわくしよも亦く遺れる五箇の瓶もみま
 一箇々々にその内を見れば亦是首級也此彼夢想と暗令の奇特に感ざる多才の神童六箇の小
 瓶と故のごとく柩にのぼして速しく又袂をうち被て退き坐して手を又き事の情を案ずるに
 件の小瓶の内なる脇屋少將主従の首級なると疑ひなしおもふに昨夜あるじの翁のみづか
 ら那處に赴てこの陰徳を做したる歟然らば腹心のものをもて竊に奪取せしならんこれも
 亦我親の爲にせられし忠信智略翁の得がたき義士なるかな恁と知らば我も亦共侶にこそゆ
 くべかりしに恨る所我年しのみまだ十よだも足らざれば狐疑して昨夜潜びも出す徒に曉せ
 し悔しきよしかのあれども魂のわくがれ出てその期に遇ひしに知らでもしるき我宿念の虚
 しからずといふべきのみ和漢おしあべて儂空ある良善の翁と微妙く義を結びて兄弟とし

もなり給ひたる俺父も亦凡人あらず身後まで餘情深かるに現有がたき交りやとて過去しか
 たさへ想像る嘆賞あまりて胸を苦しき感涙の外なかりけり浩る處に著演し走りて便室より
 出て來つや小六の允し給へ忘れたる東西の候ひさといひつゝ、纏て件の小瓶を見せしと
 その身を纏にしてひとつよ寄せて那袂の被りし隨に推包みはやくも肩に引掛て走りて便室
 にぞ退りける當下母屋の淨手してはて、衣のつまとり縁類より來り障子の裡面に入しと小六
 丸の等若て目今ありし辭の趣並に昨夜見し夢の爲体を轟示して憶ふに六箇の小瓶に歛れし
 の主の翁は俺父の爲に竊に隠したる右少將主従の首級にこそありつらめ我身も亦像よりそ
 の計校のありながら不知案内のくらき夜行に迷ひやすらんと危きて事に後れし悔しきよと
 ばかりにして問ずもあらば正かに知るよしなかるべしといふを母屋のうち聞て脛を潰しつ
 且つ感じ且沈吟じて四下を見かへり今にはじめぬ野上の主の恩義の則神佛の加護利益にも
 捷りたり威喜ふべきとぢなれども賢立て這方より問ふに要なき事になんそ又折のあるべ
 きよ只何事も心も秘て那方さまより恁々と報らるゝ日を等こそよけれ外へお洩し給ひそと
 密びやかにぞ響る慍慍さは、その言の葉の簾からねども身を掩ふ夏の日蔭の兒さくら快る

こゝろをやらやくに。しづ枝の露敷共侶は雲時袖をぞ濡しける。恁而早飯も果し比著演の又出
 て來つ。母屋と小六丸に對ひていふやうさのふ亡骸を迎へしより棺の準備をいそがしたれ
 ば既にして整ふたり因てけふ黄昏に安葬の儀を行ふべし墓所の則我香華院にて遊行寺なれ
 ば最近かり小六殿の葬禮の共に立んと勿論也爲も喪服も準備したり然とてここに華美
 と盡して外見と旨とせんを我好ざる所也いにしへの棺の厚三寸といへりこの周の時の制
 度にして曲禮に詳也姫周の時の三寸の後世の二寸弱あるべし我邦も亦往古の士庶人又墓碑
 なし後世士民潜上してその禮に違ふを思はず巨石を累ね碑銘と勅して人工を費すも多かり
 人の土より生出て又土に歸らぬなし葬の朽也その速に朽るをもてよしとす然れば今の世
 に生れて古に返すと難かり俗の宜きに從ふてみづから醉酌をべきのみといふに母屋も小六
 丸も耳を傾け感服して苟且ならぬ外艱の資助は徳義を仰ぐのみいかに宜くよろしくといふ
 より外なかりけり然程は藤澤南郷の里人們の福良長者の親族の旅宿に病て身まかりし柩
 を迎へて遊行寺へ今宵安葬すと傳聞て咱も送らん他も亦吊送せんといはざるはなくその昏
 黄に聚ふもの一千餘人に及びしかば著演が家の門前より陸續として間斷なく人の山做し

海を做して觀んとして街頭に立も多かり施主の名にあふ郷士にあなれば寺僧も準備等閑なら
 ず衆人送りて寺内に到れば柩を本堂に扛居させ衆徒佛前に羅列て追薦の讀經丁寧なり住持
 の引導偈句果て柩を穴に下まるとき小六丸も相隨ひて初て墓堂にゆきて見るは著演が又別に
 穿せたる穴あり其處にこの日從僕們に持し來つる六箇の小瓶を此彼一所に埋めよとて道
 人們に指揮して且その一箇を穴の正面に下させけりこの義隆の首級なるべし却又送れる五
 箇の小瓶をその左右に埋めける此は是問へでもしるは船田鳥山高柳堀口江田等五從臣の
 首級ならんと猜せらる當下著演の茶毘の寺僧と從ひ來つる里人們を見かへりて這瓶は歛め
 し我年八才ばかりなりし春の比初て手習せし日より五十に近かる昨今まで年來用敗した
 る秃筆にて候也これ等が資を得たればこそ曲做も文字をば寫せ播遣棄べき者よのあらず
 を思ひよければ藏め置しと則今宵の便宜に任して爰に埋めて筆塚を遺さんとの所爲よな
 んむかし唐の僧懷素がその年來の敗筆を埋めて塚と築きしを筆塚といひしより載て唐國史
 補にあり恁れば是筆塚といふともいと舊たり要あるべしやと説示せば道俗齊一感佩して舊
 きを疎みて新しさに親み利にのみ走る今の世に敗たる筆だも棄給いで本を忘れぬ御心探の

有がたくこそいなれと連りに稱へて己ざりしを小六丸の秘策を知れば傍痛く思ふものか
 ら人の及ばぬ著演が陰徳情義に感激して今より後折をもて是等の恩恵を復させられ人の
 子と生れらる甲斐あらじと思ひける既にして英直の棺も這時 壘果つ吊送の衆人へはや
 先たちて退るもあり後て友を俟もあり小六丸の著演に又俱せられて更闌し比野上の宿所に
 還りけり是よりして小六丸の母親と共侶に喪に籠居て一室を出ず只その過七々々に遊行
 寺ま詣るのみ著演も亦務を廢して兄弟の忌服を受たり這時藤白棚九郎安同の鎌倉に宅地を
 賜り家作落成の日をいそがして移徙せんと思ふものからいまだ幾日もあらねば妻子の氣賀
 の宿所にをりその身の管領満の館舎に出仕して箱八九日を歴る程に嚮に由比の濱に暮られ
 たる脇屋義隆主従の首級第六日及べる夜一箇も残らず紛失したり由縁のもの埋めん
 とて竊取たる賊といふ風聞あり安同これをうち聞て吐裏に思ふやう件の義隆主従の我忠節
 にて撃捕てまゐらせたるものなるにその首故なく紛失して人の批評も愉快らず察するに
 その盗見の竊に新田を最負奴賊然せし那殘黨あるべし智術をもつて犯人を擲捕てまゐらせ
 なばいよく上の御威に預り出頭すべき捷徑あらん便りもがなと密々にその特色を探る程

に人ありて報るやう當國藤澤南郷の郷士に野上史著演と喚做すものあり他の名たゝる俠者
 にて獨に陣歿の觸腰一萬級を購集めて葬りたり只これ等の事のみならで生平に好て財を散
 して里人の貧窮を救はずといふをなし大父の新田義貞に従ひて兵糧を掌り義貞討れて世と
 憤り職を辭し退隱して鎌倉殿義詮基氏に出仕せずその子孫相續て今の著演に至れる由最傲慢た
 るものなれども先代頼朝の時よりして由緒ある舊家なるをもて斧鉞を加へられせとぞ道誼
 をもて推量るよ脇屋義隆主従の首級を竊取たるの那著演が所爲にあらせや敵かば虚實と知
 る由あらんと属賂をかはれて安同の喜ぶと大かたならず退きて尋思を做そに我その職もあ
 らざれば首級盜賊の著演也ともいまだその御沙汰なきに恚々とい訴へがたかり然りとて時
 日を過さば他人の功と奪れて後悔其處にたつよしあからん所詮他が宿所に到りて威もて
 權さば實を吐くべしその折矢庭に擲捕て鎌倉へ牽もてゆかば是則我が功也その職分もあら
 ずとて亦何人欺非とすべし吁然なりと肚裏に計較既決りければ次の日氣賀へ休息の暇を
 を雲時稟請て十四五名の從者を前後に立し馬をはやめて直に氣賀へ入りゆりもゆかず目藤
 澤の郷に赴き著演の宿所に呼門せて鎌倉殿兼の御内人藤白棚九郎守同が問試むべきよしわ

りてみづから發回しつる也主人に對面すべしとぞいひせける且して著演の老僕某甲とて
 答るやう偶光臨のよしを承るといへども著演のいぬる日より兄弟の喪に籠りていまだいく
 日もあらざれば已とを得ず辭し奉りぬ服開るの日見參に入るべうもやいんといいせも果
 ず安同の眼と睜らし聲苛立てその亦自由の至り也縱喪中に在らばわれ我私の事ならぬ鎌倉
 殿の御用なるに出で會ざるとやいある異議に及ば推菟て項髮扱て牽出さん然でもわんざ
 そ辭するやど敦園暴く晉懲せば老僕の怕れて退きつ却著演に恚々をありつる隨に報しかば
 著演阿容たる氣色もなくしからんよ且客房へ案内をして茶を薦めよ我今出て對面とべし
 といふに老僕のこゝろ得て形のごとくに欺待せば安同のさもこそといひぬばかりに客房な
 る上座に坐を占て著演が出て来るを今か今歟と俟程は著演の凶服の儘にとりも飾らず立出
 て寒暖を舒來意を問へば安同の究竟なる從者四五名後方にをらして權威を示す聲高やか
 我發向の別議はあらず南方の落人たる脇屋義隆主從六名前月廿四日の夜底倉まで誅せられ
 たる首級を由比の濱に擧られしに第六日に及べる夜その首遺らず紛失の聞えありしかるよ
 和服の虚名を好みて敵目方の差別もかく年來彼此にて陣歿せしもの、鬪讎と集めてこれを

葬り且私恩を施して故なく人に東西を取らせその身と共に父祖三世職を辭し郷士と倡へて
 官府を蔑如せり加之父祖著佐の新田義貞に從ひて慈に徴力を盡せしといふ舊縁を今に忘れ
 せ武家に臣たることを羞て忌憚らざる進止既にして隠れなくはや御聆に達したるこれらと
 以推ととさの那義隆主從の首級を當夜竊取て葬りたる歟隠せし歟れん疑がひの和殿にあり
 計手に向らるべかりしを前代鎌倉の幕下以隆由緒ある郷士なるをもてまだその御沙汰に及
 れど嚮に義隆主從を討捕てまぬらせたる安同をとて擇出され則密使に立られて穿鑿の爲來
 つる也他盜賊の外ならずといふ世評和殿に極りたるを陳せればとて免されんや逆徒の首
 級を隠せしは是則逆罪あり兵們はやく著演に案を被よと呼れは縦者等阿と答て寄んとせ
 しと著演の聲とかけ屹と睨へて人々疎忽すべからき某何等の罪あらんや且いふよしを聞れ
 よと禁めて安同にうち對ひていひる趣その意を得がたし何を證據に那首級を隠せしもの
 を某が所爲也とせらるゝや譬に義隆主從の首級を某が隠せしとて今に至りておん答め
 を受くべきとぢいひつせ况素より知らざるとに罪なれん宛屈にこそいひれて安同性
 起て噫憚々しき盜賊かな逆徒の首を竊すみしものに何で罪のなからんや烏語なるとと



借處頼九郎野上
隔紙門小允詔伏面

金龍寺
の當初
上州金
山城内
にあり
しを移
されて
今の常
陸國河
内郡若
柴にあ
り

教圍けども著演騒がず冷笑ひて原來御邊の武門の故實を得しらず威をもて捷んとぞる歎知
ずの詳は説示さん道方へ進みて聞給へ大約敵の大將の首實檢とい故實あり又その首を軍門
に梟らるゝに日限あり既に三日を過るときや或の首級を本國に遣し或の邊なる寺に葬
るを古例とす然るにより南朝の建武三年。北朝にての夏五月攝津州湊河の役は楠贈正三位近
衛中將正成卿一家を盡して陣歿せし時等持院尊氏卿の沙汰として廻梟首三日の後これを河
内へ遣してその子正行朝臣に贈り給ひさその後又南朝の興國元年。北朝にての閏七月二日の
戦は新田贈中納言義貞卿越前足羽の極島の田畔にて流矢に中りて亡給ひしとき足利尾張守
高經ぬし首級を京師に上せしと尊氏卿の沙汰として則梟首三日の後又その首級を齎して越
路へ遣し玉ひしより高經のぬし奉りて義貞卿の軀と共に首級を同國長崎の驛ある稱念寺
に葬りて墓を建松を栽園阿白道和尚を導師として當時その法號を源光院とぞまうしける又
その本國上野にての義貞卿の三男左少將義宗朝臣峨山紹頼禪師を風請して葬禮を執行ひ更
に又法名を金龍寺殿眞山長悟大禪定門とまうしけり依て金山の城中に一ヶ寺を建立して寺
號を金龍寺と呼做したり先蹤總てかくの如く敵といへども名將の匹夫にひとしくせらるゝ

となし非如匹夫の罪せらるゝも梟首して三日後ハ亦その首の有無を問れを律に由られぬ事
なければ義隆ぬしの首級也共梟首三日の内からばその紛失の詮議もあらぬ既に三日を歴た
らんには有無を問ふよしあらんや又同宗の敵と云共國賊もあらざれば必これを梟首せざ
是其先祖を辱るとを怖る、故成けり然るを六日に及ぶまで那主従の首級を梟てそが儘に措
れしハ只是有司の怠り歟先例に違ひたり恠れば首級を隠せしものを我所爲成とせらるゝ
共今に至りておん答めを被るべきにあらざといひにされもふは是等の穿鑿ハ上の密証に
あらず必御邊の臆度ハ出て人を誣けて榮利を謀りし似非穿鑿にぞあらんすらん尙然ならん
ハ某を鎌倉へ召よせて問せらるべき該なるに何人にか憚りて密使を遣首にたまはらんや快
わが意見に従ひて退き去らば還しもせん異議に及ばハ共侶ハ鎌倉へ參上して訟まうして虚
實を糾さん快々返答せられよと席を拍膝を找めて問返たる義理明辨ハ辱しめらるゝ安同ハ
黄葉を紙たる唾兒の如くそれハ斗面報やかに眼を睜れど一句も出せ怯むを紛らさ苦笑ハ
して刀を引提て身を起し口功者なる長談多辨火をもて氷にいひ做そとも絆の趣恠々と聞は
わけて思ひしらせん崇を俟ねいざゆかん兵們來よと呼立したる席薦障も暴やかに外面さし

て出てゆくど著演の送りもせず冷笑つゝ、袖うち拂ふて難て奥にぞ退りける。

第四回

陰徳老境に入て奴婢を得たり
陽卜鷄に縁て主僕を倡ふ

憚りし程に小六丸も母親母屋も奥にをり客房のかたに當りて猛り騒しかりけるを訝りて奴婢も問ひしより那藤白安同が密使と唱へて來つるよしを聞つゝ胸の安からねばその次の間へ出近つきて親子齊一竊聞せしかば安同がいびつる事も又著演が答たる一五一十の詳に知られていと愉快く思ふものから後に崇りのあらずやと有弊に心よか、れども著演の後々まで母子に對ひて安同が來つるをすらいひざれば言の便のささゆをに母屋のさら也小六丸も亦著演よ件のよしを問も果さで已にけりしかりわれども小六丸のこの日藤白安同が面と初て認りしかば撃まくほしう思ひたる心ばかりの喘りしかども響へ主従多人數也俺小腕をもて慙に毛を吹き疵を求めあは禍主人に及ふべしけふ安同を撃すとも老體ひたるものならねばなほ死するに程あるべし且く時を俟にの不如と思ひかへし胸を捺りて母親母屋と共に侶に出てゆくまで間窺てそが儘奥へ退きたる童子の思慮こそ逞しけれ却説三伏の夏すきて

鎌倉大
草紙よ
の相摸
守入道
注名行
啓とわ
り是則
義隆の
事あり

黄絹幻
婦云々
の八字
の絶妙
好辭と
いふ隠
語なり
楊脩が
曹操と
共は是
を見つ
るとき
はやく
その義
を知り
にきと
いふ故
事あり

秋の初風立しは俟とひなし英直が卒哭忌を迎へけりこの日野上著演の母屋小六丸を携て遊行寺に詣て丁寧に好事を執行し衆徒に布施して且英直の墓碑を建及義隆主従の首級と瘞たる所にも五層の石塔婆を造立て羊毛卓塔の四ヶ字を鐫たり羊毛卓の二字の義隆の字の半體にて有けるを觀るものなべてこれを曉得らす筆塚なりと思ひけりそが中に小六丸のみ筆塚ならぬ由を知れども羊毛卓の二字をいまだ悟らず後に至てて學問の進む隨意發明してこの後漢の蔡邕が曹娥の占碑に題したる黄絹幼婦外甥董白の隱語に類せる也俺楊脩の才なければ知ることを遅しと思ひけり是等の後話なるを事の次第に識そのみ法筵果しその夜交著演の思ふよしを晩稻は示して側に侍らせそが儘母屋と小六丸を招き近づけて扱いふやう知らるゝとぞく俺們夫婦の過世悪くてこの年來子どもひとりもあらざればいと愛れいしく思ひたり人として子なきを第一の不孝と祖先の祀を絶所以なり然かるに思ひがけなくも個義任を得てしより宿望やうやく成就して死すると云共後安かりこの歡びを知るべきのみ今より小六と養嗣として俺莊園を譲るべし然ればとて野上氏を冒して實の親の祀を絶せんと云よのあらざ縦俺養嗣になすともその本姓なる館氏を告て兩家をひとつよ合せ野上氏累世

の諸靈を附祭せられなば。その莫大の幸也。この義を承引給へかし。と云ば。晚稻も共侶よ。世に人の妻として。子無の七去の一つといへば。十稔以來。幾遍か側室を薦め侍しに。色を好まぬ心から用られぬ。バ術もなく。心苦く思しに。斗ずも。任品の爰に來まして。此家督を續せんとある。我夫の了簡これ。又優たると有んや。我身過世の罪障も。是よりやうやく。輕うあらば。後安く侍るべし。必ち推辞給そと云れて。驚く小六丸の母の應のおぼつかなくも。目く口を銚て。をり母屋の是を打開て。見由もなき日蔭の這兒を。然迄に思ひ待れるの。願ふても得がたかるべき。洪福で侍れ共。尙老朽たる御夫婦ならねば。此後とても。お子達の生れ給ひぬとや。有なほ又十稔も等給ひても。竟に。おん嗣のあきならば。その折よこそともかくも。仰に隨ひ持りて。ん目今の尙早かるに。且く。緩し給ひぬと。推辞むを。著演聞あへず。謙退辭讓の。人よ依べし。此義の今宵思ひ起して。云云と云に。非いぬる。比我既に。館生の柩に對ひて。誓ひし事も。有ぞかし。然共我嗣にせらるる。を。教ひ給ふ。歎いかにぞやと。辭せわしく。怨ぞれば。母屋の困じて。答難しを。小六丸の然もこそ。と思汲つゝ。小膝を進めて。主人夫婦に對ひて。云やう尙總角なる身を見返して。俵い。ば打出の抗に似ららんやうにて。嗚呼がましく。思ひ奉る。か知す侍れ。と。言を分たる。重恩の厚さが。うへになほ篤かれ

バ。縦火を燒き。水を汲ひ。奴婢にせられて。使るとも。素より。願ふ所に侍るを。況おん嗣にせん。とある。道身の福を。思へば。何をか。教ふて。推辭むべき。然れば。人の子を。擧るに。いと。遅きも。あるものを。五十に。足らで。人の子を。養ひ給ふ。早からずや。且我。們の世に。憚るよし。さへあるを。慈に。續が。バ名家の。殿。壇にならん。母の。辭退。この。故のみ。といひも。果ぬに。著演の。頭を。左右に。うち。掉て。その。亦。愚意と。蛆。蟻したり。在昔。魯國の。公。治。長の。縲。紲。の中に。在りけるを。孔子。の。そを。しも。教ひ給ひ。ず。その。罪に。あらざとて。その。兄の子を。以妻。す。玉ひし。といふ。本文。あり。和殿。母子の。世に。憚るも。時。運の。しから。しむるのみ。その。罪に。あらざるに。我。養ふて。嗣に。せざらんや。然しも。この。義を。憚れず。ハ。目今。應を。聽まほし。推辭の。要なき。と。なら。せやと。連り。に。譴て。已ざり。ければ。母屋の。さら也。小六丸も。竟に。脱る。と。を得。ず。僅に。その。意に。従ひしを。著演。斜ならず。喜び。て。然んよ。の。けふ。より。して。小六丸の。我。嗣也。忌。開の日。は。盃して。この。喜びを。表すべし。既に。郷士の。嗣になりて。ハ。丸と。喚ぶ。と。相應し。からず。小六丸の。丸を。除きて。館。小六とい。はん。こそ。よ。けれ。丸の。貴人の。謙稱。にて。みづから。不才。といへる。が。ご。と。し。才をか。ご。と。訓る。よ。對へて。却。丸といへる。也。この。義を。こゝろ。得給へ。かし。と。諭せば。母屋も。小六丸も。思ふに。優たる。著演の。博學多才に。感服して。こも。亦。その。意に。隨ひ

けり却説その多著演おほく著の小六が忌の関し比吉日を卜み盃して小六と父子の義を結び又親戚と里人によしを告置酒筵會して喜びを盡しけり是よりして著演あきりの小六が爲に師を擇みて文を學し武を習するに著佐の時よりして家に藏書の多かりければ小六の讀書の初より日毎に數千言を唸誦してはやくその義理に通達しをさく切瑳琢磨して螢雪の窓に小夜の深るを數はず武藝ぶげいの亦世に名高る上泉武者助金刺秀武が京師より來て鎌倉に僑居せしに師とし隨ひこの餘沙水筆法坐擊相撲の技までもその師に就て悉習得せといふとなければ著演いよく喜びて恩愛實子に異ならせ又只著演のみならずで晩稻も小六を慈愛み且母屋にも隔なく相親しみて妹のごとく姉にも優て想く萬事に心つけられしを母屋のなほも謙遜りて日々に女婢們と共に立働せといふをかく小六も亦實母養父母の分別せせころを用ひ孝を盡て稟たる恩に答んと思ひざる日もなかりけり看官みかんにこそ、ろせよ小六が文學武藝を習ひて上達せしハ年を累ねて是より後の事なれども併べてこゝに識その間話休題現陰徳の陽報あり積善の家餘慶あきにあらずその次の年の春より晩稻ハ月水を見ず漸々に身おもくありて冬に至て安らかに男兒を産にけり時に著演ハ五十歳晩稻ハ四十三歳の初産なるよ恙もなく母

さへ干さへ快肥立て乳も亦匿からざりければ家宅の喜びいふべうもあらず傳聞もの驚き稱へて年來作善陰徳の報ひならんといひぬもなく當時の奇談になりけり恁而五十日百日の産室養ひ果し比母屋のおと小六と商量して有一日野上夫婦にいふやう喬たけに小六を養嗣にせんと宣せし折辞ひまつりて世に人の子を擧るに遅きもあり速きもあれハ姑く等せ給ひぬとまうせしハけふの事ある人の及ばぬ善根を年來植させ給ひぬる功德重りて八十萬の神の恵ませ給ひけん得がたかりける男兒を安らに擧給ひにき恁れば又このれん家督を嗣し給ふが願に侍り願ふハ小六を初のごとく復任品よかへしをらして母子の心を休らへ給へ奴家が心ひとつにあらで小六も只願願ひ侍りといふを著演聞あへず思ひをも聲をふり立てそハ又沙汰の限也我年五才に及びたる今に至りて産またる子の成長を見る餘命あらんや縦命の長くしてそれ迄死なでありとても既に我庄園の總て小六に譲んと約束せしを變易て今さら何人よか與ふべき生れし赤子あかこのいひでもしるき小六が弟あるともて成長らば家僕にして家事の資助せられんもの也因て其乳名を奴婢之助と喚ぶべしと思ひよければまだ告ざれば事情を知られぬならん要あき事をと教圍ハ晩稻ハこそ慰めて恁宣ふハ理り也過世悪くて嗣

なきもの、人の子を養へばその氣を引て選進に子を生むものもありといふ世話をかもへば
 是も亦據あるとて侍るめり倘果して然らんば小六を養嗣にせしにより這兒の生れたり
 けんを然と思ひて約束を易て小六を今さらに又義任よせられんや俗に嬰兒の水の上なる
 泡にひとしと云なるに這兒がよくも育ん歟そも亦料りがたかるに久後かけて憑みぞ悔し
 事も侍るべしと云云と辭れん我夫の意にあらざかしといへば著演笑しげに彼聞給へ
 母屋との晩稻が胸も我と同じ我心の歳の如し左ても右ても轉さべからざこれらのよしを小
 六にもおん身詳に傳示して然る妄念を絶せたまへ又いひれなば必怨ん心得給へと警めて承
 引べくもあらざれば母屋の回す辭もなく言承しつゝ退きて小六によしを報知らせ大人も亦
 母刀自も箇様々々に宣へば今さらにせんかたなしといふに小六の嗟嘆して野上氏を冒らざ
 どもも身に一介の功もなく人の家督を續ん事願ふ所に侍らす況て今ハ養父母に
 正しき實子あるものを猶且その意に従ひ後に至て人必奪ひにけりと思ふべく禍も又是よ
 り發らん胸安からぬ事なれども事情を按ずるに目今急に這議に及ばば怨を受て洪恩を空に
 爲すとわりもやせん五年十年俟とても我々が這志の果しがたかる事にあらざ黙して折を

俟んのみといふを母屋の感嘆して親恥しき儂の了簡それに優たるといふなし然バとて養父母
 を隔て疎畧よし給ふなとこゝろ付れば領きてそもこゝろ侍るかし須彌より高き恩人と
 親にせず子にならざともいかに疎略に思ふべき矣を骨を折ても報んことを思ひ侍れ
 その義の御こゝろ安かるべしといふも母屋のいよく感じて聶々果つ其後ハ又這一議をい
 ひざれども野上の赤子に心を盡して介抱一ト日も懈らず愛とるとの大かたあらぬと著演の
 屢禁めて總て小六と同じせす襦袢も綿布のこよして奴婢之助とぞ名づけける然程に母屋の
 癡ハ英直の病中死後の苦勞患艱今ハ野上の資助よりて世渡りやすきも似たれども然として
 人に懸りてをれば胸苦しき事なきにわらず憊る所以もや月毎に癩に瘡に閉られて遂に多病
 となりしかハ血色も初に似ず全身いたく骨立たるを小六ハ愛事に思ひつゝ運りに諫めて餌
 薬を薦め野上夫婦も幾遍となく醫師に見せんといひしかと病臥までにあらざれば母屋の辭
 ひて従はず獨心に思ふやう亡夫の遺言に郎君のれん年の十五才もあつ給はん時れん素生を
 告まぬらせて先君より預りまつりし三種を選與しまぬらせよといひれよければその折を待
 つゝ黙止たりけれども我身箇様に多病になりてハ猛に病痾に閉られてものもいひれずそが

儘に息絶るとありもせば何人が亦我身に代りて緯恁々ど郎君に報するものあらんや。然る折の用心に書つけ置に優となし非如文辭又疎くとも良人にいれし趣を識さば後悔なかるべしと思案をしつゝ密々に件の事の顛末を幾日にかしるしつけて重封皮しつ英直が遺したる三種と共に日ごろ人手にかけざりし衣櫃の底に秘藏めて鍵さへ腰に放さねば知るものたいてあがりけり恁まで用心したりじの小六が年尚十一二なる比なりければ益にも立たで母屋が病着初にかへらず瘥るとにあらねども二日と病臥とどりなくて又四五年を経にければ小六の既に十六歳著演が實子奴婢之助の七才にぞなりにける時に應永十七年母屋の久しく待も不樂たる稍その折なりしかばいかで今茲の小六殿に亡夫の遺言を報するらせんと思ひつゝ去年より便宜をこゝろがけしに人に聞せぬ秘言あるを小六の文學武藝の爲に日として師の許ゆかざるをなく偶可宿所は在る折に左にも右にも外見多くて秘事長談に便を得ず恁る障にまだ果さで今茲も春過ぎ夏去りて秋八月にぞなりにける休題復表筆話新田左少將貞方主の義は陸奥を落給ひしとき義隆朝臣と立別れて越路を投て起行つゝ且く北國に世を潜て再時運を播り給ふに越後の新田累世の由縁ある地方にて且貞方主の伯父な

りける從四位下春宮亮義顯朝臣の嫡子建武元年に任せられて當時越後守たりき又貞方主も南朝の建徳二年に越後守に任せられ其後天授三年に從四位下左近衛の少將になされたり此彼前後の任國なりしに然でもこゝに舊族多かり這義によりて再士を募らば更に又義旗を揚るよすがあらんと尋問をしつゝ臆て越後に赴て且く時を待給ひしに現乱世の沿習にて人愈仁義に疎くして何人の舊縁を思ふべき閑居徒に年を累ねて發作たる事もなく利自方に返忠のものありて貞方當國に在すかよしを領主土杉憲定の執事なる長尾景賢に報しかば景賢大軍をもて推寄て攻たりしを雲時防戦ふものから自方ハ士卒多くもあらねば名ある家臣の戦没し妻子眷屬四落八散に生死も知らず擧なされて殘燼ふたゝび燃るに由なし然れども貞方主の辛く重圍を殺脱て當國彌彦山にわけ登り且く山居し給ふ程は料らず異人に邂逅して仙書一卷を授けられ且隱形五遁の内中水火二遁の仙術をこの折傳授せられけり是より貞方主の食ざれども餓すして山に在ると一稔可其後越後を立去て本國なれば上野に赴きつ深く潜びて御座せしは應永十年の夏四月下旬脇屋右少將義隆の相摸なる底倉にて擧れ給ひしより以下京鎌倉の下知として貞方の隱宅を嚴に索ねよとて州郡は徇知するに

骨相謝をもてせられしか。又上野にも落着がたくていと遠しく立去つ。信濃甲斐なる由縁許
 或ハ一年或ハ半年潜びて光陰を送り給ふ。其居へも討兵を驚られて危き事屢なりしを那仙
 術の奇特をもて火に値へば火に隠れ水に遇へば水に隠れて虎口を脱れ給ひつ。是よりの後
 宿所を定めず東八ヶ國を偏歴してなほ會稽の恥をしも雪めんと欲りし給ふに這時までも從
 ひまつりて忠義の志移らざりける。譜第恩顧の勇臣に畑六郎二時種といふもの有けり。他ハ新
 田の四天王。隨一人と聞えたる畑六郎左衛門尉時能が孫也。その武藝勇敢ハ大父時能に劣ると
 なく筋力飽まで悍くしてよく千鈞の鼎を揚げり。こゝをもて貞方主と共侶に幾遍とあく危難
 を脱れて主従二人になるまでも影の肢體に従ふごとくなほ正首仕へたり。然ハ陸奥を落給
 ひしより十稔あまりの光陰を経たる應永十七年の夏。比より下総ある千葉介兼胤が鎌倉の
 管領を竊よ。怨るよしありて隠謀の企ありといふ。世の風聲の彼此に聞えしか。貞方主從相喜
 て千葉ハ下総の舊家にして千葉葛筋印幡數郡の領主なり。只これのみにあらずして。相馬武石
 大須賀國分原馬加等の氏族多かり。他今謀叛の旗を揚て千葉の城に盾籠らむ。一朝にハ落べか
 らず。且その先代千葉介宗胤ハ我先大父贈中納言義貞より從ひまつりて。三井寺合戦の折陣没し

そけり宗胤の弟貞胤の北國落まで自方ありしに先大父の亡給ひし。後心ならざるも引返して尊
 氏に從ひに。然れば宗胤の嫡子胤貞ハ始終忠義の志撓まざ。征西將軍の宮筑紫へ御下向のと
 き供奉しまつりて。大隅守に任せられ。肥前國を領したり。是等の舊さ由縁もあなれば。竊よ那地
 へ赴きて。その爲体を伺ひ。世の風聲の虚實を知るべく。其處に便宜を得るとあらん。然ハとて
 猛可と思ひ起し。行装を整て笠ふかくして立出給へ。畑六郎二時種ハ奴隸の姿。打拵て裝
 を引折脚絆を穿。一刀を腰にして。行包を馳ひつ。外見を潜ぶ主従二人。後に從ひ先に立て。下總
 を投て急ぐ程に。この年添月の下洗に千葉の城下に程遠からぬ福草村まで來給ひけり。畢竟貞
 方主這頭を過り給ふ折。又甚麼ある話説かあるそ。ハ次の卷に解分るを聴ねかし。

開卷奇驚俠客傳第一集卷之二終

隱卷奇驚俠客傳第壹集卷之三

第五回

木主に講して南將舊縁を感
 便宜を演て老尼村酒を薦む



却説新田義方主の畑六郎二時種と従へて千葉の城下に程遠らぬ福草村を過り給ふに。と見れば這街盡頭に舊たる草の庵ありけり左右を樹牆に折環らしたる柴門に小牌を掛て今日休トと。しるしたりこの賣下をもて口を飼ふ優婆塞引と猜するのみ時に此庵の象鶏なるべし黒ろさと赤さと二羽の雄鶏の穿もて出せし一箇の蜘蛛を争ひつゝ堪ずやありけん頂毛を怒起距を揚て戦ふと半時許一箇は是怒れる獅子の谷を落さんとする勢ひあり一箇は亦暴たる黄熊の樹を抜んとするに異あらず一來一往虚々實々紛々として散せる羽の御室の山の秋風も標葉を龍田へ流すが像くりとして蹴颯る砂の野作は在りて高濱に胡砂起塵るに似たるべし此彼共に血に染れて片息もなるまでもなほ戦て己ざりしが赤さの竟に挑難て幸くして引外し走りて柴門の内に入りしを黒さのなほも逃さじとて蔭地にぞ追ふたりける登時裡面に老女の聲して此畜生等がよしもやや生平に迷に陸しく争ふとのあかりしにけふのなごや戦ひけんと獨言つゝ沈吟して然也その所以なきまあらす南北兩朝かんと和睦の後新田楠自餘の人々忠臣義士も弓折れて絶果たるに似たれどもなほ西國よの菊地あり東國に新田もあらん扱又伊勢に北畠大和に越智伯耆に名和或の武家足利氏に鉾を伏或の邊部に世を潜

ひたるそが中に新に伏し炭を呑鏡を窺して再義兵を起さんと思ひざるの者なからんや我泰鶏の争戦に赤さの則南方殘燼黒さの則北方水徳既に時運を得たりといふとも後日の勝負ハ斗りがたかりいかで那方さまの這地へ來ますとあらばその必我大且那の商量敵にせられんものと谷の狙猴の水の月思ふのそにて探れども跡も得見せず薄情さよとうち咬きてぞ鵲立たる外面より貞方主從那鶏の争戦に路去りあへず柴門の頭は立つゝ樹せしに樹牆の内に人ありて獨語たる事情にうち驚きつ退て烟時種と共侶に樹間を尋てかい窺給へば菴主あるべし一個の女僧の齡ハ五十あまりあるが兩托戸の蔭ををり貞方主ハ時種に目を注し又退きて然らぬさまにて宣ふやう殘る暑の堪がたかるに這草庵の檐下を借りて憩ふく雲時汗をもとるべく且一椀の水を乞ふて渴を醫さば愉からん呼門せよと急し給へば時種はやくその意を悟りて現宣をる如く這頭ハ總て野田をれ憩ふべき蔭もいはず他樹せ掛たる牌に休トとあれバ賣下の休日に候ども請い去向の吉凶の知らるゝ據なからばやは先々といひつゝもはや柴門に立よりて卒齋ながらもまうさん我々主從ハ旅客あるが亭午の秋暑に路去りあへず且く檐下に憩して水一椀と給へらばこよなき功德に候はん此義を懇めと主なる人の仰

られて候のといひれて見かへる庵主の女僧の應と答てそが儘に徐に門邊を出て來つ左見右
 見つ、領ちてそのいと易き事に侍りけふの朝より南風なれば這日盛にいかにして何處へか
 ゆかるべき主侶共に這方へ入りてゆたかに休ひ給ひぬといふを喜ぶ主従の然らば允し給へ
 とて引れて裡面に入る程に貞方主の笠脱捨て先よ立ち母屋なる縁類に尻を掛給ふを庵主の
 女僧の見かへりて其首の日景の近かるよ雲時ありとも草鞋を釋てやよかん伴もの不らせ給
 へ這首の背門より吹融せべいと涼やかに侍るれやよ喃々と眞實たちて管待親切なりけるを
 推辭むべくもあらざれば聽てその意に任したる主従齊一草鞋を解て貞方主の正屋をる簀戸
 の頭に坐を占給ふを女僧の連りに誦薦めて上座に推のぼし却その跡に時種を處らして爐の
 火を掻起し鍮子をしばと撫試みて沃々茶碗の皴焼と共に舊たる二荒盆に乘せて瀟茶を汲
 とりつ誘とて薦むるあると態に主従の喜びを演べつゝ乞ふことを三たびにしてやうやく渴さ
 を醫しけり且して女僧がいふやう刀殿門の何國より何處へかどほらせ給ふ千葉さまの城内
 に相誦ありて來せし歟と問れて貞方より氣無香千葉殿の城内より縁とてい非かし我々の鎌
 倉より主従二人で遊歴となれば眞間の古蹟も見まほしく且宿願も候へば鹿島香取の兩社へ

詣んとての旅になんれもふに庵主の賣卜を生活にし給ふならんけふの又甚なる故に休卜と
 いふ牌を門の柱に掛られけん某の旅客也けふ吉凶を問ふにあらせの異日の再會料り難かり
 我宿望の成就すべき歟又成就せざらん歎願ふの柱てわが爲に一筆施し給ひてよと請れて女
 僧の眉根を擽めそわいと易きをながら賤尼がするの錢卜にて著を敷へて八卦より周易
 にわあらせかしとばかりにていこゝろ得がたくてなほ訝しく思ひ給ひん縁故を報まうさん
 に急ぎ給はずき、給へ賤尼の少かりし時よりして觀世音を念じまつりて普門品を讀侍るに
 解る日とていなければも過世悪くて良人を失ひ臘獨子を先たてゝよるべなき身に成しかば
 遂に頭髻を剃捨て這首に髻を締びつゝ彼此人に託鉢して纒に口を餉ひしかども素より田舎
 の事あれば身ひとつながら願ひがたさに廻國せやと思ひし折有一夕の夢に觀世音の示現
 を被り奉り不思議に得たる錢卜の奇特によりて人の爲よその吉凶を占ひ侍るに十二錢より
 外を受ねど十にして十ながら當らずといふをなければ日毎に詣來る人多けりこゝをもて餓
 もせず凍もせねば倒に世を安らかよ渡ればとて世の人賤尼を錢卜の妙算比丘尼と喚做した
 り此錢卜の起原の往昔支那漢の時京房とかいひし博士が銀六文をもて吉凶禍福を占ひしと

喜神の
通して
丙を到
る所見
方なり
甲己の
時日の
通して
丙寅を
得れば
寅の良
寅に良
を喜神
とす餘
にこれ
に做る
べし知

ありとなん一博識のいれしかども。今のその技傳らねば。那士にもとを知るものあり。況此大
皇國に。聞も及ぬ事なりしを。救か麥かも得ず。しらぬ賤尼が自得し侍りし。身の不覺に。あ
らずして。菩薩の利益に依るものなれば。當らぬと。いなければ。但月毎の酉の日。に。なべて占
トの合ぬもの也。そを甚麽ぞと推さ。西をもて離日とす。五離の離別の象あり。故に悲愛と主
る。世に占トの合ぬよし。この義による。と觀音降座の逆示させ給ひしか。酉の日毎に牌を掛
て。人の需も應せね。仁も亦來るとなし。けふの則酉の日。されば。恁徒然に侍也。然。御身の何斗
かり。需させ給ふとも。けふの無益に侍らんを。時に取るべきとこそ侍れ。と言つ。外面瞻仰て
今。いはや日晝にて。午の時の初刻也。菩薩の示現に承りし。物に相見るとも。喜とす。易傳に云
離に相見ると。離の南方の卦也。けり五行に。則火と。十干に。丙と。其丙と良と相見ると。丙
必喜ぶ。喜神の臨む所也。幸にして。けふの九鼓の丙午の時。に。當れり。恁れ。良の方。よ。向て。占ふ時
の合よしあり。只是のみ。あ。わ。ら。せ。し。て。丙午の離火をもて。庚酉の兪金を刻す。時を得たる。侍ら
ず。や。尙。此。時。を。過。し。な。ば。け。ふ。一。日。占。ひ。が。た。し。と。正。首。に。説。示。を。主。従。つ。ら。く。打。聞。て。現。這。女
僧の能辨ある記憶も亦尋常ならね。必做すとあるべし。と感じて。想し。心地したり。そが中に

貞方主の思はずも膝を進めて。い。へ。る。趣。と。い。ろ。得。たり。そ。の。よ。き。折。に。來。つ。る。也。願。ふ。の。占。ひ。給
へ。か。し。快。々。と。急。し。給。へ。ば。妙。算。し。ば。領。さ。て。し。か。ら。ば。道。方。へ。來。ま。せ。と。て。身。を。起。し。つ。紙。門
を開きて。は。や。佛。前。へ。誘。引。に。ぞ。時。種。も。重。紙。門。の。頭。に。進。み。て。俱。に。見。る。に。家。作。の。纒。に。三。間。に。過。ぎ
外面に。廣。燈。何。枚。を。布。儲。けて。方。三。尺。の。地。炕。あり。上。た。る。一。間。に。佛。檀。にて。御。長。一。尺。あ。ま。り。なる。觀
世音の御像を。厨子の内に。立。せ。ま。つ。り。し。左。右。に。草。花。を。磁。製。の。花。瓶。に。建。て。箔。置。の。土。器。に。柴。餅
を。供。物。に。し。たり。常。香。盤。より。環。鷲。と。立。升。る。香。の。煙。の。補。陀。落。山。の。雲。か。と。疑。ひ。う。ち。鳴。ら。そ。木。魚。の
音。の。蕭。然。と。して。祇。陀。林。に。降。沃。ぐ。雨。にも。似。た。る。べ。し。登。時。妙。算。の。雲。時。菩薩。を。祈。念。し。つ。御。前。に。置
たる。錢。六。文。を。取。下。して。擲。つ。に。既。に。して。顯。れ。た。る。その。錢。の。面。背。にて。吉。凶。を。知。る。よし。や。あり。け
ん。恁。ず。ると。三。た。び。に。して。錢。を。菩薩。に。返。し。ま。ぬ。ら。せ。貞。方。主。を。見。か。へ。り。て。占。兆。の。この。う。へ。も。な
き。大。吉。にて。侍。る。也。且。この。緯。の。歡。び。を。御。佛。に。ま。う。し。ま。つ。り。て。然。後。詳。報。侍。ら。ん。且。く。等。せ。給。ひ
ね。ど。こ。い。ろ。得。さ。し。つ。恭。しく。一。卷。の。經。を。繙。き。て。普。門。品。を。ぞ。讀。たり。ける。貞。方。主。の。そ。が。儘。に。妙。算
の後。邊。に。在。して。あ。ほ。よく。佛。壇。を。見。給。ふ。に。本。尊。の。左。右。に。建。た。る。位。牌。多。か。る。中。に。金。龍。寺。殿。贈
正。二。位。黃。門。眞。山。良。悟。大。禪。定。門。建。武。四。年。丁。丑。秋。閏。七。月。二。日。と。記。せ。し。義。貞。卿。を。祀。れる。也。そ。が

左の方に春宮亮義顯朝臣左兵衛督義興朝臣及貞方主の先考にてをいしませし左少將義宗朝臣の位牌もありけり。又その右の方に刑部卿義助卿その子右衛門佐義治朝臣近及属底倉にて亡給ひし右少將義隆朝臣の位牌さへ措れたる。但是のみにあらずして額田鳥山江田桃井大館堀口に至るまで新田の氏族の先靈を祀らざるもなかりしかばふかく心に訝りて紙門の外面に侍りたる時種を見かへりて竊に指さし示し給へば時種も亦これを見て駭きつ又訝りて郷に柴門の頭にて赤黒二羽の鶏の大きく戦ひたりし時那菴主の尼法師がひとりごちたることを思へば自方に由縁あるものならん問まはしきよとおもふのを便りなければ靴を隔て辭を掻る心地して手を又さつゝ黙してをり既よして妙算の経讀果つ巻収めて誘とばかりに貞方主をいとがし立て故の席は還れば時種も快退きて復縁類に侍りたり當下妙算の笑しげに貞方主にうち對ひて今も壽き奉りに占兆の大吉也君の南方火徳よて九紫の陽數ありといへども一白の水に尅せられて久しく本意を遂給ひぬ。然れば當國に來ませしかば思ふに優たる資助を得て宿望成就し給はん因て熟考へ侍るに君の寢をしく見させ給へども凡庸の武士にあらで疑ひもなき貴相あり恚れば必南朝なる名將達にてをいするあらん他人のとまれか

くまれ賤尼に諱させたまひなば崇りのあらで幸ひあらん願ふに名告らせたまへしと問れて駭く貞方主のおもひを後方を見かへりて齊しく驚く時種と面をわいして忙然と應へかねさせたまひしを妙算のさもこそとうちうなづきつゝ聲をひそめておん疑ひの理わりあり。然らばまづ賤尼が素生をつげまつらん鳥許がましくとも聞せたまへといひつゝ四下りを見かへりて賤尼が大父の鷹科權平當仲と喚べられたる千葉家譜第の老黨にて主君宗胤さまともしもに三井寺合戦のとき戦歿したりと家の口碑は傳へはべり。又賤尼が父にてはべるなる權九郎直仲の宗胤のおん子なる胤貞主につかへまつりて年來肥前州に在り嗣べき子どもあかりしかば朋銀の二男ありける。權七實仲を養ふて我身を妻にせ侍りにさその後主君胤貞さまも我二親も世を逝りつたりから南北兩朝の御合體によりて宮方なる城のねちなく攻おどされ。然しも累世鎮西にて勇將のさこねたかかりし菊地殿すら足利家へ兜を脱ぎ鋒を伏せで降参したる時宜なれば主君のあとのたつよしもあく肥前の領地を削られて家臣等離散してければ賤尼が亡夫實仲の父祖の故郷ではべるからこの下給なる千葉にかへりていくはなもなく世を逝りにさ。一個の男兒ありしかとそれすら十才にも足らまきて臍疝で亡なりば

滿兼逝
去を鎌
倉大草
紙に應
永十七
年と記
せしり
あやま
りあら
ん鎌倉
管領九
代記に
應永十
六年と
あるに
従ふべ
し

りしか。細衣も親をかへて道首に葬とむせびしよし。禱にも聞せたまふがごとし。考かるに大父當仲の陪臣なれども名たゝる猛者にて宮根竹下のたゝかひに義貞さまより威状をたまはりし事もあり。その後三井寺にて戦歿せしかり。總大將をいふ。義貞卿の惜ませたまひて。その子直仲をゆしよせていと辱けなき仰せあり。主なる宗胤の亡骸ともも葬むれとてあつく惠ませたまひしとぞ。かゝる御恩を二親のかりくにいひいでて我くが世を逝るとも那卿ならびに新田殿の御一族のおん菩提の宗胤さまと異なること多くよく吊らひ奉つれといわれし事のはべりしか。庵をむとびしははじめより亡君宗胤胤貞さまそのれん筋の後世のさらなり。大約新田の御一族のおん位牌さへ本尊の左右に安措き奉つりて且暮の回向を懈らすはや年来にありにたり。恚而賤尼の錢卜の彼此にさこへしより。今の城主千葉之介兼胤さまに恚々を告げたてまつりしものやありけん。賤尼の素生と知しめされて他が父祖の肥前なる同家につかへしものとしいへばめしよするともけしうのあらず。西國にての緯の趣口碑に傳へしことどもあらんを昔時かたりの聞まほし快くまわれと懇に仰せくだされたるにより。そのちの城内にまゐりて見参に入ることどもはや數回にありはべり。就て一個の秘事あり。故の鎌

倉の管領さま。滿兼を去歲の應永十六年七月廿二日に卒れさせたまひしより。當管領持氏さまの。かん年少にましませば。執權上杉憲定入道長基已がまゝに政ごちて動もすれば最負の沙汰あり。然るほどよとの城主兼胤の侍とごころの別當を年来望ませたまふにより。當管領に御許容ありて仰せつけらるゝかりしをかの執權憲定入道の柱まうして宿望空しくありしかば。兼胤の主いたく怒みてをさく。隱謀の企あり。御一族に謀じあひせて鐵を磨す。糧を取り入れ。籠城の準備とゝのへども無名の軍なるをもて。いまだその機をあらわしなす。また軍を又衆議を凝しつゝ。新田の餘類を取り立て。總大將に倣そならば。これ義兵にして軍に名あり。脇屋少將義隆の底倉にて撃れしかども。貞方主の存命てふかくしのびてあらずしらん。いかで這方へ来たまへかし。ともに大義を伸んばもの。とどのたまひしよし。ゆるありて賤尼の傳へ聞たり。さ。恚腹心をうちあけて告げたてまつる。錢卜にて既に知るよしわればなり。然でも匿ませたまふ歎と誓にしこと。今の身の便宜を告げて問るゝよしのいと懇もしく聞さしを貞方主のなを危ぶみて。こゝろにかもひたまふやう。今この老尼の長物がたり。據あさばあらねども。乱れたる世の人こゝろ飯の中にも鐵あれば。たゞ一朝の奇遇も引かれておもしろることなか

らんやたどひ言みな忠告にて俺に便宜のよしありども出家にして且女流あり果敢なき婦
 言を信客て名告らば悔しきこともあるべし何とかいひんとおもひかねて稍うち案じたまひ
 しを時種のいふがひなしと起る性の色見へてそゝみよりつゝ後方より主の袂を掖動かして
 なきてやさのみ黙止したもふぞたい今庵主のいひれしよしのみち御利運の前兆にて舊縁既
 ゝ分明なり持佛にたかれしおん位牌の言の證據に倣すに足れりもしこの便宜をとり失ない
 い後悔こゝにたちかたし臣等にまかしたまひぬとことばせりしく論しそゝめて制めたまふ
 をちつとも聴かずはや妙算にうちむかひておもひがけなき舊縁實義すでにそのことを聞そ
 のれこなひを見て知りぬ現一旦の奇遇にあらずいと憑もしくおぼゆれば今さらには又何をか
 隠さんかしこくも推量せられしごとく俺君のこれ新田の嫡孫前越後守左少將貞方朝臣よ
 てましますあり従ひまつりし某の六郎左衛門時能がために孫畑主馬介時實が獨子なる
 畑六郎二時種これなりささよ菴主もいひれしごとく南北兩朝御合體の後足利義満盟ひにそ
 じきてそのいさほひに乗したる變詐素よりかぎりなく新田楠の餘類をばなほも根を斷葉
 を枯さんとせらるゝことの朽をしく神も怒り人の怨めどはや御利睦の今にして主客の勢ひ

おまじからねば自方の軍威ふたゝびふるはず曩に奥の孤城をねとされまた越路にも上野
 にもしのびかねつゝ主従二人さして往方も定めなき旅より旅にねもむくおりから當國の守
 兼胤主が鎌倉の管領をひそかゝ怨むるよしありて締結々々世の風聲を信濃路よつたへ聞
 たれどもさりとて虚實のはかりがたかり千葉の城下にちかづきてまづその虚實を探ぐるべ
 くそのこと果して實ならば俺君大義の資助にすべき便所もあらんと主従が其處に計議をぬ
 ぐらしてこの地へかんともしてけるに豈おもはんや舊縁ある尼公の葬にたちよりてこの吉
 左右を聞んといひるゝよしにたがひぬの方便をもて千葉殿へ汲引をなしてたびてんやど
 尋さわかす當坐のこたへに妙算のさもこそどうらうなづきつ席と避て却主従にむかひてい
 ふやう鈍き賤尼が錢卜も原これ佛の授與なればとさにとりての奇特あり然るにより南朝の
 殘將達にてをいするならんと猜せしことの違はずしてつまびらかなるおん答へをうけ給ひ
 りぬる嬉しさよ我身老女のことなれば大事よあづかるべくもあらぬぞいひにひにして千葉
 殿の願さを年來被むりはべれば見參ハハと易かりたりを掃りておんうへをひそかに傳へま

ぬらそべし。こと做るときハ亡親にいらぬし義のはじめあり終もわれバ忠孝の本意に稱ふて
 憊まで。よるこがしきことハあらまかじ。しばらくこハ逗留なされて吉左右を俟せたまへ。
 吁愛たや。と祝壽ぎてまた他事もなく見へしかバ貞方やうやくうあづきたまひてしからんに
 いらちぬたり疑ふどにハあらねども言一トたび口より出てハ駟も趕がたし。とおもふ取よ
 りて時種に先をせられていと恥かし懇意にまかしてかの一議の成か否ぬか聞くまでハ厄會
 にこそなるべけれ。今よりして憑もしく。れもふものからこゝろにかゝるハ嚮にこの門邊にて。
 赤黒二雙の鷄の大くたゝかひたりしとき赤さハ負て逃亡にきかりから庵主のいられして
 とを洩聞てその意を得たりかの赤鷄を南方の殘將餘類にたとへられしハ然もわりぬべきこ
 とあから傷を被むり血に塗れ脆くもまけて逃亡せしハこゝろ快らぬことなりけり。今さらお
 もへバ件の一議の得とハのハで俺身の仇になるべき祥にあらずやと潜めきてまた問ひたま
 へば妙算頭をうちふりていかでかハなる祥にはべらん足利方にたとへたるかの黒鷄の猛
 くして一旦勝に乗るといへども窮所を傷られたると知らで逃ゆく敵をおひかけて柴門の内



に馳入るほぎに那樹の幹又突わたりて。たちまち息絶にき疑ひしく死したるをわれ御覽せよと指させば。貞方主も時種もいふかりながら眼をさだめてはるかに庭なる樹間を見る果して件の黒鷄のいつのほぎにか斃れてあり。そのとき妙算またいふやう那鷄をもちかきほとりの村人の養鷄なりしに。甲夜晨せしを忌きさらひて。れちなく道首へもて来つゝ。理なく賤尼にあづけはべりき出家に要なきものながら。曉を知るに便りよければ。わたりくんに餌を與ふるのそいとまれかくもわれ。そでに勝たる黒鷄の死せしひみれも自方の吉兆何の不祥かはべるべき錢卜といひかの鷄の勝負もかくのこどくにはべれば。ときいたれりといひまののみ願ふの疑念をしりぞけたまひて。意見につかされたまへかし。みなおんためよはべりといふ婦人。似げなき辯論に主従ひとしく感嘆して。いなる、おもむき又これを理あり現窮冠の趕べからせかの黒鷄が勝に乗りたる不覺よよりてやふれを取れり。人の奇伏もまたしかなりもて。いましめになさんのみ判断甘心くく。とたへて笑坪に入りたまふ。主客の間答とさうつりて下哺りにありしかば。妙算日影をわきみて。あな我ながら鈍ましや日のはやいたく

傾きたるに物欲しうこそをいすらめ例の豆腐はまだ來せや。那升活奴も何してをるらん。道心者に得意なしと見貶して疎くなりたる。歎快來よかしと吐きて。既に立まくせし折から豆腐々々と呼聲聞へて。漸々に近くなりもて來ぬれば。妙算の遮ししく。盆を引提て柴門に走り出手を擧てこや喃々と招くにぞ。時種のそが儘にやをら障子を引闔て主従俱に隠れてをり。登時妙算の豆腐一挺買とりて。錢を遞與して裡面に入る。程しもわらず外面より。升屋にて候ぞ。阿庵さま酒醬油の御用いをしませず。やといふを妙算見かへりて。やよ等不樂たり。用なからずや。且らく等ねと留置て棚より卸と醉箆を左右に拿り走り出て。喃升屋平生に。一合二合より外。要なき竹葉なれど。客人あれば一ト升買ん。やよ美酒を這醉箆へ容るべき限り。節ねかし。阿錢の翌でもよからんな。といひつゝ。遷興すを升屋の販子に受とりつ。微笑てお庵さまこの醉箆。一升近く入りぬべし。壺をもたせ給はずや。といへば。妙算もうち笑ひて。然也。壺の兩箇ありし。鼠が棚よりうち落して。物の役に立きなりたり。器擇みとしたらんより。快節やと急がせば。販子。阿々さうち笑ひて。兩箇の桶なる瓶の蓋を此彼と搔取て。調合しつゝ。件の箆へ九合あまり。量り入れ。醬油の甚麼と尋れば。否。醬油のさのふの朝買ふたるが。その儘あり。翌又來ませ。その折

よけふの價ひを取らせんすといへば販子ハ領きてその何時也ども賜りてん。おほまた御用と願ふのみと應て懸て兩箇の桶の荷索操つり初へ掛て擡起しつ聲高やかに升屋々々と呼びながら走りて見えすなりにけり。然程に妙算ハ又醉筭を携て外面見つ、柴門を引闔て足バやに故所ろにかへり来て。却主従に對ひていふやう見給ふごとく身ひとつあれば庖瀆働さし侍る程あると態の疏まあらんを且く允し給へかしといふを時種推禁めて。そのうち措し給へかし。我今ゆきて火を焼ん。そこらの指揮を頼むのみといへば妙算うち笑ひて噫物体なやいかにして賓客に火を焼さるべき益なきとを精神まよく立を貞方も禁難く俱に勞ひ給ひけり。恁而又主従ハ待と凡半時ばかり日景いよく傾きて門の槐は寒蟬の頻鳴くかたを向上れば残る暑を忘氷溜る筈音絶て雲時端居の縁側の檐は營む蟬の巢に掛る彪脚蚊に風戦ぐ黃暮近くなりし比。妙算ハ手料理に只一種ある豆腐の羹酒盪めし醉筒に盃をとり添ていと大きな塗折敷に減うち載て出て出つ目羹の椀を素木の折敷に取りて主従に差めていふやう寔は無下の田舎ハ侍れば管待まぬらすべき東西もなし況や早の烹炙にハ藪で結びて提る可りの阿壁のみでハ侍れども旅にしわれハ淮の菓に盛るとか詠れし歌のころも恁る時にてありけんかし。

飯も程なくまぬらせん且ねん箸を取あげ給へやねん口ハ合をとも切て竹葉でも過し給へい。長途の疲勞の瘡りて今宵ハやすく睡らせ給へんや。や。喃々と他事もなき款待態に主従ハ喜びを述て共侶に羹の蓋を取りて見る田舎醬油の花もなく香もなき柳の白箸を染るばかりに鹹き搦料理も折におふ饑てハ擇まぬ人こゝろ。轍餅の一杓水も恁ありけんと思ひたり登時又妙算ハ盃をとて勤るを貞方の主推戻して且あるじよりはじめてよと辞ひ給ふに果しなけれバ。妙算みづから取わけてこの憚りで侍れども然らバ阿釀を試てん允させ給へと身を退して手筒に酌て半盞許はや一吸に飲盡して懷紙をとう出つ。兩三回盃の縁を拭ひ膝を進めて恭しくまぬらするを貞方やをら受とりて酌して懸て傾けて又妙算に返し給ふをその御家臣へと會釋をと。是より主客献酬の口誼に盃ハ巡れども貞方主ハ沙量なれば一二度にして辞ひ給ふを妙算しバ。請薦めて思ひの隨に酔したり。又時種にも浮けるに。時種素より酒と嗜めバ。竟にハ獨引受ていと大きな醉筒の酒遣りなく竭しけり。その間にハ妙算ハ献すとわりても酌を任す一合酒量なればとて半盞あらでハ喫ざりけり。既にして日の暮しかバ妙算ハ行燈に火を點し蚊遣を焼てなほ四方八表の物かたらひに。主従を慰めたる語次ハ問ける様實事

やらん京鎌倉よりかん訪像尊をもて殿達を索させ給ふと聞しに纒に一個の從者を將て漫行をし給ひし危きとに侍らまやといふを貞方うち聞て恚おもひるゝの理りながら縦十名二十名士卒を左右に從へたりとも多勢の敵に撞見バその九牛の一毛にて我身を成るに足ざるべし且從者の多ければ盤纏續かず外見に立て進退不使のみあらで亦殃危を招くに庶かり然バ主從二人でも我よく敵を避るの術あり又時種が武勇捷捷を踰屋よ登るに狙猴の枝を傳ふが如く堅を破り鏡を摧くに石もて卵を壓すより易かり加旃時種の千錢の力あり譬バ建保の義秀親衛又近世に聞ねたる妻鹿孫三郎也とても捷るべうのあらずかしこゝをもて幾番か多勢の討兵を殺脱て恙あきとを得たりいかでか用心せざらんやと密めきて説諭し給へバ妙算の有理々々と答ながらもなほ疑ふて實語と思へぬ面もちありしを時種のはやく猜して酒氣に乗しつ進み出て巷主目今我君の宣ひしを疑ふて虚語なりとおもひ給ふ歎さらば本事を見せんずと勢ひ猛く縁側へ立を貞方呼禁て已ぬくと宣へども酔たる人の辯なれば亦聽べらもあらざりしを妙算の含笑ながら行燈の蓋掻取て灯口を其方へ推向たり時種これに便りを得て彼此と看廻らすに版履にしたりける最大きやかなる青石ありその長ハ四尺ハ

まり四面ハ一尺四五寸あるべえ恚れバ這石の重きこと幾百斤あるべからん多力雄の神ならざるもの只一人の力をもて動せべうも見へざりしを時種の物ともせせ是究竟と縁側より閃りと下りつゝ兩肩衣ぎて件の石に兩手を掛て兩三番推動し矢聲もかけず輕やかに引起し肩にうち乗せて又取なほして目よりも高く捧揚て又彼此と態を更弄びて庭の樹間の暗きを歎へず那方這方ともて廻りて舊所へ卸措くまで自若として面色變せず徐よ掌埃うち拂ひ兩袖歛め襟かき合して故席に若しかバ妙算の直と呆れて眼を睜り舌を吐き又いふべくもあらざりしを思ひかへして鏡を更め却時種にうち對ひて鬼神も及ばぬおん身の力量世に又傳ひあるべからず寔一人當千ある勇士よてをいせしを危み思ひしかるかさよ過言を允し給へかし道爲休を介殿いふよ報奉らばいよくますく憑く思ひ給はんぞといへば時種領きてそのその該の事にこそ去年應永十義滿世を逝りて將軍義持狐疑深く骨肉をだも容れざれば郡國の大小名恩胎を抱き解體して上洛せぬもの多しと聞ぬ世間ふたゝび乱るべし恚る時節に千薬殿の我君と合體して義兵を起し給ひなは虎よ翅を添たるごとく向に前なく百戰百勝且房總を平均し武藏を畧して鎌倉に攻入るとも易かるべしと勇むを貞方推禁めて噫聲高

し何をかいふや壁よも耳のありといふ世の常言を思ひきよ慎と薄くの後悔あらん要き多
 辨の傍痛しと叱り給へば時種の頭を掻きつゝ遂巡してそが儘口をつぐめ共酒の酔へまそ
 く升りて頻り睡眠を催したり況真方主の沙量なりければ漸々酔酩して席にも勝す見
 へ給へば妙算の含笑ながら且盃盤を片よせていそしく立て次の間に臥簾を儲蚊帳を垂て主
 従を揺覺し殿達夜食を召れずや臥簾の那首に儲てあり就寐給ふ歎いかにぞやと屢問れて真
 方主の頭を擡り左見右見て否々夜食の欲しからせ痛く酔たり枕に就ん允し給へと刀を引提
 て俊愷きながら次の間ある蚊帳の内に入り給へば時種も引續きて宿寐も旅の無造作に主の
 後方に臥たりける當下妙算の幘の下折りさし聞きてやよ殿も畑主も淨手よゆかせ給ひぬ歎
 尙小夜深て起出給ひ手燭をもたせ給へかこゝに侍りと言れても生應る主従が枕さし
 らず夢さゝる又覺べうもあざりけり然程に妙算の臥房の紙門を引闔て且盃盤を取納め洗
 ひ淨めつ庖漏より手を拭ながら出て来て那主従の臥房なる隔亮よ身をよせ鵲立て要時寐息
 を窺ふて莞爾と笑て拔歩しつゝさらば佛間に退きて時後れたる夕勤鳴らす木魚の音寂て夜
 ひや夜中になりけり

第六回

福草村に三兎奇功を奏す
 薬酒を醸して郡領來歴を詳にす

却説その夜の子二刻比連立來ぬる兩個の壯佼此彼打拵苦刻し赤銅造の兩刀を十字の像く
 腰にして細鎖の戰裝手拵當銀打たる抹額に戰鞋を穿締て先に進みし一人が火繩うち揮る
 薄月夜はや柴門に近着て二丈あまり這方より小石を拾ふて礮と擲礮の音の暗號なりけん裡
 面よの木魚の音絶て佛間を出る妙算の紙燭を秉つゝ兩折戸を密と推開き透し見てその灘藏
 歟船藏歟と問へば兩個の壯佼の然也と答て足はやや齊一艦て進よりて母御味美行れし歎今
 宵の首尾の甚麽ぞやと問かへされて笑しげにさればとよ聞ねかき殿より仰つけられし豫の
 計較一箇も外させ終に那陀々花酒を思ひの隨ふ喫したる貞方も時種も酔て臥房に入りし
 より二時あまり経にければ今人の死人に異あらで宿鳥を捉るより易かるべし緯の始末を説示
 さんに快々入りねと先に立親に引る、胞兄弟の手はやく草鞋を脱捨て正屋に入りて坐を居
 る灘藏を密して喃母御嚮よ我們も一役承て舛屋の販子と變着し那陀々花酒と毒なき酒
 を篩分たりし手通魔のさら也又賣態も妙ならずやと誇れば輪じよ弟の船藏かなし開子に啓

を低めて那酒に豆腐の敵薬喰合すれば殊さらにもその毒劇しと聞はしかば我々の豆腐買人にありて一役勤めたりをそ那奴們の喰ひし歎と問へば妙算領きてそこらに脱落あるべきや。二荒庵に装着て露も遺さず喰したるその進退のたたくもあらねど容易からぬ那酒也いぬる日殿より賜りたる那醉筒に機關あり繩をもて内を筒に隔し外面の漆をもて塗わけられしを目標よて黒き方に陀々花酒あり黄ある方に毒なき酒あり薬酒を薦んどとるときは黒き方を下よして上なる竅を指もて塞げば毒なき酒の些も出ず毒なき酒を盛どき黄なる方を下にして上なる竅を指もて塞げば薬酒の些も出ざるよし殿より傳授なされしかども我身の喫とき人に任して盛してはその手通魔も得ならず酌を人手に遞與さずしてその度毎も筒に酌て喫むとら骨の折たる所爲也況や既に乱酒になりては筒より毒ある酒を手盛に我身の喫むべき歎と思へば霎時も由断のちらず苦勞の今又話すが如き手輕き所行でいなかりしを然とて氣色に曉得られては絆の破れになるのみならず我身の矢庭に殺さるべし命りける大役を左やら右やら勤果せし親の心を子に知らず僅に豆腐買人と酒肆の販子に打扮たるを今さら誇るとかへと窘られても物とも思ひぬ胞兄弟とも膝立直してそいそ

の該でもあるべきがわん身の亦いかにして那奴們二名を道庵へ轍く引入れ給ひしぞと問へば妙算さればとよ那叛逆の風聲の世に隠れなからんにい眞方も亦傳聞て必這地へ來るとわらん然るときの便點をもて留めて事を行へと殿より仰下されて那主従の骨相書と訪像さへに賜ひしかばそれより毎に門に立て道頭を過る旅客に問なくころをつけたりしにけふ亭午の比柴門の頭を過る旅客あり主従ならんとせばしめて一個の縮羅の單衣を被て深編笠に面を罩み白柄に絞袴の兩刀を帶たれば問でもしるさその武士也又一個の從者にて年紀の三十あまりなるべし身の長高く骨逞く長さ一刀を腰にして裳を引折り脚絆を穿て行裏を駈ひたり主の笠にて面を見せねど那從者の面鬼の餘の模様も訪像に合して見れぬ新田眞方主従にさも似たり胸の忽地うち騒ぎていかにせましと思ひし折折もよく外面にて紫鷄の黒めと赤さが大く爪戰ふて已ざりければ那主従のゆきも得やらで停在てそを觀る程に赤鷄の竟にうち負て逃るを透さば黒鷄の趕つゝ我身のほとりに來よけり登時裡面より筒様々々に獨歸つゝ密引て試たるを那主従の外面にて洩聞てうる驚きけん迭に霎時轟きつ我此庵を南朝に由縁あるものなどの隱宅なる歎と思ひけん那從者に呼門して秋暑に堪ぬを言種に霎時



竹葉

九十九



漸次服夜
浅下庵
未念

九十八

の宿りを請ひし宿りをや圍套に入りし也。當下我又後々の爲にと思ひしよしわれは爪戦に勝たる黒鷄を、手ばやく竊は絞殺して樹拉の間は棄措つ。然らぬさまにて出迎て正屋に倡引茶を薦めいと丁寧に款待す程に件の武士が錢卜に問ふてその身宿望の成果を知らまほしといひしに、いよゝ便りを得て箇様々々にいひ誘へ、佛間に相伴て錢もて占ふやうにして占象の大吉也と報知して歡せ觀世音に此歡びとやうさんとて稍久く普門品を讀たりき佛間で時を移せし、拵置れし義貞以下の位牌をよくも見せん爲なり。那門へ果して位牌を見て目を照しつゝ、愀然たりこゝに至て問ひでもしるき件の武士は新田貞方又從者の畑六郎二時種にこそありけめと猜するるとい猜してもまだ名告らせねば人たがへあらじと思ひ決めがたかり豫の計議の今この時ぞと思ひよければ正しげよ。我身の素生を説示し新田に舊縁あるよしと殿の隠謀恚々と賊し屋かま呷き告ていかで新田の嫡孫を總大將にとり立て共に義兵を起しなば軍に名ありと千葉城内で軍議ありしを聞たりとて旨く相譚課せしかども貞方のなほ疑ふて早にの名告かねたりしと、那時種が焦燥て主をもまたで恚々と名告て意中を諱しにき恚れば猶も主從の心を緩させん爲にけふ占ひし錢卜の大吉也といふよしも豫の口傳に辨

を加て最も愛たく説示せしを貞方主從うら聞て歡ざるにあらねども、南北兩朝に壁たる赤黒二隻の鷄の爪戦に赤鷄の負たりしを心に掛て云云といひれし折にそを慰めて嚮に絞たる黒鷄と自滅したりといひもて嘆めて是もめでたき祥なりとて壽きたればうち解て遂に止宿の心あり恚る折から其達が酒と豆腐を買もて來たれば却貞方を留めしよしと隠語にて知らせし也。然るに胆の遺れし畑時種が力なり万夫無當の勇ありと豫も傳聞しかど、さまでいあらじと思ふにより言を設てそののかせしに、那奴の醉たる折なればはや口車に乗せられて些も擬議せせ下立て見よ、那縁頼の頭なる脱履石を引起し肩にうら載し捧揚て庭の樹間を幾度敷もて遶りつゝ又故の所へやと措たりき抑幾百人力あるやらんいと怖るべき猛者なれども智慧淺ければ嘴をよ易く那陀々花酒を遣りあく飲せよければ中られて主共侶に醉臥たり。皆是殿の方寸より出たる計畧其圖に當りて大功こゝに成就したれば只此一舉も亡者の惡名を雪むべく絶たる家を興さんとはやけふ翌の程にあらん歡ひ給へ愛たやと一五一十の長物がたりに齊一勇む灘藏船藏笑片向てうち領さ是に就ても感じ入たる。介殿の御計畧貞方主從此地に來たらば必その憩ふべき所を儲て網を張れとて彼此に下知ありし折、近曾おん身の錢卜

の流行によりて忠告の密訴を聞食入られ又俺們にこの日より出買に打扱して彼此をなく
うち巡らせこの餘も客店酒肆茶店に密計を術示さして骨相訪算を運與させ給ひし準備の自
他愈異ならざりしに幸ひにして母御の宿所へ那主従の立寄りしに人力あらぬ天の錫徳れば
立身疑ひなし寔に賀すべし賀すべしと詞ひとしく答たる兄も弟も如意満足の歡ひ限りな
りしを妙算のさもこそと俱に笑つゝ領きて那陀々花酒を飲たるものは縦幼術ありとも勇
力備わらざとも心神共に亡失して解藥を用ひざる程の幾日を経ても醒るとさく竟にのそが
儘死に至ると正かに傳聞たれども寢さして措ての捕獲なからん快細めて訴すやといふを船
藏聞あへせそこらに女才あるべき歎嚮にれん身が隠語もて那真方主従の事恁々と知らせ給
ひしその折俺們の飛が如くに城内に走まゆりてはやくも訴稟せしかば殿のれん歡ひ大かた
なら老然らば孤の士卒を將て汝が母の宿所に赴き實檢して違ひれば那主従を罕轡に乗して
鎌倉へまゆらせん汝のはやく走り還りて親同胞と共侶も守護して孤を福草村なる母の宿所
に等かむと仰出されたるにより難て踵と旋して走りかへりつ件のよしを大哥も報て夜を入
てうちつれ立て來つる地といへば又灘藏も目今母御にいられしごとく最も緊しく細めて殿

の恩臨を倭ちらば生拘たるに異ならでいよ／＼華やかなるべけれども思ふにも似老快醒て
姿を隨と歎さなくとも反撃にせられあば本直にしかぬ踏雲さ仕事且一覽して後に楚と隊
與を定むべし船藏立ねと急せば應と答て行燈なる紙燭を乗て火を移ま胞兄弟俱に立寄りて
紙門を半分推開き醉臥折し主従を瞬もせず得と見て紙門を闔て退きたる灘藏雲時沈吟じ
て那陀々花酒の奇特の目前主も家隸も仰反て死したるものに異ならねども然とて慮と手
下されず殿の恩臨も程あからんし船藏途まで出迎ふて母御の甘く行られたる始末を具に聞
ねあげてかん伴してかへり來よ殿のわねらせ給ひなば多人數にして心づよかりその折に乞
まうして我等兄弟先に進みて那主従に索を掛んし倚醒たりとも踏雲氣なしこの議のいか
と聳と示せば船藏運りに領きてそこらの用心尤よし甲夜より曇りし天霽れて月鮮明也蕉火
をもたでも便りあしからず然らば我等の走一走に鄰村までいて見て來てん臥房に心をつけ
給へといひつゝ草鞋を穿着て東を投て走りけり恁而妙算灘藏等の柴折焼て茶を烹沸し物片
よせつ帯を取て賓客歸の塵芥掃除し果て俟候に庭の草葉に集く虫の露けき聲に肌膚寒くは
や曉方にある隨に猛河に聞ゆる人馬の足音器械拿たる許多の士卒を前に立し後に備て馬の

足掻をはやめついで来るもの、別人ならき當國の郡領千葉介兼胤也。但見る這日の打紛の
 萌葱威の身甲に古金襴の戰袍輪鑰入たる梨子打鳥帽子に黄金製作の大刀を跨て南部栗毛の
 三歲駒に雲珠鞍措かして優にうら乗り勒捌きも意氣揚々と柴門近く来る程に案内に立たる
 船藏へ一反ばかり那方より先へ走りて遽しく折戸を破と推開き母御も大哥も快出給へ殿の
 渡らせ給ひしぞやと呼ぶ聲に妙算の灘藏と共侶も慌忙さ出迎て折戸の左右に平伏たり登時
 兼胤の究竟の士卒四五十名に庵の四方を捕回せ馬乗放ちて悠々と正屋に到りて上座ある竟
 兒に尻をうち掛れば物具したる老黨近臣齊一左右も坐列たり恚りし程に妙算も跡に跟き裡
 面入て兩個兒子共侶にねるく拜謁す兼胤遙にこれを見て當庵の女僧妙算等近り參れと
 招きよせてみづから褒美て却いふやう南方の殘將新田貞方へ嚮に陸奥の没落せしより追捕
 しべく也といへども他の幼術あるをもて水を見れば水に隠れ火に遇へば火に隠れ多勢の
 討手を殺脱て出沒定かならざればこれを捕るものなかりき。又只貞方のみならで相従ふ一個
 の猛者あり畑六郎二時種是なり亦その勇力世も提れて且剽姚に長たれば是だに久しく手に
 入らず。然としてうち捨置ときのみ只是國家の思なり這をもて室町鎌倉兩御所の大御心安からむ

よく貞方等を撈捕てまゐらざるものあらば勸賞乞に依るべしといと嚴なるおん下知あり兼
 胤尙もこの年來鎌倉殿の御恩によりて父祖の舊領を相續したるよ且宿願もあるをもて日夜
 肺肝を推きつゝ稍計畧を得たりしか。執權憲定入道によしを告免許を稟て兼胤叛逆の企わ
 るよしを都鄙遠近に流言せし。那貞方を孤が城下に輒く誑引よせん爲也。しかのあれども尋
 常なる隊配をもて捕籠てそを生拘んと做すからば數百の選兵ありとて。他又例の幻術をも
 て脱去るとありらずや。この故に左さま右さまほ又思慮を回らせしに。わが家に舊く傳る
 陀々花酒の一方あり。此は是唐山宋の商舶なりける宋晁吳と喚れしものが小松の大臣重盛公
 に献りたる奇方也。人の勿論狐狸毒蛇神通不思議のものといふとも件の藥酒を啖て後酔て睡
 に就くときハ心神遂に亡失して日を累ね月を歴るまで解藥を用ひざるときハ醒さして死と
 るのみ。那那劉玄石が中山千日の酒にも提りたり然れば又宋の時悪人の旅客なごに飲しめ
 て暝眩したるその間に殺して東西を畧りしといふ蒙汗藥ハその毒の循ると速よて飲むもの
 卒に倒れしも。睡に時を移すときハはや醒め來て恙なし思に陀々花酒のそれに似たるも。睡
 らざればその毒循らず。一トたび毒の循りし後醒ざること右の如し。是はその提れたる所軍陣

よ要あるべきもの也。そをわが家に傳るよし。ひかし近衛院のれん時は妖婦玉藻が事より。わが先祖千葉介平朝臣常胤主と三浦介義明上總介廣常等に勅命して下野州奈須野なる狐を射獵せ給ひしとき重盛密にわが先祖を側に招き近づけて和殿奈須野に到る所九尾の狐が人に變して障碍を做すとありもやせん。その機をはやく猜しなれば便點をもつて這陀々花酒を飲しめて斃せかし這藥酒の恠々也とて傳來效驗解藥の方まで具は傳授し給ひしより。今に至てその奇方を家の秘書として相傳せり。こゝをもていぬる比禁獄の者一人に件の酒を飲しめて果否を試みたるに傳聞しに彌増て經驗尤神妙也。恠れば亦那真方は這藥酒を飲しなれば隱形五道の術ありともそを施すに由なくて撈捕れんと疑ひなし。然れば旅客の立よるべき客店酒茶の坊買人のさら也。神社佛閣に至るまで計策を御示しよく訪像は引合して尙貞方等と見るならべ便點を以這藥酒を薦めて睡に就しとき訴せうせと下知しつゝ。件の陀々花酒一ト升は機關ある醉筒と解藥一貼を相添てそのもの共に遞置置き解藥の要なき東西に似たれど尙愆つて自方のもの、俱に飲とありませばそを速に救ん爲也。然るに當庵の女僧妙算母子の原是刑餘のものかれども近屬その錢小を問ふもの毎日に多ければその子灘藏船藏と共侶に孤が

密計に與りて功をもて先人の罪を贖んと願ふにより藥酒醉筒解藥まで預けて絆を行はせしよ。孤の計りたる所違はず新田貞方主従の那風聲を實語として果して當所よ來つる折。妙算逸速く見出して言を設て巷に引入れ遂に件の主従に飽まで陀々花酒を薦め醉臥しめて輒虜にせしよし。船藏をもて聞わめげたる。兩度の口狀よりて詳に知りぬ。その功莫大なるをもて灘藏船藏等が親也ける。荒海鶴九郎有基が身後の罪名を削去り兩個の兒子を召出して本領を返し與ふべし。勿論貞方時種等。その身の意中をうち諦てみづから名告りしよしなれば失錯あるべきとならぬ。孤且目今實檢せん。細め置しかいかにぞやと問へば妙算頭を擡て冥加に餘る御恩澤亡夫さへに面を起し。親子三人が喜びの皆殿さまの御武徳よて然しも撈獲がたしと聞わたる。那真方等主従を老たる尼が口車に乗して虜にしはべりし。骨のかれたる事ながら既に醉伏せしより死しつるものに異ならぬ。戒るのいと易かり。然ればお下知をまたんとていまだ索を被させず。そが儘成りて侍りにさといふに兼胤領きて然らば緊しく戒めよ。快々せきやと急したる。下知に従ふ灘藏船藏多勢を憑ひ准備の捕索近習の壯武者共侶は馳て臥房に稱入て黑白も知らぬ貞方主と畑時種を引起し。索を被けても俱落々々と捕縛棄あく倒

れけり既にして兼胤も臥房の内に進み入り近習に手燭を揚させて再伴の主従を引起させて
 得と見て寝られたれども人品骨柄現真方に相違なし薬酒の效驗神妙よて那幼術も勇力も恐る
 へに足らざれども心を緩さば愆めらん吊もて來たせし網橋子を這臥房まで昇入させて主従
 俱より乗せよ日を經るとも醒るとあらじとの思へども一日も留置ん必要なし孤の這
 首より啓行してこの生拘を鎌倉へ幸もてゆきて聞わけてん灘藏と船藏に允して今番の伴
 立せん就中妙算の才覺の感惑るにあまりあり鎌倉に赴きて締の始末を聞わけるが御沙
 汰あるべき事ながら傳達にての遺漏もあらん執權問せ給ふとき汝みづから演說せば營中の
 首尾宜しかるべし恚れ汝も推積してはやく那地へまゐれかしよりて雑兵一兩名を遣して
 路の案内にせんこの義もこゝろ得いへど丁靈にとき示さるゝ賞感大かたならざりければ妙
 算灘藏船藏等の天にも升る心地して異口同音に言受しつゝ喜び限りなかりけり然程に雑兵
 等の準備の爲に吊もて來たりし二挺の網橋子を昇入るゝを兼胤下知してそが儘も真方主と
 時種を這橋子にうち乗せて緊しく鎖して撞出させ許多の士卒に成らしつゝ鎌奴がはや牽居る
 馬に閃りとうち乗れば荒海灘藏船藏も近習の中に立雜りて馬の左右に隸添ふたり隊伍紊

さす齊々と徐行く方の山峽に横雲かゝる朝出立彼誰時の風戦々庭の小草を折布て雲時目送
 る妙算のその身もけふの起行に心いそしくなりけり原るに這妙算が良人なりける荒海
 鱒九郎有基の亦是千葉の家臣にて千葉郡の眼代なりき邪智貧婪の墨吏にて年來私慾多かり
 けるを民のために嗾訴せられて罪戾脱るゝに辞なく久しく禁獄せられしに獄舎の中に身
 まかりけりこの故にその妻と兩個の兒子荒海灘藏船藏の城下を追放せられしかども他郷へ
 出るとを允されず放免のごとくよしてなほ封内に置れけりこの戦國の沿習よて虐實と外
 へ洩さじとてなり是より以來母子三名身の便着あかりしかば灘藏と船藏の人の爲に馬を追
 ひ又川舟を漕なせしたれをそれら備ふ者稀なれば果の博徒に寓居して僅に口を餉ひけり
 又その母親の女僧となり妙算と法名して福草村に禰小なる庵を締ひ托鉢して餞に充んど欲
 せしに鱒九郎が非義多かりしをさゝ妻の助言よれり恚れバ新尼妙算の鱒九郎よりこ
 ろざまのいとれそろしきものなればとて里人等皆憎みていひ合さねて手のうちの施す
 るもの多からねば妙算いよゝ困窮していといせん術なかりけり然るに這妙算の原是似非
 巫の女兒よて婦女子に稀なる小文才ありこゝをもて幼稚さときより親の生活よじたりけ

陰陽説相卜筮の趣を見熟聞熟たりけるに記帳も人に提れよけれ。今に至てこれを忘れず。
 人窮それバ邪念起る凡浮世の習俗なれを妙算ハ苦しき隨に年來念ヒ奉る。觀世音より夢想の
 示現を蒙りたりと詭借て思ひ起せし錢卜を生活にせまく欲して初の程ハ街衢に立辨又任し
 人の歩を駐めてその吉凶を占ひしに信ざるものあり。信せぬもあり。信ざるものは魅されて當
 らざるとなかりしか。ははじめ笑ひし里人も新に走り奇を好む見識やうやく立かへりて世評
 高くなる隨に妙算ハ又街衢に立ず。日毎に庵に在りながらその占いよく行るハにより灘藏
 船藏等も母の庇にて身の皮さとのいで來しなり。恚りし程に當國の郡領千葉介兼胤ハ年來鎌
 倉入出仕しつ侍所別當に補せられんとを望しかども左に右に障りありていまだ宿望を遂ざ
 りしハ貞方主と追捕の事京鎌倉より下知せられて擲捕てまゐらせなバ勸賞ハ乞に依るべし
 といと嚴に聞かしか。いかに貞方主従と誑引よせて虜にせばその功をもて我宿望の成就そ
 べしと尋思をしつハ扱鎌倉へ密訴して計策を献り兼胤叛逆籠城の趣を詭借て近國にいひ流
 し竊に家傳の藥酒を醸して客店その餘も坊買等に計策をとさ示して件の藥酒を預措く折妙

算もよしと渡聞て忠節の密訴ありと倡て千葉の城内に推參し賤尼ハ亡夫の罪によりて城下
 を追れしものなれども賤のおん爲を思ふにより身の咎と見かへらず推て忠告し得る也。その
 所以ハ角様々々と己が錢卜の行るハ爲休を演述し恚れバ客店酒肆にも提りて賤尼ハ庵の如
 く衆人聚合ふ所ハなし。いかに這回の密策ハ預らせ給へらバ拙兒灘藏船藏等と共侶に日毎の
 群集ハ心をつけて貞方這地來たらんに術計を旋らし藥酒を薦めて虜にしてまゐらせ
 し尙功成らバ兒子等を召還させ給へんとを只願願ひ奉ると聞かされたる思虜口才女ながら
 も事を爲すべき面魂に見ゆければ兼胤則その乞ふ隨に貞方主従の訪像と藥酒その餘の東西
 までも形のごとくに取らせしに妙算ハ又この外に新田義貞以下の位牌と造りて佛間に置ん
 ど請ひけり。その議も亦よしあれば兼胤又件の位牌に古色を着て造らしつ竊に妙算に取らせ
 けり恚而兼胤と妙算が秘計不幸よして行れ然しも名將勇臣の運の窮といひあがら果敢なく
 虜にせられしハ薄情かりける事よかん畢竟貞方主従の鎌倉へ牽もて去れて後の話説甚麼ぞ
 やそわ次の卷に解分るを曉ねかし。

開卷奇驚俠客傳第一集卷之三終

開卷奇驚俠客傳第壹集卷之四

第七回

七里濱に供波衆惡を洗ふ
千葉城に土療潮聲を理む

再說妙算の兼胤の啓行を折戸の頭に目送り果て手はやく早朝の炊きをしつゝ、御導の爲に遣
されたる兩個の雜兵も飯を薦めてその身も起行の準備をしけり。當下雜兵等がいふやう這回
かん身の働らき、昨夜息子を走らして殿へ住進し給ひしを我等も圖らず側聞して詳かに知
とを得たり。寔はかん身の女丈夫よて智慧才覺の逞しきを今さらにいふべくもあらねど最愚
なる我等に、こゝろ得がたき餘なきにしもあらず。そを試に問まうさん歎といへば妙算うち
笑てその何事よかありつらん。快々問せ給へかしといひて雜兵さればとよ那陀々花酒の
ぬる比。殿よりねん身に賜りたれば這座よこそあるべけれ。然るもそれを用ひせして別に息子
に乞まつらして荷桶に容れて擔ひあるきし藥酒を故意酔筒へ篩して那貞方等に薦め給ひし
の甚麼ぞや。こゝろ庵に置れしも息子の荷桶に容たるも此彼れなほ陀々花酒なるに近きを棄
て遠きを求めし。こゝろの進退料り難かり。そも後學の爲なるを願ふ。巨細は聞まはし。や、説

示し給ひぬ。と問ふとこそと妙算の微笑ながら領きてね身達よくも思はずや。那貞方等主従
の素より用心深きもの也。一旦うち解たりといふも飲食にの意を附て進るとても件の酒を
飽までに飲むべくも侍らず。然れば老尼の初よりこれらの所以を思ふをもて殿さまも乞ひま
つりつ。兩個の兒子を買人に打扮しつゝ、灘藏にも件の藥酒を擔して日毎に這里へ立よらせし
の深き思慮あるとにして且豆腐を買ひ酒をも沽ふて。這一種を貞方等に進るときの疑れず。那
主従の巨量にてはや一升を端すとも尙貯藏の一升あれ。時に臨て匿しからせ思ひの隨に醉
臥させず。何によりてか勝にせられん。然るをこゝろの思ひ淺くて酒を外より徴めきに貯藏
の酒ありと倡て這里に措れし陀々花酒を遣んと欲せるとも獨居なる尼が庵に相應しからぬ
升酒のあるべうもあらざれば。那奴等必疑ふて飲むといふとも飽までにいかでか心を緩すべ
き。尙飲むとの多からで。藥酒の效の薄くもあらば蛇を殺して頭を碎か。途に崇に遇へるが如
く。悔しき事のなからせや。豫の深念かくの如く。後の後まで考て那貞方が這地へ來つるを俟
てこゝろを着たる也。豆腐も要あるものとし聞けば。却船藏に豆腐を買らして。形のごとくに
謀りしかども。那主従が折もよく這頭を過るにあらざりせば。我圖套も空となりて施すによし

なからんを餌に聚る淵に釣を呑む魚よりもなほ淺はかに引入れられしにこよなき造化那等
 が運の場たる也と緯詳に説諭せば初て曉得る雜兵們のさてもくとばかりに舌を巻きつゝ
 感嘆して又いふよしもなかりけり左右せる程にはや日のいと高く昇りしかば妙算の遮しく
 行装を整へて兩個の雜兵に引れつゝ立出んとしつる折忽地肚裏におもふやう嚮に介殿より
 賜りたる陀々花酒の解藥一貼あり今の要なき東西ながら尙返せと仰るとのあるべき賊料り
 難かりそを今遠く出てゆく庵に遣し措んより我が懐にしだらんにの時臥て便利なるべく失
 ふともなかるべし然ばとて舊たる韋匣を開きて取出さんとしたれども件の解藥はなかりけ
 り正しく這裡に藏め措きしにさきといとく不思議にこそと獨語つゝ上下を引返しつゝ索
 るに竟に又あるとなければ尙置忘れたりけん歎とてその餘の篋をも棚の隅まで隈なく搔撈
 ると既にして半响ばかり獨心の焦燥のみ去向を急ぐ首途なるに何時また人を待し置くよし
 のおければ思ひ捨て草鞋穿締外に出て引よする門の兩折戸固く鎖くあじろ笠うち戴きて衝
 く杖の直きに恥ぬ横巷路雜兵二名と連立て今宵の宿の何處ぞとうち相譚つゝ薪樵の餘倉を
 投ていそぎけり案下某生再説千葉介兼胤の新田貞方主従をうち乗したる網駕籠を許多の士

卒に成らしつその身の後陣に馬を走せ夜を日に續ぎて急ぐ程に踏月二十一日の赤牌の比に
 鎌倉にぞ着にけるいぬる日福草村より首途せし折走馬の使者を先たてて管領家へ注進せし
 かバ鎌倉の執權憲定入道歡ふと大かたならずよしを持氏に聞わあげて專その到るを俟ける
 に這日兼胤來着して宮中に伺候しつゝ憲定且對面して功を褒美てその始末を問ふに兼胤思
 はず膝を進めて豫ての計畧圖に中りて貞方並し時種を虜にしたる首尾を遺もかく演説しつ
 女僧妙算が緯の趣その子灘藏船藏等と共に深く謀りて貞方を他が庵へ引入れたる手段
 の箇様に候ひしとてその才覺の捷れしよしを今見る如く述しかば憲定感心殘からせ御邊の
 大功いへばさら也勳賞にこの年來宿望の聞わある侍所別當に補せられんと疑ひなし又件
 の妙算とかいふ女僧もその功賞をべきもの也是又宜く御沙汰あるべし就て老秃就思ふに那
 貞方の幻術あり又時種はその方世に敵なしと聞わたり一日藥酒に酔しめて軌く虜にした
 りとも久しく獄舎に繋措はるその藥毒のやう屋く醒て逃亡るとありもやせん恚ればはやく頭
 を刎て福の根を断んのみ然ばれけふの日も闌たり御邊も人馬の疲勞あるべし今宵こそが儘
 よく成らして翌午の時ばかりに七里の濱にて誅戮して首と寶劍に入れ給へさるとさの謬て

走らす患なし日。これらの趣を老禿宜く披露に及び、臆て御前へ召るべし。その折見参し給ひとて、丁寧に意中を示して、形の如くに相計けり。然る程に、鎌倉の管領足利左馬頭持氏主の憲定入道の披露により、よしを詳に聞て喜悦に堪きはやく兼胤に對面とせしとて、未廣の間に出席ありしかば、執事上杉憲定入道長基を首として、冢臣右衛門佐氏憲助の長子、安房守憲基の子等自餘の近習も扈徐して、整々として羅列れたり。登時千葉介兼胤の召れて拜謁する程に、持氏招き近づけて、這回大功の趣の執事の披露によりて、具に聞に、新田の世々の變なれば、追捕忽ならざりしを、貞方隱形の術ありと聞ひて、有可等擲捕るとかたはやく、十餘年を過せしに、和殿一巳の才覺をもて、貞方並に時種を輒く虜にしつる事賞するにあまりあり、則這回の忠賞として、侍所別當とせけふよりして、その職も就くべし抑件の職役のむかし右大將頼朝の時、和田左衛門尉義盛をもて、初てこれに補せられたり。其後義盛親族の憂に下りし折旦くその職を辭して、籠居りし程、梶原景時これに代りて、假に當職たりしより、義盛の服闋るといへども、景時押へて敢返さず。二世將軍頼家の時、梶原一族滅亡して、義盛稍その職に復りしとぞ、異代の先蹤かくの如く容易からざる重職なれば、和殿しばしく愁訴して、望みまうと聞たれども、久しく

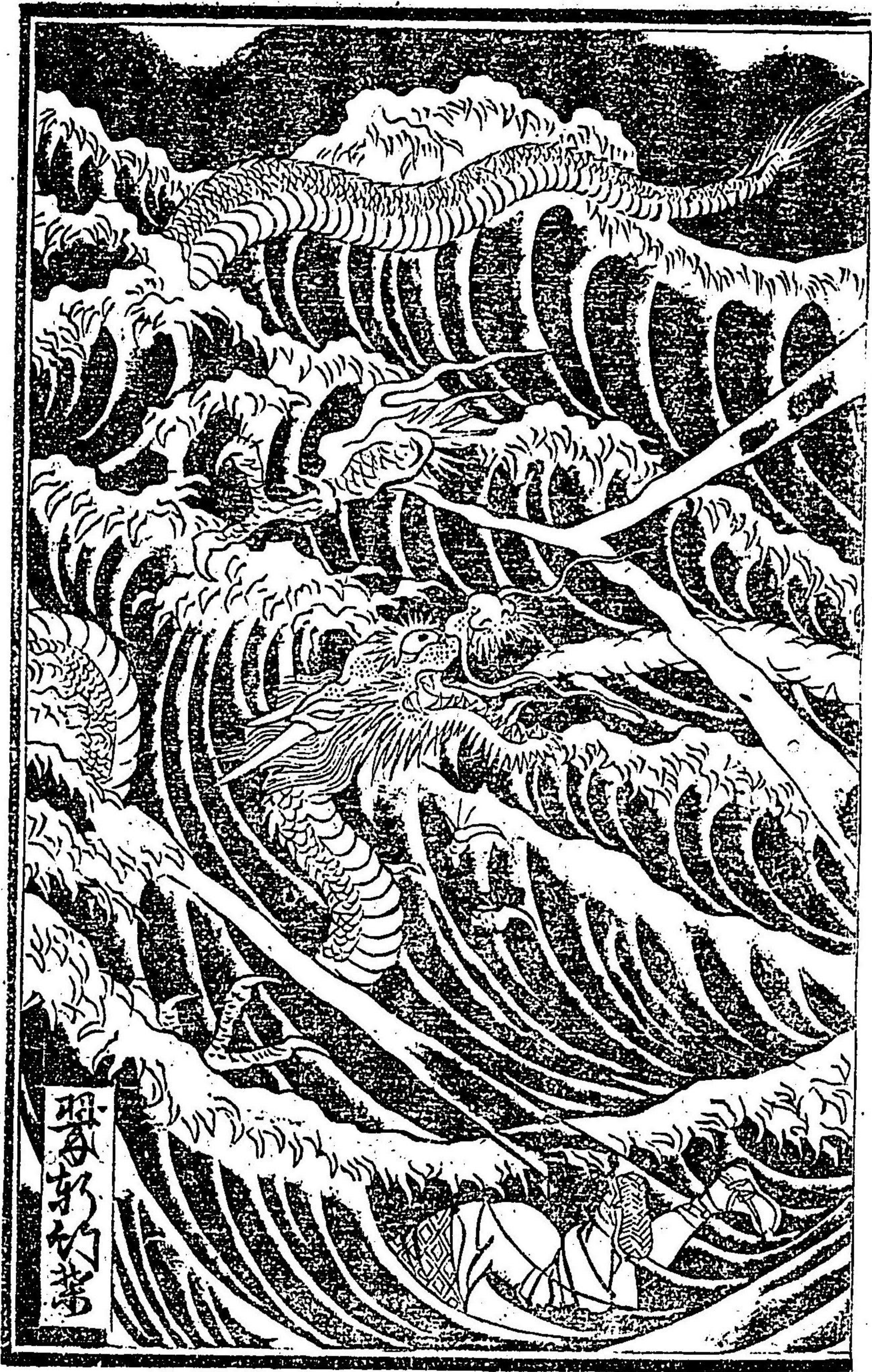
允ざりし也。又那福草村ある妙算とか、云女僧も和殿を資助し、その功多かり褒美の宜しく乞に依るべし。並に女僧が兩個の兒子荒海灘藏船藏等も、計議に與りたりとかいへば、親妙算と共侶に恩賞の沙汰あるべきに、この義の執事に談せらるべし。それよりもなほ、遂に執行すべきもの。新田貞方主従を誅罰の事也かし。他の素より幻術あり、藥酒に心氣を失ふたりども、時日を過さば、由斷に似たり。明日刑戮あるべしと、執事のまうと旨に任して、和殿この義を奉り、畑時種共侶も七里の濱にて頭を刎べし。事非常と警めて、等閑に執計ひると、丁寧に宣示して、氏憲をもて當職補任と、貞方誅罰の御教書と此彼二通と、遞與されければ、兼胤宿望一時に遂て欣然として、受戴さ喜ひを、述言承して、臆て旅館に退りけり。恁而千葉介兼胤の這夜も、その身の士卒をもて、生虜貞方主従を、最も緊しく成らしつ。次の日巳時の比よりして、貞方主と畑時種と、網漕籠に乗たる隨に、許多の士卒にうち圍して、七里の濱より昇もて居させ、その身の馬にうち乗りて、法場に赴く程に、これを觀んとて、彼此人の各足を空にして、走りてその邊に聚ふもの、鹽瓜の皮に附く蟻よりも多かりけり。そが中に、觀ん爲ならで、思ひを來かゝりて、路去りあへぬもの、にやありけん、建たる勝をつらく見て、噫無慙や、貞方主の然しも、新田の嫡流にて、南方武臣の棟梁

没奈何 長脚 盆の類 内に 造り 立たる 又明製 酒の製 異也予 没奈何 考一編 あり今

なれば冠位の四位の少將たりしに扶搔に縛て九萬里に逍遙すといふ大鵬も既に羽翼を喪ひてハ龍蝦の爲に征せらる。邢白龍の魚腹たる余且の網をいかいのせん。項羽が力山を抜きしもその勢ひ窮りてハ島江の舟渡をに由なし。されハ畑時種が忠にして且勇なるも現片糸の線に成らず。孤掌の鳴し難かり。新田の族ハ今この時に絶果ぬらんと吐きけり。恚りし程に妙算ハ那雜兵等とうち連立て。日毎に路を由圖なく只管に走りつ。這日己時の半比鎌倉に着さしかハ。艦を兼胤の旅に到るに兼胤ハ既にはや貞方主従を誅戮の爲七里の濱邊に赴きたる。折からの事あれば妙算恚と傳聞て然らんハ我も亦はやく那里に赴きてその爲体を觀るならば。後々までの話柄になるとも多からんを網果るまで這里にをりて殿を候んハ要なしとれもふこゝろを雜兵等に辭さつ又立出て走りて件の濱に到るに既に亭午の比なれば群集ハ推も分がたかり。然とも上の威を假らば。間近く進みよるとても容易かるべきとながら了得ハ出家の憚りもなく。刑罰の場に面を露して。それを觀んとの相應しからねハ程よき所に鶴立て瞬もせ。關親をり時に應永十七年秋七月二十二日。この日ハ朝より天結陰て秋氣猛ハ肌膚寒く濱風大く吹暴たれば岸打波の音凄しく沙石の空宙に吹颯られて人の面を撲しかハ群集の衆人得堪ず。

又こゝ
 せに
 驚せ

して威退さて磯馴松を盾にしておほ觀るもわり心弱りて見果ずして家路を投て還るもあり。そが中に妙算のみ風にも撓ます波をも怕れ。人の扶疎になりもてゆくと倒に身の幸よして。思ひすいよく進みけり。既ハ時刻にありしかハ千葉介兼胤ハ士卒に下知して四下に近き衆人を拂しつ。その身ハ登に尻を掛てをさく。非常を警れば雜兵無慮五六十名白楸の棒を遺錯して。拵して人をよせ着す登時兼胤海下知して貞方主と時種を網橋子より牽出して敷草の上に座するに氣息の暢ふのみされ。いかにして跪座くべき介錯のもの手を放せば忽に地に破と倒れて酒を盛らざる。没奈何の壘に異ならねハ兼胤見つ。焦燥て雜兵の突立たる棒二條をとり寄せて兩三段に伐せしを貞方主と時種の胸と背に推加して俗に突張とかいふもの。像に操りたりければやうやく倒れせなりけり。荒海灘藏船藏ハ母妙算の功によりて豫より主命あり。この日の劊手なりければ細鎖の甲手に盾して糾すの襟を褌しく斬柄衣たる脩刀を用晃々と抜放ちて貞方主の背の方ハ荒海灘藏進みより又時種の身邊へハ荒海船藏立よりたる。その緯の爲に体を凄しくも亦哀れなりしを觀る人各々胸を冷して竊に彌陀佛彌陀佛とせのしく唱るものもあり。或ハ涙をさしくみて背向に成る多かりけり。然程に灘藏と船藏ハ貞方主



龍吟



至柔之水
征至剛人

と時種の頃の後毛掻揚て雙方齊一拿直す刀を閃りと振揚て既に撃んと見ゆかす刃の光の疾電も思へばこの時速からで猛に吹來る暴風天をかきめ地を動して小山の像き洪波あり濱の方より突然と七里の濱へうち寄する疾と宛箭の如く一打洗ふて引返す激浪怒風の勢ひに誰か一個も脱るべき斬るゝものも斬るものも貞方主従荒海兄弟女僧妙策等いへばさらば也警固の士卒幾十名猶且群衆の衆人も殘忍よして哀を知らせ他の患を樂むものゝ威這洪波の爲に捉られて澳の水屑になりけりこの故に兼胤も亦脱るべき路のなけれは齊一波の底に淪みて士卒と俱に死ぬべかりしを海よる暴浪も思ひせもうち揚られて濱邊の松も携留り死ざるとを得たれども多く湖水と飲たれば霎時の息も絶たる似くわれにもあらでありけるを地方の民に介抱せられて稍人心地つきまけり那の高濤の只一度にて濱邊一町に過ぎりければ里人の屋なぞを損ふといなかりしを兼胤のみぞなごりなく人馬を波に掻獲れて身に從ふものなくなりければ浦邊の民に送られて獨旅館にかへり來つ留守せし家臣に恚々と那水災を知らすれば皆々聞つゝ胆を潰して恐れざるものあかりけり且くして兼胤の氣力やうやく定りて左さま右さま思惟るゝ許多の士卒を喪ひしを惜むとも返るにあらぬと緊要なる貞方

と時種さへに波濤よ捉られて首實檢に入らるゝに由なし願ふは灘藏船藏の那主従を鹹りたる歟いまだその龍に及ばせして俱に波底に淪みし歟那高濤のうち寄せし思ひかけなく速にて瞬間もなかりしかばそを見も認る俺も亦水に溺れし事あるに誰かよくこれを知るべき然れば貞方も時種も奇方の酒毒醒るとなくそがうへにいと厳しく細めたりしをなれば人より先息絶にけんその龍ばかりの疑ふべからせこれらのよしをとり繕ふて聞はあぐるに如とあらじと尋思をしつゝ残り穿き士卒五六名を將て病苦を忍びてその夕昏に執權憲定入道の宿所に赴き那水災の緯の顛末箇様々々と告訴して貞方も時種をも波捉られし事をバ況士卒の一人として脱るゝもの候のせ下官さへに溺れしを幸ひにして九死の中に一生を得て候ひさなれども貞方時種の首を撃せし後あれば誅戮に障りあし只その首を失ひたれば實験に入れがたきのみいかで貴老のれん執成を仰ぐの外候はずと實事虚語うち雜ておそるゝ演しかば憲定入道うち驚きて思ひ難たる眉根を擧め昔よりして七里の濱へ然る高濤の寄せし事の聞も及ばぬ稽事也然れば貞方時種の首を撃れし後ならば亦怪しむに足らぬども悔しくも先例に任し事件の主従と那濱邊にて誅せしこそ愚老が脱で候なれをいかにぞと推ても見給へ貞方の幻術あり火に遇へば火に隠れ水にあへば水は隠ると豫ても傳聞た

るに。そこらに心つきなくて海邊に牽も出させられたれば。既にその身ハ死するといふとも竊に祐
 る邪神ありて波を起して人馬を損ひ爲に怨を復せし歟是も亦知るべからせ且近屬小坪なる
 漁者の説也とて人の噂に聞しとあり昔年正慶の鎌倉攻に新田義貞進み難て海神に禱るとわ
 り黄金製作の大刀を解て投て波底に沈めしかば。稻村が崎干瀉となりて。その隊の軍兵障りな
 くはや鎌倉を攻入て高時滅亡せしよし世舉て知る所也然るに後世件の大刀ハ化して金龍
 となりて。稻村が崎の澳に在り漁者知らせして。その所を犯せるときハ必崇ありといへり。いまだ
 虚實を知らねども若果してその事あらば。件の海龍舊縁を感じて爰に做すと云り。眞方主従
 の爲に崇を致せし歟凡慮の及ぶ所にあらせ然バとしてこれらのよしを世の人に知せなバ。新田
 の餘類をなほ憑しく思ふものゝありもやすらん秘て努々洩すべからず。因て愚接を旋とよ一
 時の水災なりとても當家累代の怨敵なりし新田の首級を暴瀆に捉れり。なんどといひ。京
 鎌倉のかん威徳の薄きに似たれば。愉快らせ。縦那首波瀆に引れて。一旦海に淪むとも。日を経バ
 必いづれの浦にか。流れ着るとなからずや。いそを取あげて。梟首せバ。世評も亦定りて。人の疑念
 を露すに足らん。這首よりも近國なる海邊漁村へ下知せし。御邊も亦よく意を着て。そこらの

穿鑿肝要ならんと意中を盡して論せしかば。兼胤僅に心おちらぬて喜びを述別を告て旅館に還
 りて又おもふに。眞方時種の首級の事歎られたる歟。斫られざりし歟。今さら知るよしなけれど
 も執權にいひれしよしを等閑にせべくもあらず。若やと思へば。次の日より。士卒を近き海邊に
 遣し。新田眞方畑時種等が首級の流れよるとあらバ。快取揚てもて來よとて。部を定めて。涉獵せ
 し。第三日の朝。七里の濱へ赴きたる。雑兵が那濱にて拾ひしとて。道俗三箇の首をもて來ぬ。兼
 胤喜びそを勞て一箇々々にこれを見るに。惡魚にや傷られけん。いづれも面に瘡りて。見定めか
 たきに似たれども。この疑べくもあらず。兩箇の首ハ。灘藏船藏。髪さき首ハ。妙算也。這時にこそ兼
 胤ハ。かの日に妙算が到着して。眞方主従の誅せらるゝを見んとて。濱邊に來つるにより。兩個の
 兒子とかなじ折波瀆に捉られて。恚なりけるを。初て曉得て驚くのみ。言に出さバ。倒に外聞。惡し
 と撞遣て。肚裏に思ふやう。這親子の軀の失せて。首のみ故の濱邊に寄るハ。惡魚の爲に噉斷られ
 て。不具となりたるもの。にこそあらめ。這後も又流よるべし歟。寄るべからぬ歟。心もとなき。眞方
 の首を。索んより。這灘藏船藏等が面に傷きたるこそ幸ひされ。この兩個の首をもて。眞方時種の
 首級也と稟して。寶檢に備なバ。復我面を起すべし。汗然なりと尋思をしつゝ。計校既に決まりけ

れ。○臈て○件の○兩個の○首と○首函に○歛め○士卒にもたして又○憲定の○宿所に○赴き○下官○連日○彼此○ある。浦邊に○士卒を出して○お下知の○旨に○等閑なく○形のごとく○よ計ち○せしに○今朝しも○七里の○濱邊よて○道兩○尙の○首級を○獲たり○惡魚なごに○や傷られけん○此彼共に○疾めれば○安定ならぬに○似たれども○下官○鑑定仕るに○この○疑ふべくも○あらず。○貞方時種の○首よこそ○候へよつて○實檢に○入れん爲。○解て○候也と○實事しやかに○いひ誘て○兩個の○首函を○さしよすれば○憲定入道○感悦して○然らば○老拙内○檢せんとして○猛に○席を○更めて○老黨を○召近つけ○一個々々に○首函の○蓋を開して○熟視るに○既に久しく○潮水が○漬りしそがうへ○傷さへある○首なれば○疑ひなきに○あらぬども○兼胤認りたりといへ。○今さら○虚實を○糾すの○要ありと○を○梟首せよ世の○人の○疑念○評論○解散して○いよく○泰平なるべし。○と思ふに○よりて○詰りも○問を○忽地○莞爾と○うち笑て○千葉殿よく○こそ手に入りたれ○御邊證人たるうへに○是を○貞方時種の○首級あらと○誰か○いふべき。○然れば○潮水に○斃れて○傷さへあれば○古例に○任して○上の○實檢に○備ふべからず。○はやく○濱邊に○梟給へとて○偏ら○老障ら○老鷹揚に○首級を○返し與へしかば○兼胤の○こゝろ○得果て○繼て○七里の○濱邊に○趣き○士卒に○下知して○兩個の○首を○形のごとくに○梟させつ○巨く○これを○成れとて○雜兵○兩三名を○留置て○その○身の○旅館へ○還けり○這日よりして

件の○梟首を○觀るもの○おほも○批評して○半信半疑せざるの○稀也。○そが○中に○始よりの○情由を○知りたるもの○ありて○その○友に○弄けやう○千葉殿の○さまに○に○遣き○計策を○旋らして○新田主従を○虜にしたる○陽に○忠義と○聞ゆれども○陰に○わざと○策利を○思ふて○その○身の○聲を○遠ん爲也。○この○故に○海神の○崇に○遇ふて○幾十名の○處卒を○洪波に○喪へども○おほは○懲りせまに○上を○欺き○歸參の○家藏○藏等が○首と○捨ひしを○幸にして○これを○貞方主従の○首級也と○詐り○稱へ○繼て○濱邊に○梟並べて○心よ○差るとなきに○那人一個のみならぬ。○今○戦國の○常情なれば○就中○甚しき○僻事に○あらざる○歟。○又○那妙算が○奸智に○長たる○既に○佛門に入りながら○夢想に○假托て○人を○欺き○剩兼胤主を○資て○那奸計を行ひしに○領主へ○忠義の○爲より○あらで○兩個の○兒子の○歸參の○願ひを○果さんとて○の所爲あれば○因果親面○隱匿の○報ひを○越に○脱れず。○親子○三名横死して○祀られぬ○鬼となるのみならず○その○子藏藏船藏の○新田殿主従の○身代に○立られて○梟首せられしこそ○無慙なれ○道理によりて○推そとさる○兼胤主の○終る所。○又是いかよかあるべからん。○怯るべしと○瓜彈をして○敬せしとぞ。○誠は○問ふ世の○こゝに○至て○抑これ何と○か見たる○鎌倉大草紙に○いへると○あり○應永十七年七月廿二日云々。○この○節○新田との○嫡孫○謀反を○起し○廻文をもつて○便宜の○軍兵を○備されければ○鎌倉の○侍所○千葉助兼胤が○生捕にして○七里濱にて○討之○按雲記にも○亦云○應永十七年七月廿二日○新田貞方へ○義宗の子○千葉助是を○搜し○七里の○濱に○於て○殺戮○武臣傳に○又これを○載て○貞方の○云々○應永九年○没落與

と淫おん即陰いん慝てい也是を惡あくといはずして淫おんといへるに深意しんいあり惡あくの素もとより王法わうぼうの免めんさる所にし
て天誅てんしと待まちに及およばず淫おんの竊せうに倣なむ所故ところ人これを知らず所云ところ陰慝いんてい也淫行いんぎやう也僥幸りやうしやうにして免れ
たるも天かならず禍わざはひを降くだをもて箴いさめしめと老古人らうこじんの格言かくげん妙なる哉いかむかし少納言せうなごん入信いんしん道西どうせいの
博學はくがくなるも禍わざはひを快避くわいひんにて生ながら身を土中に埋めてなは禍わざはひを脱だつれ得えざりき兼胤かねいんの事
これに似たりこの後千葉介入道常瑞たやうじゆんの時に至て享徳四年八月中旬一族原越後守胤房馬加陸
奥守光輝等おくしゆくわいも攻撃せうこうれてその子胤直いんちくと俱ともに自殺じそつせし折家の舊記せうき多く焼やけたり那陀なだ々花酒はなしゆの方書しやう
も這兵史このいんぐさひに焼やけ亡なれて傳つたはずありにさといふこれらに後の話説ものがたりなるを因よにこゝに具つよぞこ
も勸くわん徴ちゆうに本もとつけばあり。

第八回

衣箱つちらを啓ひらきて小六遺書のこしよかと得たり
癩疾らしかを救きうふて著演銅筭あまのよからずを失うしなふ

應永十七年秋七月下旬新田貞方主従の事近郷きんきやう隠かくれなく彼かれ報此つたは傳つたへて世の人喋々てしやくしく
いひもて罵ののしる異聞評論區いもんひやうろんく々なりけり恚いりし程に藤澤ふじさわある野上史著演ののじやうしやうが宿所しゆくじよにもはやくその
事の聞きしを母屋ははやいまだ知らでありしに這月二十三日の朝あしたより例の痞塞ついかせの又發またりていと

堪たがたかりければ早飯はやいひの箸はしも得えたらせそが儘まま子舎しよに退しりぞきて且かつく將息しやうそくとる程にはや午後ごごにな
りければ女婢おんなめ共ともの迭代かたかたに湯液ゆゑきを薦すすめ白粥かひを差さめて懇ねんに問慰もんゐめたるそが中なか一人がいふやう
いまだ聞きせ給たまはずやさのふ鎌倉かまくらにいと哀あはれなる事の侍やうりしとぞ其その義貞ぎしんさまのおん孫まごあ
る新田左少將しんたさしやうさまとやらん喚よれ給たまふ主従しゆじゆん二名に名なが千葉介兼胤ちやへい主しゆに生拘なまられて七里しちりの濱はままで斬き
られ給たまひさ始はじをいへば恚い々い也終おひの箇か様やう々々にこそと畑はた時種ときたねの事ことまでも聞きるまにく先後あきさきの
猶なほいで浮世うきよ雜談ざうだんと思おもひ做なしけん左ひだりに右みぎに言多ことおほさくの節ふしも節ふしも凡たゞ婦女子ふにすの習俗しやくよて問とずがたり
の長ながやかなるも母屋ははやの耳みみを敬そへて聞きくも苦くるしし胸むねに手ての得えぞ放はなされぬ心の駭おどろき額ひたいを枕まくらに推駕おし
て俯うつしつ、竊ひそかに思おもふやう真方まかたさまの新田しんたの嫡流ちやくりゆう襲しゆいふの古殿こどの義隆ぎりゆうをとも共とも侶りよに陸奥むつにをいしまし
たれども自方みかたの離散りさんにせん術すべなくて東あづまと北きたに立別たてわれ落おちさせ給たまひて年如あまたの干音かんとん信聞しんぶんへきなり給
へどもまさし浮世うきよに在あしなは小春こはるの天あまのかへり花復はな開ひらく御武運ごぶくの時ときしもありて我が郎君わがらうきんの
資助すけすけにならせ給たまはんぞと憑たもしかりしに思おもひまや屠所とじよの羊ひつじと成果しゆくわいて七里しちりの濱はまの虚傳うつせ員名めいをの
み遣のこし給たまはんとの痛いたましさをいへばへに岩堰いわせき水みづと涌わかへる千ちの行波なみに油あぶらぬべう憂苦ううれ病惱びやう
極きりて腸はらを斷たつ死しの勢いきほひ云いとばかりに叫なびたる聲こゑを這世このよのあざりにてそが儘まま息いきの絶たげけり。

是よど騒ぐ女婢共の薬よ氷よと罵りたる周章大かたならざれば主人夫婦も走り来て且驚き且勵り抱起し喚活てさまぐに術を盡せども脈絡既に絶果たれば復生べくもあらざりけり折から小六の宿所にをらぎ這朝貞方主の事風聲とやく聞へしかば獨竊に驚嘆さてなほ細しきを知らんと思へば例の稽古に假托て鎌倉なる武藝の師範上泉秀武許赴きて四面八表の物譚の次よ貞方主従れ事を聞くに執權憲定入道の家中よも秀武が武藝の弟子多かりければその事既に紛れもなく兼胤妙算が奸計の緯の趣並よ本日の高波よ共方主従の首級亡散りさら也人馬を還なく亡ひて女僧妙算どろの兒子荒海灘藏船藏も底の水屑よなりし事獨兼胤の死を脱れて病て旅館に在るとまでいと詳ありければ慷慨さ事限りもなきを色にも出さず辞別して還る竟途れもふやう貞方朝臣の我が親の古主と再御父兄弟にてをいさるに新田の嫡家なりければ勢ほひ賸り給ふとも舊恩遺徳を念ふものなほ此彼とあるべかりしよいなれば併々しく時種一人と従へて漫行をし給ひけん聞くが如き兼胤の變詐尤怖るべく女僧妙算が邪智逞しき伎倆の程こそいと憎けれ共根を鋤れて枝葉す左にも右よも新田の氏族の忠孝節義も行れず誠を守る神もなく日月も照し給ひぬ歎と世を憤る意中の述懷愛よ堪ば敢果と

らぬ去向の路の枯木の枝に屬鳴く鳥啼々と無常を報る秋曇り天さへものをおもひ鏡よ下哺の北山下風露けき袖を吹拂ふ身に染々と冷やかみ胸さへ連にうち騒げばこり平ならずと思のにも病痾多かる母のうへ心にかゝれば是よりして歩の運を急と程に前面より来るものありけりと見れば是別人ならず野上が家の小廝也走り近つき聲をかけて惣令郎只今還らせ給へる歎我等の家公に吩咐られてかん迎にまわりたり實の母御の瘡發りて既に緯絶給ひたり忘お還らせ給へうしと報るに小六の面色の變れるまでに駭きてその實事歎とばかりよ又問答の違もなくなほ二十町に餘れる路を飛が似くに走りしかば件の小廝に先たちてはやく宿所にかへり來つそが儘子舎に赴きて掻遣る屏風のうらかなしさに成る人あるを見もかへらず枕外して臥せし母の空き骸を動して聲と發ちて泣にけりこの時著演晚稻等の小六を待て這里にをり共侶に諫め奨して母屋が持病の特に劇しく猛に危窮よ及びしより鍼灸藥餌も届ざりける爲休を報知して遺恨しきは理りながら女々しく歎かば亡者の迷ひの種よありもやせん名を揚家を興すをこそ孝の終といふなるにみづから愛してなき跡の菩提をながく吊ねといひれて小六の涙と禁て抑うけぱり候ひぬ親の先だち子の後るゝ凡浮世の順路よて

歎く愚痴に似たれども尙老朽たる身にしもあらま。年來多病候にひしを憊さべしと思ひもかけず漫に出で臨終に得遇りける悔しさの候々までもいかでか忘れん這意を猜し給ひてよといふに然こそと著演晚稻の慰め難て共侶に露けき袖の一滴玉に申くべき誠心の表裏とていなかりけり。是より小六の日を經るまでも心の哀みやる方あきを只艱父母の意を介て慎まふかく言に出さず著演も亦その意を汲て裏事ハ英直を葬りし日の爲体に異ならず。第三日の黄昏に柩と遊行寺へ送る程に里人等の吊するもの這回も一千餘名ありけり。墓堂ハ英直と合葬して過七の追薦讀經形の如くに修行しつ心を盡さぬ事もあければ小六ハ養家の一方あらぬ洪恩篤義を膽に銘じ心に刻みて感涙の夜分ハ枕を濡すまで獨つらく思ひつゞけて何の時にか這大恩を報ひやすらんとわれながら心もとなき久後を定め難つゝ不樂にけり。恚りし程に小六が師なる上泉武者助秀武も八月の初旬より風心地とて打臥せしに老人の健なりしハ頼むに足らぬものにしあれば病と十日可にして身まかりよきと聞えしか。小六ハ驚き且悼み失恃の愛ひいまだ除かず又心喪を累ねつゝ折の悪くて柩の繩を得曳ざるを恨るのと其子秀時に消息して心の誠を表しけり。然程に天涼渡りて吹風寒く夕露繁く簀子の下に鳴

く虫もやうやくに弱りゆく。珠月の中瀬小六ハ母の中陰果てもなほ垂體てをる程に。有一日又思ふやう母刀自の衣ハしもさせる東西あしといふとも。年來親しう使れたる女婢等ハ像見として取らせすハあるべからず。什麼幾襲あるやらん。今この暇ある折に。取出て分ち置べけれと尋思をしつゝ身を起して衣箱の鎖を解披き衣類此彼と出して見るにいと固く封トたる袱包一箇あり。取揚て見るに重やかなれを。何にかあらんと訝りて封皮を折きて推披けば。一口の短刀あり。小札を結着て右少將のおん紀念刺一文字を書したる。そが下に分注して三位の古殿四國下向の折吉野の朝廷より恩賜の御劍是なりとあり。三位の古殿といハ脇屋刑部卿義助卿をいへるからん。この興國元年に那卿越の黒丸の城を拔て吉野ハ内裡ハ參上し。更に伊豫州へ出陣し給ひし折。後村上天皇より賜りたるおん物なるべしと猜せらる柄ハ玉成す夏雷を推並べたらんやう成白鯨にて目貫ハ黄金の華菊也。抜放ちて熟視るに刃の長ハ一尺あまりなるべし。拿直しつゝ鏢下より刃頭まで又よく視るに明ると見々として秋天ハ新月の雲を拂ふて顯れたる如く冷なると凜々として冬山ある積雪に晷斜に映すに似たり。我天皇國の鶴丸時鳩又唐山なる龍泉太阿も是にの優じと思ふに。おん數回歎賞して鞘に収めてそが儘にやをら

側かたへに開ひらきて亦復また包かの内うちを見るに。二包ふたつかの金子かねあり某そのの年某そのの月日つきひ右少將みぎしやうしやうより預あづかり奉たてる所の要い金かね二百兩にひゃくらうと記しる着つけたり思おもひがけなき東西とうせいながら是こゝをも奪とりて一所ひとところに措おきつ遣はなれる一種いっしゆを取揚と見みるに。一巻ひとまきの書策しよさく也。懸かつて繕ひきて閱ひくするに。こわ紛まふべくもあらぬ小新田こしんたの家動うちうごなるが内中うちうちに卷ま籠こたる。一封ひとふちの書翰しよかんありて小六こむすこさまへたてまつる母屋ははやを標書しるはがきせられしうう驚おどきつ又訝いぶしさに。遽いそがしく封皮ふうひを披ひきて首くびより尾おしまで繰返くし又巻返まきかへして讀よむに涙なみだのはふり落おちて事情じよじやうを今いまぞ知しる。小六こむすこが生來しやうらい細こやかに襦袢じゆばんの中うちより英直ひでなほ夫婦ふうふを傳かしめられし事こと義隆たかひろ陸奥むつを没落もつらくの折ひ英直ひでなほに密意みつゐの事こと是こゝより以來いらい世よを潜ひそまへば。小六こむすこを我兒わがこと詭唱ぎぢやうへて許多あまたの歲月としふとを過とせし事こと。又假名川なまがわの旅舎たびやとにて英直ひでなほが臨終りんしゆうに遺言いごんせられし締この頼末たのすえひとつも漏もれず書かきつゝけてかん身の二八にやちになり給たまふ比ひこれらこれらのよしを報つげうして。少將しやうしやうさまより預あづかりまつりて三種さんしゆを選與せんよしまるらせよといひれしよしのことわりあればその歲月としふとを僕わがへてまつて不樂わがしう我身わがみの病着いわたときなく發はりはべるからもし又猛にほかに閉塞せきられてそが儘ままにして陽炎かきろひの息絶いきたることありもせば。おもひし事ことの浮瀾うたかたの泡うとし消きて源みなもとの氏うぢも素生そせいも後竟ごけいも知らずあり果給はてはん歎なげかおもへば翌あすも憑たのれぬ命いのちの内うちにこれらこれらのよしを記しる着つけて秘置ひめき侍はべり人に提たれて幼少おとこをり最もも伶利あざくまませば。二八

の時ときを俟まちせともなきてや早く報ありしと思食おぼせべきとながら然しかでい古殿こでんの仰おほにも又亡夫なきつとの遺言いごんにも違ちがふを思おもへば也。才さいある者ものも年長としながざればその志定こゝろらす怒いかり乗まし折ひに觸ふれて不覺ふに大事だいじを懲あつと世よに多おほかるをいかいせん。人の後あととしなり給たまふべき。かん身にをへしませぬとも。そをしも推辞いひなむによしなかりける。主人しゆじんの恩義おんぎも亦重またかりまうとまでい侍はべらねども。是こゝより後あとのおん進退しんたいの思おもひに背そむかず時宜ときぎによる賢慮けんりょのみこそ願ねがひけれ。あなかしことぞ書かたりける。婦むすめ女子むすめも稀まれなる忠貞ちゆうしん節義せつぎの誠まことの筆ふでに見みれば思おもへばやる方もなき哀歎あいきん交胸かうきゆうを苦くるしき小六こむすこの雲時うんじ愀然しゆうぜんたる感涙かんだい坐まに進すすむを覺おぼす且かつその書翰しよかんを巻納まきなめ。菊きく一文字ひとふじの短刀たんたうと家譜かふを金かねさへ一個ひとつ一個ひとつに。又取揚とて恭うやしく數回あまた受戴ういたきつ書翰しよかん共侶ともに舊もとの如ごとく袱ふくに包かみ重封おも皮かわして海衣箱うたなひばの底そこに藏かくめ上うへに衣ひなどうち累かさねて鎖かぎを關かしつ退しりぞきて合掌あがつしやうして念ねんずるやう嗚呼ああ忠ちゆうなる哉か館か夫妻ふさい託孤たくこの命いのちを受うしより敵地てきちに遺留いりうると既すでにして五六年ごねん困窮こんきゆう殆たく折ひも遺金いごんを有ありて失うす主しゆ君きみの在所しよじよを知るに及およびて逆旅さかに病やみ起たれおれどもよくその妻よめも遺言いごんして我身わがみを野上ののに託たくたりし。程嬰ちやうえい杵き臣しんも及およぶるべき遠謀えんぼう遠慮えんりょ儻たう罕はん也。况いは母屋ははやが恨うらみ深く姑終こしゆう良人りやうじんの運命うんめいを守まもりて忍しのびて馬脚ばあしを露あらすその身の命長いのちながからじと豫あるの覺かく期きよ書かきし遺書いごん翰かんなくばいかにして。我身わがみに實じつ



の二親の在せしをよく知るよしあらんや恚れば遺書ハ一字千金句毎に錦繡ならぬなし。我生れし比母御前の世を去り給ひしとわさら也。先君子の陸奥を落させ給ひし事とらおぼえむ。織襦の中より館夫婦に守字れたりけるに。大六小六の名も相應しさに主従なりしを思ひもかけず田舎に育つ鶯の舊巢の中の杜鵑親ならぬ親を親とし慕ふて成長りしハ潜々世の起住ひとのいひながら禮にハ則八母あり慈母乳母も亦母也養育せられし年來の苦勞を思へば恩高りなは養父母と思んのみ何てふ賤して家隸といはんや只悔しきハ八稔已前那藤白安同が這里へ來つるを覬覦し折我年詣の九ツよて親の古主の冤家ぞと思ひにければ躊躇て撃も果さずで目免しにき今又思へハ他のみならず足利氏ハ君父の讐也是より心を盡すとも討とかたくな腹搔所ていかで這身を大日本の豫讓と做して己んのみ然れば養家ハ恩人也其洪恩をまだ報いで身をわが隨になすならば君父に忠孝ありとて養家の爲にハ不義にして恩を仇もて復とに似たり忍びがたきを忍びてこそ術よく志をも致めなほ報恩の時を俟て這大望を果すべし先考先妣乳母夫婦あは靈あらば某が憶念志願を聴給へ悲しきかなと身を投俯して言に出さぬぞ忠孝節義の智慧も器量も世の人にまさら男子が鳥屋出の鷹の悠るをこづから籠鎖

て竊に胸をぞ定めける恚而今茲もくれ竹の世の愛事とら限りあれば十二月の初旬に至りて小六ハ母の忌ハ開けり。この時既に那上泉秀武の眷属ハ故郷へ還りにきと聞はしかハ又鎌倉へゆくともあし。文學武藝も大かたならせ學得たるうへなれば是より後も宿所に在りて讀書に古人を友としつ獨鬱胸を慰めけり明れば應永十八年この年小六ハ十七歳奴婢之助ハ八才になりければ小學に入る例も做ひて著演ハ春の比より奴婢之助に手習せ讀書ハ小六誨はよとて實語童子の二教より學の窓に倚らせにけり然れば小六ハ奴婢之助を實の弟のごとくして親愛尋常ならざりければ奴婢之助も亦小六を慕ふて骨肉に異あらず是に就き彼もつきても小六ハ母屋が在りし時ともすればいひ出てうち歎きたる信夫が事の又今さら忍れて心ひとつにれもふやう男子ハ四方の志あり女子ハ封境を出すといふに時の不祥にあかれども他の年來往方をしらす我ハ還て家にあり異日もし志願を遂て鳥の籠中を放れしごとく四方に遊歴するとあらばいかで信夫が在處を索ねて環りもあふ歎得遇いせともそが存亡を知るとあらば只是他が二親の徳義に報ふよとがとあらん然る折も欲得と念まるのみ今の身にしておすとかなき我幸なしとぞ不樂にける休題復説藤白棚九郎安同ハ巖に義隆主を擧捕りし

より年來鎌倉に在勤する程に便佐利口の小人なれば生平にその君の愆を知りて微めざれども獻するとあり又よく執權に佞媚て使ると奴僕に似たりこゝをもて前代滿兼の時よりして漸々に用ひられて掌る所あり當主持氏も亦これを歡びて去歲の秋九月の比相摸の眼代にしてければ雖て受領して隼人正になり外り是より民に威權あり折から毛檢の爲にとて國中をうち巡るにそのゆく所に毒を流して民の膏腹を絞りしかば人僉怖るゝと虎狼のごとくその役は勝せして罪せらるゝも多かりけり恚りし程に安同のかなじ年の冬十月藤澤を巡歴して邑長の宅を旅亭としつ有一日件の邑長をもて著演いひするやう此回新眼代藤白隼人正當郡を巡歴せられて今某の村に在せり宜く常例錢を出さべし先例の所帶百貫毎に錢五貫とか聞へしかども此回の十貫文を宛られたり野上の則藤澤南郷三千貫の所帶なれば三百貫文を出さべしと憤らせしを著演聞て従ひて面を正しうして答るやう我家の鎌倉將軍の始右大將頼朝卿の時諸役免許永代不易の御教書を賜りしより以來今の管領家に至らせ給ふまで常例錢などいふ東西の聞も傳へぬ事ぞかし縦古例を蔑如して新法を建らるゝとも基氏朝臣のかん時より前代氏滿兼兩管領の御家督の最初毎に宜く古例に依るべしと定めさせ給ひた

る下知狀こゝまあり藤白這義を知れし歟知りつゝ非法を行ひ是則黒吏也尙しらしめて求るならば只その愆に細くて職分にいいと疎かり誰か不直といひざるべき某のしらるゝごとく義の爲に財を惜せその樂て施せども勢利の爲に權されて一錢たりとも費しがたかり且這是非を正して後にその理あらばうけ給はらん然なくば決して従ふべからず這義を以藤白主へ傳へ給へと理に強き辭に返さしめなき邑長の阿容々々と摩掌をしつ告別してそが儘宿所にかへり來つ却安同に恚々著演が従ざりける答を聊斟酌してその大略を報しかば安同聞つゝ大く怒りて訛たる聲をふり發し憎き野上奴が過言かな今より七八年前つ比我の些の好意をもて那奴は問ふべきとありてこづから那處に赴さしにその折もけふのごとく強情張て従せ理もなき過言の聞捨がたさに擲捕て鎌倉へ率もて去んと思ひしかども折から那奴の親族の喪中なりとて勸解るによりその義に及ばで免したりしに先度に懲ざる不敬の擧動今のしも免すべからず兵等はやく我爲に著演が宿所に赴きて擲捕て率もて來よ快々せせやと敦園さしを邑長いおそるゝ一兩個の故老と共にやうやくに推鎮めておん憤りの然るとながら當役初度の御巡歴は郷士を罪なひ給はん事上の御沙汰もいかゝあるべき且那史の

先祖より諸役免許の舊家あればそのいふ所よしなきも候の無禮を評させ給ひかしと詞齊一諫めしかば安同僅に怒りを治めて肚裏に思ふやう那著演の舊家といへども吠圍に世を歴し郷士也官事であるあらば那奴に口を利せんや思ひの隨ふ老べかるを這回の一議のわが私意越なるものを慈に權に乗じて捷んとせば現村長們がいふ如く亦妙ならぬ事もあるべし異日便宜の折をもて二度の怨を復すべしと尋思をしつうち領きて那郷士奴が賢たたる答の上を怕ざるその罪免しがたけれども且故老の願ひも任して目今のその沙汰も及ばず俺が歸府の日に聞かぬが折思ひしらせんすといふを衆皆理なしと思ひながら連累の祟を怕れ詞を盡して著演が爲に勘解にけり恚而藤白安同の極月初旬にその役果て鎌倉にかへり來つ這回巡歴の趣の箇様々々と聞かぬが折思ひしらせんすといふを衆皆理なしと思ひながら連累の祟を怕れ詞を盡して著演が爲に勘解にけり恚而藤白安同の極月初旬にその役果て鎌倉に多かりければ執權憲定入道これと褒美て聚斂の臣たるを悟らす宜く披露に及びしかば管領家持の寵遇いよく淺からず且く休息をすしとて賞祿恩賜多かりけり安同のかくの如く民に取り又君に得て數千金の資財あり富る儘に思ふやう俺今這金ありといふとも鎌倉の宿所にて酒色の爲に用ひあはばその事はやく止し聞かえて私慾ありと思われん故郷への錦を飾

るといふ古語もわるなれば今茲の妻子を携て氣賀に赴きかく逗留の程酒宴遊興も日を彌らばこの年來の勤勞を忘るゝまでに樂しかるべしといとて城可に思ひ起しつ應永十八年の春三月の中旬に願書をたてまつりて腰痛の病ひあるにより采邑氣賀へ赴きて七温泉に湯治せまく欲しとて五十日の暇を賜り妻子眷族いへばさら也大磯小磯紅粉阪ある歌妓幾名もか多く金を取せ相携て相摸の氣賀なる舊宅に赴き是より日毎に山海なる珍味を集る庖厨に玉を炊き桂を薪よしつれどもちほ飽とをしらざれば夜も日も酒宴と事としつ那歌妓等が歌舞艶曲を妻子と共に笑ひ興して且く這里に在る程に肆月初旬になりしかば這里よて三伏の夏を銷すにあほ足らぬ疋倉も采邑なれば那處の温泉も浴るときの上に願ひし由にも稱へりはやくそこらの準備をせよとて士卒を底倉へ遣しつ那里にて第一番を聞かたる浴室某甲が坐席を借してそが家の奴婢のさら也主人をも他へ移らして安同懸て入替り妻子從類遣もなく成這浴室に聚合して驕奢いよく忌憚るとなく快樂に長き夏の日をなほ短しと思ひけり却説この頃野上史著演の梅澤ある通家許佛事ありとて招れしに本日朝より所要ありて出るとを得ざりしかば時刻の大きく後れしかども今宵の那里に止宿せんとして留守を晚稻と小

六等に委ねて從者一名を將て遠しく宿所を出て梅澤を投て急ぐ程に。平塚のわまたある。花水橋の頭にてはや黄昏になりけり既にして著演の橋を渡りゆく折にと見ればいと窶々しき壯佼の橋の上に倒れたるあり立て熟視るに聊氣息のかよふのみ呼べども應せざりしかばこの急病に氣を喪ふてこゝに倒れしものあらんと思へば有繫に見過しがたくて且從者に抱起させ懷なる丸薬をとり出て飲せんとしつれども齒を楚と噬締めたれば左右亦く得受ざりしを刀に挿たる鋼箆をもて纒に口を推開して件の薬を撮入れ主從齊一介抱して連りに喚活なぞする程に壯佼の稍われにかへりて手を動し足を締め這主從を見るといへどもなほ且くの忙然より咎時著演の聲とかけて和主心地のいかにぞや俺々の路ゆくもの也和主の病臥を見るに忍びぎ且く介抱したりしに本復せられて本意に愜へり宿所近くを送りも届けん抑々何裡の人ぞやと問れて件の壯佼の遠しく身を轉して恭しく額をつき原來れん身の俺爲に恩人にてをいしにけりいと恥しき事ながら在下の生得て癩癩の病ひあり久しく水を見るさきの持病忽地に發るをもて幼稚き時より船に乗らば水邊にだま立よらざりしにこの身の不肖といひながら做す事毎に幸なくて既に飢渴に迫りしかば身を投げやと思ふにあん水を

思むべき持病を遺れて先の程よりこゝに來つ這橋の欄干に寄るとそが儘氣絶してわれにもあらず倒れけん思掛無厭達に介抱せられて惜からぬ命根のまだ竭ざりしに面目もなき事にこそと唧言がましく答るを著演聞て嗟嘆に堪はず左見右見つゝ又言やう和主の讖悔不便也縱その身に難病有共何まれ彼まれ稼ぎなば獨の口の餓る可も飢渴に迫りて命を捨ん思しん最愚ならせや今心と改めて親有る親も仕て孝行と盡しなば必天の恵にあん同胞あらば意見に就きて和睦きて悖らば亦身と立るよつがも有ん得がたかるべき人の身を稟て生れし甲斐もなく自非命と終を取らば永劫浮む瀬あかるべき冥府の呵責をいかんせんいんでもしるさとながらこの我老婆親切也用ひられなば幸ひならんと丁寧に説諭しつゝ懷を搔撈りて圓金一兩取出し是の些少の東西ながら翌より是を本錢にして稼がば飢渴を服るべしと言つゝ臆て取すれば壯佼の呆るゝ迄は喜び氣色よあらはれて受戴くと數回稍感涙を拭ひていふやう神にも人にも棄られし死を救ふのみならず狎も馴染もなき在下の本錢にせよとて此金を賜る御恩の有がたさ幸ひよして人並に世を渡る日有成べいかで貴宅へ推參して此喜を申べし願ひ名告せ給かしと云を著演推禁めてその益も無口誼也我豈後の報を思てさ計の金

を贈らんや料らず這里で日を消せしに去向を急げば立別れんさらばとばかりいひ捨て宿所も知らせず壯佼の名さへ里さへ問ふとなく些し後る、従者を見かへりながら實の熟る比の梅澤を投て走りけり然程に著演のその夜通家の宿所も到りて遠忘の法筵に列る折兒れが俺が刀は銅筭なし原來那壯佼に藥を飲せんとせし折は取殘せしをおぼへずしてそが儘這里へ來つるならん那銅筭の親の遺愛よて紫金七子に家の紋重扇を附られたり年來腰に放ざりしに惜むべし惜むべしと思ふものから夜をこめて那首へ人を遣すとも必あるべき東西もあらしき儘に一箇の銅筭でも武士たるものがいかにぞや武具を落せしなどいひ恥かひやしき所爲なるべし翌かへるさに索るともいまだ所藏の數盡すふたゝび手に入るともあらんと思ひかへして従者にもその夜の恚といひせして主従俱に止宿しつ詰朝の未明に起て従者を急がして奴婢等が炊き果るを待すけふの宿所又要事あれは辭せずして退る也このよし主人にまうしてよと然氣あくいひしらして走り出路を急ぎて花水橋まで來つる比天のはのくくと明にけり登時著演のよしを従者も説示して我より先に人の渡るとも尙暗ければ那銅筭を拾るゝといわらじとて主従橋を彼此と徘徊すると半時ばかり漏と隈なく索る程に近き

里人にもやあるらん。一夥大約五六名一個の壯佼を縛て這方を投て率もて來にけり這壯佼は何者なるものぞ其の次の巻に解分るを聴ねかし。

開卷奇驚俠客傳第一集卷之四終

開卷奇驚俠客傳第壹集卷之五

第九回

郷士二たび癡病人に遇ふ
光棍初めて舊惡を懺悔す

再說著演の那銅筭を索難て従者と共侶に花水橋を彼此と暫く徘徊する程に高麗寺村の方よりして五六個の里人が一個の壯佼を縛て這方を投て率もて來ぬるを近づく隨によく見れば這壯佼の別人ならせきのふこの橋の上に仆れてありしを介抱して金一兩を取せたる癡病病でありければ亦復疑訝りて肚裏に思ふやう原來彼壯佼が舊惡ありて囚れし歟然すの竊疾ありて縛のこゝに及べるあらん問ばやと思ふほきに里人のそが中に相識れるも一人ありけり原是藤澤に程遠からぬ里人某乙が獨子にて小正二とよべるゝもの也獨に他が兩親の

長き病着に生活の便りを失ひ朝の煙も絶んとせし折著演他に米を取せ銭をとりせて兩三回艱苦を拯得させしをありさて兩親世を去りていよその里に住やわびけん筆把る事の人なみなれば或人に妨せられて紅粉坂ある柳巷に赴き地方の書役とかいふものなりて年來を經たる也登時小正二の著演を見て遠しく走近づき腰を折めてこの檀那久しくうち絶奉りぬいよ々まをくかん健よをのしませこそ歡びなれそも今朝の何處へとてか早く出させ給ひしぞと問れて著演さればとよ昨の梅澤ある通家許赴きしに小夜深たれば留られて今朝未明より還る折こゝらよ索るものありて暫く徘徊したる也和主の事我が里長の噂に傳聞たるが恙も無て愛たきと就て詢たき一議わり其壯俊の何等の故に縛られて率るゝやらん聊思ふ由もあれば情由を具に聞まほし這里にて多足を駐るゝ心なき所行に似たれど其崖略を示しぬかしと言れて小正二後方を見返り問せ給ふ彼囚徒の目四郎と喚做したる宿所不定の破落戸也云る比々我花柳なる姿鏡屋の紅毫と云遊女に馴染て幾夜さと無通程に除に成たる遊女の價の十四五金に及しを償しか共貫のす豫宿所の恁々の里也と言し拵鬼にてよからぬ噂も聞しかば主人の堰て紅毫にたけて合せす成たりしに昨夜那奴が推て來つ遊びの古借

を取せん快紅毫を出せと言にき然らば且其金を遞與給へと催促せられて僅に圓金一兩を取出して妓有に投與へしを左右なく受き推戻して除にせられし金多寡の十四五兩であるものをこの十が一ツにも足ざるを如何せん残らず遞與し給ひぬと云せも果す聲振立て古借の盟の歸さよ取せん且其金を受収て快紅毫に逢せよと言しを妓有のいかでか聴べき獨云云と論せしかば目四郎大く罵狂ひて矢庭に妓有を打倒し障子隔亮を蹴破隣坐席の盃盤さへ踏推さ擲ちたる狼藉云べうも有ざれば人許多して前後より組禁め繩を被て一夜さ成て曉したり然ば昨夜の在下も是等の事は拘づらひて目睡もせず文書を寫め却録倉の問注所へ率もて參て恁との由を訴まつらんとて那姿鏡屋の人々とうちつれ立て黎明より出て這里まで來つる也と辭せわしく聾くを著演聞つと思ふやう原來彼目四郎をやらん召るゝ壯俊の色にその身を持崩して人悪くなりしよりわが取せたる金をもて熟妓にあんとしてその禍を醸せしこそ自業自得といひながら世に恁る白物のあきにしもあらざれば亦怪むに足らざる事歟盜賊密夫のすぢならん憐むべきものならぬども遊女も惑ふて債を思はず漫に緯を惹出して縛られて訟の場に率るゝ不便也俺が那金を取せず柳巷に赴くよすがもなくして繩練の

恥のあるまじき。小人罪なし玉を抱きて罪ありといふ古語にも似たる他がその夜の狼藉を思へばきのふのわが好意の還て仇にありたる也知らず悔しき事もあらじを一旦極ひしその人にふたゝび這里で遭ながら今その細縄を見つゝ釋すば仁と不仁と地を易て本意に違ん薄情さよ又只その事のみならでその人遺せしわが銅笄を迹にて他拾ひせや這義も問ましくしかるよ今一番拯ふに不知どはやく尋思をしたりしかば小正ニダ云云と告ると遺なく聞果つゝ眉根を擦め嘆息してその忽に聞きがたき大胆不敵の白物也恚いへり我さへに面正しくもなきをながら他わが妻に使れたる針妾の獨子なり父の既に世を去てよるべあらずと聞えしかば一稔宿所に召とりて且く使ひ試たりしに素より行状宜しからねば折々の教訓をその身の爲と思ふとなく主を疎み親にも知らさで遂に逐電したりしを他が母の苦病てや幾程もあく身まかりよき其後他近郷に在りと噂に聞たるのみ相見ざると六七年こゝにて環りあふのみあらず做せし事とい云ながら細られて訟の場に率るゝ縁由を聞いて有繋に不便也他いともわれその親の末期にいひつるをしもわれ拯ふて人にあさましく欲を狂て我々にたまへかし債の金いこゝろ得たり後日に我門賃ふべしこの議を只管憑むのみ請引れな

を幸ひならんといひ誘ふ慈善の絆を搦鬼也とい思ひもかけぬ小正二の頻りに感じて先より齊一停立たる衆人を見かへりて各位もこの大人の宣ひせしよしを聞れしならん這方さまの藤澤なる福良長者をいそる也我等が爲にも恩人にてこの年來の慈悲善根飢渴に逼りし彼此人を拯ひ給ひしはいくばくなりけん一萬あまりの體を集めてそをしも葬り給ひたる功德を誰とて知らぬいなし然るよその目四郎に恚恚の由縁あるものあれば債の金を引うけて拯ひとらんと宣ふ也這義を承引給ひせやといふと衆皆うち聞て且驚き且喜び齊一進近つきて一個々に名告をしつゝ然る方さまとい知らずして大く無禮と仕りぬ允させ給へとうち賄詰たるそが中匠鏡屋の主人の又恭しく著演にうち對ひて既に聞せ給ふが如く昨夜這人の理不盡ありしを捨ぬくとき生活の妨あり候へば己とを得鎌倉へ牽もてゆかんとしつる折思はず大人辯して由縁りとして示させ給ふ和談の只這人の幸ひのみにあらしめて亦我等が喜び也訴まつれば絆果るまで雜費も多く没るとなるに名高る大人よまおらすれば後産疹まで心安かり素より佳客ならねどもさればとて月來の所得なきに候いねば債の金後々までも御こゝろよな掛給ひそ且本人を還與しまつらん絆縛の繩を解すやと繩とり男をいそが



せば應と答てあちこちとから組たるを緩る程に。その餘のものも手傳ふて。目四郎に被たる緋
を。そが儘はやく解きにけり。然程に目四郎のふ著演が取せたる那金をもて紅毫に會んと
思ひし胸匠の淺はかなれば事成らば勢ひ遂に已がたさに罵狂ひて細られ牽れてこゝまで來
る程に。又著演に撞見て思ひも抑留られ昨夜の事を小正二が告たる折の悔しくも熱湯に舌
を焦せしうへ猶且酷を喫ひ心地しつ素より無頼の癖者あれ共。人と生れて本然の善なきにし
もあらざれば恥て頭を擡得ず既にして著演の慈善の心始終違ひせ今。その惡事を聞くといへ
どもきのふの事と露さで選て術よくいひ誘へて。又その縲繩を極ひしかば呆るゝまでは慙愧
して且感し且歡ぶのみいふよしもなくつゐるたり。登時著演の故意目四郎を脱へて這白物奴
が年の長てもまた惡心を改めせや縮途にて遭ふたりども見かへるべき奴ならねども。汝が母
の事をし思ふて這回極ひ得ざる也。胆魂を納易て人にならざれば後竟に可惜頭を喪れん應
をせせやいかばぞやといひれて僅にその意を悟りし。目四郎の稍頭を擡て家公允させ給へか
し。重々し洪恩を忘るゝとなく身を賣て佐と候み候ん。誤入ていふにさこそと著演の
又衆人にうち對ひて和議の一條いひ甲斐ありて。はやくも無異に治りたる歡びこれに優とな

し。前にも既にいひつる如く那奴が債の金のさら也。うち擡きたる盃盤も價を擡て贖ん。翌我宿
所へ訪れよかし。その折金子を渡與すべしといふを感する委鏡屋の主人のこれを聞あへずい
かでかその義に及ぶべき色を驚き情を賣して。生活にそなる妓院にのさばかりの事いくらも
あり。況世上に隠れもなき大人の高議に羞せしてあてふ損益を論ずべき臆の事。慙意あらね
ども。皆其侶にねん宿所まで送り奉らんと思ふものから娼賈柄に憚りあれば。這里にて別れ奉
らん。無禮と允し給ひぬ。と受て答の美しく辭よ女才もあよ竹の節たゞでよき和談の口誼を小
正二も及その餘のものも共侶に贖賞して。姿鏡屋の家公寔に然也。快能らんといそがして愈恭
しく著演。告別しつ從者を辭せわしく勞ふて却目四郎をそが儘にわたして還る花水橋の華
をもたせし遊里雀うち連立てぞいそぎける。著演これを目送りて既に遠くありしとき。又目四
郎にうち對ひてわが思ひしにも似ざりける。汝の鳥許の白物也。その身の飢渴に堪難て身を投
んど思ひさといひし虚言の奸智に長たるごとくなるも。十四五金の債ある妓樓に登りて。一兩
の金もて慾を遂んとせし。最惡なる所行ならずや。是より事を惹山して竟に縲繩に及びし。の
さのふ我を欺きたる。報ひと思ひ。恨みのあらじ。そをしも我の憐みて。重て汝を拯得させし事

情を知りたる歟。しらすの具に就示さん。俺料らすも這里にありて。汝が昨夜の爲体を聞くに及びて。情思ひしり。一兩の金の惜むに足らぬ。思ひが縹緲のわが。愆て伴の金を怒に取せしによりて也。わが那金を取せず。他いかにして償ある。再樓に登るとを得ん。他が妓院と聞して細られて。幸るゝのわが愆より起りしを。聞つゝ見つゝ。振のさ。わが非を補ふ。據のあらじ。と思ひしよしのあれ。バ也。只這一條。れみならで。なは。諸ぬべき事あれ。バ。宿所へ来よといそがし立て。藤澤に還りゆく程に。目四郎の今さら。初て夢の覺たる如く。洪恩徳義に感服して。阿容々々として。従ひけり。却野上著演の。纏て宿所に遷着て。且從者を休め。猛可に奴婢們に吩咐て。目四郎を立關。次の禰室に召陟さして。早飯を啖し。なご。その程に。その身の奥に。退きて。頃之して。又出て來つ。却目四郎に對ひて。いふや。う。密に汝に。諸ぬべき事あり。といひし。別義にあら。さ。さ。のふ。汝が倒れし折。俺從者に介抱さして。藥を飲せんと。してけるに。齒を嚙締て。受ざりければ。刀は挿たる。銅筭をもて。聊口を開かしたる。絆に。紛れて。取遣せし。歎ゆくべき所へ。ゆき。果て。刀を見る。よ。銅筭。さ。かりき。抑件の銅筭の。俺親の。還受にて。家の。紋を。附られたれば。最惜とのみ。思ふにより。今朝の未明。又立出て。花水橋を。徘徊しつゝ。汝。遣ひし。も。這所以也。那折。汝の。迹に。残りて。なは。在り。けれ

バ。我が銅筭を拾ひしとのなからずや。然る事あら。バ。爾せかし。といひ。れて。目四郎。些も。騒が。き。現宣の。すること。那銅筭の。我手に。あり。その。拾ひしに。わらずして。詭計より。て。察み。一也。愆のみ。い。い。憎みて。も。惡み。飽なく。思ひ。れん。今。何を。か。懸。む。べき。在。下。の。君の。仇也。さ。の。ふ。ま。で。の。不測の。罪。に。陥。んと。誤。り。しか。さ。も。その。人を見。つ。その。言を。聞て。の。高名。虚し。から。ぬ。大徳。仁義の。長者に。耻。て。稍。惡念を。轉し。その。大腕を。告。げ。や。と思。ふ。もの。から。今。さら。に。せん。術も。なき。難義。あり。これ。らの。情。由。の。一朝。魏果。べ。く。も。わ。ら。ざる。に。這。里。の。な。は。端。近也。除。淨。れた。る。所。にて。意。中を。盡。し。ま。う。さん。歎。とい。ふ。に。著。演。領。さ。て。然。ら。ば。我。と。共。侶。に。此。方。へ。來。よ。と。先。に。立。て。庭。と。隔。し。離。舍。へ。伴。ひ。て。坐。を。占。れ。バ。目。四。郎。障。子。を。引。闔。て。衣。領。の。間。に。隠。した。る。那。銅。筭。を。取。出。し。つゝ。膝。を。找。め。聲。を。低。めて。這。銅。筭。を。竊。み。し。にも。深。き。意味。ある。と。さ。る。を。その。次。々。と。ま。う。と。べ。し。願。ふ。の。収。め。給。へ。か。し。とい。ひ。つゝ。返。せ。を。著。演。の。徐。に。取。て。得。と。見。て。故。の。こ。と。く。刀。に。挿。て。却。目。四。郎。が。告。ん。とい。ひ。し。よ。し。を。甚。麼。と。訊。れ。バ。目。四。郎。思。ひ。を。嗟。嘆。して。且。俺。う。へ。より。告。ま。う。さ。す。の。こ。ゝ。る。得。が。た。く。思。さ。れ。ん。言。長。く。とも。聞。給。へ。在。下。原。の。假。名。川。なる。客。店。肝。入。と。喚。れ。し。もの。獨。子。で。候。ひ。き。の。故。又。世。の。人。の。今。に。至。て。在。下。を。客。店。の。目。四。と。喚。做。したり。年。十五。六。あり。し。比。より。這。身。の。惡。心。稀。萌。して。良。ら

ぬ友に引入られ賭博に耽り遊女に惑ひて親の東西を喪ふと幾番といふ限りもなければ勘當せられて一稔あまり賭鈔友人と親品に頼て其處に寓りてをり。父の他行と祝ふて母を賺して錢を借り衣をも借りて皆賭博に失ひしともしバくなりしを竟に父に曉得られて酷しく母を誑めけん後母も中垣を樹てつや／＼せ着ざれば日來の惡心彌増して竊むに不如と尋思をしつゝ二親の外に出て守者稀なる折を張ひ背門より潜び入る程に客房に逗留の旅人とおぼしきが夫婦を見へて二人をり。男子のいたく病骸ひて何事やらんうら譚ふを心ともあく竊聞せしにその比底倉にて擧れたる脇屋少將義隆の家臣よて他等が子也とて携來つる小六どかいふ総角ハ主の義隆が子なりしよしをこの時具に聞得たり恚而伴の病人の女は諄々を遣言して袱と包たる短刀と巻軸などを兩三種妻に示して是れ死なば小六殿に俱して藤澤に赴けかし那郷に隠れもなき野上史英演ハわが少かりし時義を結びたる異姓の兄弟なるをもて左も右もして養れんこの餘の事ハ恚々といふ聲細りて苦しげに寫め措たる一封の手簡を取出て遞與せしかば妻ハ頻りにうち泣いて口説立たる哀傷悲歎を竊聞く隨に氣のみ滅入りて竊心も且くの耗て忙然たりし折外面に人の足音してかへり來ぬるハ俺親也看若られじ

と思ふにぞ東西も得とらぞそが儘に鈍くも逃て親品の宿に還りし本意ささば那旅客がいひつる事を左さま有ユと思惟る。巻軸ハ脇屋の系圖又短刀ハ菊一文字と名づけたる重寶也又一封ハ何まかありけん。その袱と掩れて見へざりければ知るよしなけれど巻軸と短刀ハ新田の餘類の證據申那落人等を鎌倉へ訴稟さば手も濡さで計多の賞錢を賜ふべししかのわれども俺親の宿せし只今訴てハわが親も亦落人を留措きたる崇を受ん然でハ外聞妙ならず且藤澤へ遣して其後訴まうすべしと尋思をしつゝ日を過して緯の便宜を現ひしに那病人ハ節大六英直と召れしものにて幾程もなく身まかりければ。そが妻の母屋とやらんが小六と俱に柩を成りて大人を頼て這郷へ來にける緯の趣も又英直の柩をバ遊行寺へとて丁聲に葬り給ひしハ体の遺もあく聞へしかばこの時にこそものせんと思ふ心を親品よ告て竊と相譚ひしに親品聞て從はず和土ハよくも思はず。我々の博徒でも人ハ俠者といへるハを這身の榮にすべかるに些の賞錢を氷んとて海道一の俠者なる野上の翁を其落人等と齊一罪なひ害ない世の豪傑に疎るべし然とも和土ハ賞錢の慾しさは訴んとならば禁めいせねどけふより夥計を除く也乾文乾兒の好みを離れて六郷以西親姑峰より東で飯ハ食せぬぞ後悔すかと寤ら

れてその義を思ひ留りにき。這親品の鬻町にて猪三太と召れたる豪傑でいひしに惜ひべし。年來の強飲に脾胃を破られて吐血して身まかりたり。然程に親肝ハハその次の年の夏五月時疫に犯されて病と縁に一向あまり醫師も半分手傳もけん。只掌を返そが如く劇しうなりて世を去りぬ。その病中に里人等の我二親に勘當の賄詰して這身を召かへされ親の經營せしは業を嗣て主人よかりたれども特崩せし身をそが儘に浮たる心を改めぬ。僅に二稔ばかりの程に宅をも庫をも沽却して裏家住ひのそが中にも母親も亦身まかりけり。その初七日に藻潮草掻集めても數多からぬ家財を遺さく。敗鐵經紀に賣たる錢ハ月來の房錢の債に屋主に推留られて勘定の合ぬ字號の質札を借屋の柱に置土産残るハ四十七文の假名川を立退きしより鎌倉金澤いへばさら也。大磯小田原親姑峯の湯本這里に半年那里に三月同氣同病相憐む友をよるべに生活もせせ博奕に浮世を亘ると五六稔になりけり。憊而今茲ハ相摸なる底倉人に身を寓せて兩月あまりをる程にいぬる日博奕又利を失ひて債を贖ふ術なき。竊心の復起りてその進退を考しに折から相摸の眼代なる藤白隼人正安同主ハ湯治の暇を賜りて底倉の浴室にとり。をさく民の膏狀を絞りて富るに任せし酒宴遊興采邑なれば油斷多ほかりいかで那

里に潜人らバ寶の山獵造化も宜しからんと計校たる準備をしつゝ、夜に紛れて伴の旅館に潜近つき垣を越窓より入りて安同主の臥房に赴き却彼此と搔撈るに竊取に熟ざる悲しさい思ひせも度と喪ひて傍に臥たる嬖妾の足をしたゝかに踏しかば忽地覺て吐嗟と叫びし聲に驚く安同主賊見入りぬと呼りて岸破と起て引組だり。遮草在下も小力あり相撲も聊嗜みしか。バ左右なく組も伏られず且く挑争ふ程に駭覺たる近習の侍紙燭を乗つゝ、兩三名はや次の間より走り来て主を援けて在下を擊倒し壓細りて矢庭に繩をかけられたり。恚て柴薪場へ繫れて成卒二名側へを去らす右する程に天の明しか。バ今ハはや斬られぬらんと思へば生たる心地せせ後悔の外なかりに果して庭に牽出されて命俊問の厨下の豕烹るゝかもひあべて世の愛を今我身ひとつに摘て疚痛ぞ知られける懸處に安同主ハ手づから刀を引掛て坐席の縁頬に出て來つ雜兵們ハ是を見て在下を又牽立て主の身邊に推居しを安同主熱見て汝ハ原是何里のものぞ姓名宿所を具に申せ中々まうせいかにぞやと問れて在下跪きさ。ンハ在下ハ目四郎と召れたる一所不住の博徒也。近習ハうちも續きて造化惡きに彼にも此にも多かる債に苦しめられてせん方のなき隨に初て發起の夜稼ぎに熟ぬ技として錢一文得とらで忽此生拘

られ後悔を嘆ひまで。我から我身を恨るのみ。舊惡とていひはず。只かん慈悲こそ願ひけれ。と脚音がましく陳せしか。安同主領きて思ふに。優たる汝が。方景武藝も習得たりと。おぼしき。本事の昨夜われよく知れり。領主の旅館へ。憚りもなく。潜び入りし。大胆不敵。免すべき。奴ならねども。胆魂に見どころあり。今より我に従ふて。一箇の功を立んと。なら。命を助るの。と。あら。で。必重く用ふべし。胸を定めて。思をせよ。といひ。れて。在下。怡悦に。堪ず。その。何事に。候やらん。思ひがけ。かく候へども。今。斬らるべし。遺首を。續る。御恩。預ら。非。如水火の中也。とも。辭ふ。こと。なく。命を。的に。射て。功。立。ざらん。や。快々。仰付らるべし。と。辭を。放ち。諸ひ。しか。安同主。含笑ながら。雜兵。們に。云。云。と。下。知。して。馳。て。在下。が。繩を。解。し。自。登。して。飯を。賜。り。酒を。も。飲。して。更。に。閑。室に。召。近。づ。けて。密。やかに。い。り。る。や。う。我に。年。來の。怨。敵。あり。此。は。是。藤。澤。なる。郷。士。野。上。著。演。也。縁。故。の。箇。様。々。と。野。人。二。度。迄。か。ん。身。の。爲。に。恥。辱。を。攪。り。し。緯。の。趣。を。遣。も。なく。説。示。して。相。撲。の。今。我。が。配。下。な。れ。ども。那。奴。の。山。猪。ある。舊。家。にて。自。由。に。し。が。た。き。所。あり。この。故。に。怨。を。隠。して。空。に。光。明。を。過。せ。し。に。端。ら。せ。も。緯。に。用。ある。汝。と。得。つ。る。こ。と。歡。び。な。れ。汝。那。里。に。赴。き。て。手。段。を。以。著。演。が。寐。首。を。捕。て。我。に。見。せ。ば。賞。祿。の。望。は。任。す。べ。し。わ。が。腹。心。の。家。難。な。き。に。あ。ら。ね。と。某。們。に。事。を。行。せ。て。倅。

損。せ。る。と。あり。も。せ。ば。我。も。崇。を。免。れ。が。た。かり。故。に。汝。に。悉。る。也。い。かに。這。義。を。よく。せん。や。とい。ひ。れて。在下。沈。吟。して。仰。う。け。べ。り。候。へ。ども。那。著。演。の。武。藝。の。達人。と。が。う。へ。に。從。類。多。かり。然。る。を。在。下。單。身。よ。て。本。意。を。遂。ん。と。易。か。る。べ。から。ず。それ。に。口。僣。て。手。短。なる。奇。々。妙。々。の。一。議。あり。とい。ふ。に。安。同。主。膝。を。進。め。て。その。亦。甚。厭。なる。妙。計。と。問。れて。吾。下。些。も。擬。議。せ。ず。殿。の。知。せ。給。は。ず。や。著。演。が。養。嗣。に。して。小。六。と。呼。做。と。少年。の。襲。に。殿。の。討。捕。給。ひ。し。脇。屋。義。隆。の。實。子。也。在下。故。郷。に。在。り。し。時。故。あり。て。これ。を。知。れ。り。その。顛。末。の。箇。様。々。々。と。今。より。九。ヶ。年。已。前。假。名。川。ある。親。肝。八。の。宿。所。にて。英。直。が。その。妻。母。屋。に。遺。言。した。る。緯。の。趣。系。圖。の。卷。軸。菊。一。文。字。の。短。刀。の。事。ま。で。も。詳。に。詳。に。告。げ。て。その。比。下。鎌。倉。へ。訴。ま。う。さん。と。思。ひ。しか。ども。猪。三。太。とい。ひ。し。親。品。に。諫。め。ら。れ。て。黙。止。たり。この。義。を。以。管。領。さま。へ。告。訴。し。給。ふ。もの。なら。ば。著。演。親。子。の。擲。捕。ら。れ。て。縛。首。を。刎。ら。る。べ。し。這。義。い。いか。と。眞。實。だ。ち。て。密。談。數。刻。に。及。び。しか。と。安。同。主。愛。く。つ。が。へ。り。て。猶。ふ。と。大。か。た。な。ら。野。原。の。野。上。著。演。奴。の。年。來。新。田。に。荷。擔。して。上。を。蔑。する。野。上。の。顯。然。その。義。を。告。訴。した。らん。に。罪。な。れ。ん。事。疑。ひ。な。し。雖。然。三。の。拒。障。あり。我。身。今。鎌。倉。に。在。ざ。れ。ば。速。に。告。訴。し。が。た。し。是。一。ツ。の。拒。障。也。前。月。治。治。の。願。に。よ。り。て。五。十。日。の。暇。を。賜。り。し。に。ま。だ。三。十。日。に。も。至。差。して。鎌。倉。へ。還。

りがたかり。是二ツの拒障也。持氏公の近き比京都將軍と御不和にて竊に獨立の御宿意あるより新田柿の餘類といふとも先非を改めて從ひ奉れば恩免のもの往々これあり。然れば今汝をもて鎌倉へ遣して藤澤なる郷士野上著演の竊に脇屋義隆の子を舎藏て養嗣にして候と具に訴申すとも正しき證據あるにあらざるは疑れて遲滞せん。是三の拒障也。これらの障礙を釋んとならば汝那宅に潜ひ入て小六が所持做す那巻軸と短刀を奪取てそれを證據にして訴まつらば著演親子の立地に搦捕らるべけれども人に見せぬ秘書寶刀を竊取るをたかたかるべし心を盡しても手に入らずの亦復宜く手段を易て著演が弓筋まれ或は刀子刀并まれ竊取らば縛成るべし。それを將他が所藏といふ目識あらばいよく妙也。その東西既に手に入らば汝鎌倉へもてまゐりて却訴申んやうの野上史著演の年來逆謀の企あり然るにより九ヶ年前より脇屋義隆の子を舎藏て小六と名づけて養嗣よしたり某初これ義を知らず近曾那著演と象基の席にて面會せしより交り淺からせなりにたり。恚而さの著演が竊に某を招きて譚ひし。我管領家を討滅して義隆のあん子小六丸を鎌倉の主にせまく欲し和殿の射藝銃鏡の達人ををいそれ竊に鎌倉へ赴きて管領家のあん外出の折を覘ひ狙撃て素懷を遂させ給へかし。

只一人の手を以數白騎の將を擊事。矢砲飛劍に優ものなし。這弓箭刀并の我家の重寶也。則和殿まぬらする是をもて管領家を擊捕給へと聳きて伴の武器を贈りたり否といひ。いその座を去らせせ擊果とべき面魂の勢籠で見へしかば陽よの一味の如く應て那里と出るとそが儘に注進の爲參上せりに實事しやかに訴申して盜取たる弓箭まれ或は刀子刀并まれ縛の證據としてたてまつらば時を移さず著演が宿所へ討手を向られて那身のさら也。園宅の奴等一個も漏さず搦捕れて必獄舎に擊れんそが程に我も亦鎌倉に還りまゐりて詮議の席に列るべし。其折著演冤枉なりとていか計に陳ぶるとも我亦智罟を旋らして那奴に願をたかせせ。思ひの隨に申做して叛逆の罪に定らば竟に三族を夷げられて宿怨其處も果とべし。いと愉快き事ならずや勿論汝の忠訴の功もて上より賞錢と賜るべく我も亦錢帛を盡して辛苦錢を取すべし。此馬に荷の捷大役あれば念じて事を做損すな努よかしと聳き示して金十兩をとり出し是の計議の雜費ぞとて紙に括りて賤ければ在下歡び受戴きて仰こゝろ得いひぬ必做課せいん吉左右と俟せ給ひねと言承しつゝ旅舎も退りて且身皮を取繕ひ却平塚なる相識許趣きて逗留しつゝ夜も日も這頭を徘徊して大人の宿所を張ふと既又はや一句許潜び入らんと

欲^ほすしかども内外の用心堅固^{けんこ}にて竟^{つひ}に便^{べん}りを得^えざりしかバ他行^{たぎやう}の折^せを視^みて刀子^{かざり}まれば刀^かに
 まれ盗^{うしな}んものをと機^きを易^{やす}たり是^{こゝ}より夜毎^{よごと}に眠^いめれば博奕^{はくやく}に耽^ふりて件^{けん}の金^{かね}を繰^く三夜^{さんや}さに失^うひ
 にき然^さとて已^やべき事^{こと}あらねば昨^{きのう}も朝^{あさ}よりこゝに來^きつ大人の他行^{たぎやう}をやうやくに觀^{かん}着^つて花水橋^{はなみづはし}
 に倒^{たふ}れて待^{まち}し豫^{かねて}の計^{けい}校^{がう}病^{びやう}者と見^みせて齒^はと喉^{のど}締^ひり介抱^{かいほう}せらるゝ時に及びて銅^{どう}笄^{しやう}をもてわが
 口^{くち}を開^あれたるのこよなき造化^{くわいさく}手^て通^{つう}使^しふてかの折^せにはや銅^{どう}笄^{しやう}と偷^{ちゆう}竊^{せつ}たり恚^{いかで}而^{して}癩^{らい}癩^{らい}なるよし
 も飢^う渴^{かつ}に逼^{せま}りて身^みを投^なげんと欲^ほせしよしもいふと毎^{ごと}に實^{じつ}事^じにせられし長者^{ちやうしや}の教^{きやう}訓^{くん}金^{かね}一^{いち}兩^{りやう}を賜^{たま}
 りし一^{いち}瞬^{しゆん}に違^{ちが}ひぬ慈^じ悲^ひ善^{ぜん}根^{こん}天^{てん}おそろしく思^{おも}ひつゝ受^うて別^{わか}れてつくゞと尋^{しん}思^しに胃^いを定^{さだ}め難^{がた}
 てゆきも得^えやらす又^{また}思^{おも}ふに只^{ただ}一^{いち}トわたりの際^{きわ}際^{さい}にて銅^{どう}笄^{しやう}をのみ盜^ぬみちりてそを鎌^か倉^{くら}へもてゆ
 きて安^{やす}同^{どう}すにいのれしごとく訴^うんと勿^な論^{ろん}なれども野^の上^{の上}の翁^{おきな}の仇^{あか}とも知^しらば憐^{れん}愍^{みん}深^{こゝろ}く這^{こゝろ}金^{かね}を
 本^{ほん}錢^{せん}ませよとて養^{やしな}られし思^{おも}に叛^かかバ猪^ぶ三^{さん}太^{たい}にいのれしごとく友^{とも}人^{だち}が夥^{おほ}計^{けい}を除^よくといひも
 やせん。そを思^{おも}はずに鎌^か倉^{くら}へ罪^{つみ}をいせんとてゆかれんや然^{しか}ばとて藤^{ふじ}白^{しろ}殿^{でん}にも一旦^{いつたん}命^{いのち}を助^{たす}けら
 れ雜^ざ費^ひにせよとて十^{じゆ}兩^{りやう}の金^{かね}さへ賜^{たま}りたりけれバ今^{いま}さら變^{へん}易^いとべうもあらずいかにせまじと
 胸^{むね}に手^てを當^あつゝふたゝび尋^{しん}思^しをせしに又^{また}究^{くわう}竟^{じやう}の手段^{しゆんぐわん}あり我^{わが}造^{くわい}化^{さくわ}のよかりし時^{とき}紅^{べに}粉^{こな}坂^{さか}ある姿^{すがた}

鏡^{かみ}屋^やの紅^{べに}毫^ご許^{しよ}屢^{りゆ}かよひて借^{かり}たる洞^{あな}房^{ぼう}錢^{せん}多^{おほ}くあり這^{こゝろ}一^{いち}兩^{りやう}の金^{かね}をもて那^な里^りにゆきて恚^{いか}々^さといひ
 い必^{かならず}これ彼^{かれ}と論^{ろん}して古^こ借^{かり}を償^{はら}られん。その折^せ甚^{いた}く罵^{のの}り狂^{くる}ハ、那里^なの奴^{やつ}等^ら口^{くち}を^を得^えぞ必^{かならず}我^{わが}身^みを細^こ
 て得^えて鎌^か倉^{くら}へ赴^{おもむ}きて憲^{けん}斷^{たん}を乞^こひまつるべし恚^{いか}て問^{もん}注^{ちゆ}所^{じよ}の詮^{せん}議^ぎに及びてどが所^{しよ}持^ぢしたる一^{いち}兩^{りやう}
 の金^{かね}の出^{しゆつ}處^{ところ}を問^とれん時^{とき}件^{けん}の金^{かね}ハ藤^{ふじ}澤^{さく}なる野^の上^{の上}著^あ演^{えん}が養^{やしな}たる也^{なり}。那^な著^あ演^{えん}ハ箇^か様^{やう}々^々とこゝよ至^{いた}
 て藤^{ふじ}白^{しろ}殿^{でん}よいのれし如^{ごと}くならべ立^たて誣^{しゆ}て叛^か逆^{ぎやく}のよしを稟^{まう}さバ言^{こと}不^ふ用^{よう}意^いに出^いるよ似^にて野^の上^{の上}の
 翁^{おきな}の思^{おも}も叛^かかす藤^{ふじ}白^{しろ}殿^{でん}に頼^{たの}まれたる密^{ひそ}謀^{ぼう}立^た地^ぢに成^{なり}就^{じゆ}せん然^{しか}とさハ姿^{すがた}鏡^{かみ}屋^やの訴^うの外^{ほか}になりて
 掛^かて牽^ひれし我^{わが}が細^こめをばやくも釋^とかすのみからで逆^{ぎやく}徒^とを告^こ訴^その抽^{ちゆう}賞^{せう}に東^{とう}西^{せい}許^{しよ}多^た賜^{たま}るべし便^{べん}
 はち是一^{いち}事^じ兩^{りやう}全^{ぜん}これに優^{よし}たる手^て段^{だん}ハあらじと深^{しん}念^{ねん}の臍^せを固^{かた}めしより紅^{べに}粉^{こな}坂^{さか}に赴^{おもむ}きて形^{かたち}のど
 どくに計^{はかり}ひしに豈^あ思^{おも}はんや今^{いま}朝^{あさ}も亦^{また}花^{はな}水^{みづ}橋^{はし}の頭^{かぶ}にて仇^{あか}なく大人^{おとな}に撞^いてふたゝび恩^{おん}義^ぎを受^う
 んとい素^{もと}より大人^{おとな}の俠^{あつ}氣^きハ世^よの風^{ふう}聲^{せい}にて知^しるといへども飽^あまで仁^{にん}義^ぎに富^{とみ}給^{たま}ひたる至^し善^{ぜん}の長^{ちやう}
 者^{じや}に御^ご座^ざせしを這^{こゝろ}身^みの不^ふ肖^{せう}といひあがら薄^{うす}情^{じやう}や貪^{どん}更^{ぎやう}に相^あ譚^{だん}れて无^む實^{じつ}の罪^{つみ}に陷^{おと}さんと伎^ぎ倆^{りやう}し
 所^{しよ}行^{ぎやう}こそ悔^{くわ}しけれ。今^{いま}我^{わが}身^みを恨^{うら}むも甲^か斐^ひあし切^きてハ大人^{おとな}に懺^{ざん}悔^けして左^{ひだり}も右^{みぎ}もあらずばやと思^{おも}
 ひにければ阿^あ容^{よう}々^々と俱^ぐせられてこゝへまゐりたり親^{おや}に不^ふ孝^{こう}他^たに不^ふ實^{じつ}の罪^{つみ}を思^{おも}ハぬ放^{はな}

蕩無賴三十餘年の非を知るも只是大人の高義大徳人の及ばぬ誠心に感服せしによりてなり。
 恚れば大人へのわが爲よ善知識にてをはずれども恩義に報ん術もなし今面前に身を殺して
 ひつるよしの詭譎ならぬを。知せまつらん允さず給へといひ果て遠しく身を起し柱に觸れて
 頭を碎きて死なんとせしを著演透さず呼禁めてやよや等目四郎短慮の功あし。いふとあり心
 を鎮めて坐に返れ性急りなせと制されば目四郎僅に見かへりてさて死ぬにも死なれど
 やよいふ唇口隠る感激の目を屢瞬く一滴誠の袖に露れて進難つ、平伏たり著演頻りに歎息
 して又目四郎を呼近づけ四下を見かへり聲を潜めてやよ目四郎思ふに優たる懺悔の趣現蕙
 蘭を折るもの。その身かのづから芳しく又非葱を採るもの。その身かのづから臭しといひ
 けん古語にも似たる善惡反覆濁を去て清み従ふ汝が忠告賞をべし。那安同が邪智毒惡その奸
 計の今さらには怖るゝよ足らぬをも驚き思ふの小六がうへのみ他の脇屋少將の御子なりしと
 いふよしをけふまで我の知らざりし他。則新田の餘類館大六英直が獨子也と聞えしかり養
 ひ取てはや九ヶ年親と成子とありたる。我ぞ知らぬ他が素生をはやく汝に知られし。是禍
 の馮る所那揚震が四智の誠壁に耳ある世也けり遮莫汝が忠告のその甲斐なきにあらぬとも

言一トたび口より出ての。駟も追がたかり小六が素生を安同に知られたるの。今さらにと
 り復されぬ難義也。縦汝が管領家へよしを訴まうさずとも安同歸府せば告訴して我三族を滅
 さんと計ざるをなからんや。そも亦時なり命あらば辭するによしもあきとながら小六を俱よ
 罪なりしての年來盡せし志の空花となるをいかいせん。他。則英直が獨子ならば我身と共
 に死するも時運と諦めて思ひ絶なば堪もせん脇屋殿のかん子なりきと聞ていよいよいと
 惟く思ふによりて我も亦汝を用る所あり死を禁めし。この所以也。緯のいまだ起らぬ間に便
 宜に任し小六を賺して伊勢の神戸へ落し遣るべし。伊勢の國司北島左中將親能卿の父祖の時
 南帝の外戚あれ。人望重かり南北兩朝れん和陸の後足利家。従ふて名を滿泰と改め給ひき。
 然けれども南朝の聖恩を今更に忘るべき人。にあらざれば小六か世を潜ぶ。よ尤便宜の所
 也。小六の既に武藝に長て思慮あり勇敢ありといへども尙十七の少年也。那身一箇を手放て落
 し遣りなば長き旅宿にさこそ不便にあるべけれ。汝竊に隸隨ひて那地に到て仕へなば死する
 に捷りし義士と思へん甚麼這誼をこゝろ得たる歟と胸の秘事うち諦ていと町噂に説示せば。
 目四郎聞つゝ歡びてそのいと易き御用也。非如異國の盡處までも令郎のれ伴して苦樂を分た

ば切ても。報恩謝恩にいのん首途の日の定らばなほおん指揮を願ふのみといふに著演領さ
て然らば汝の平塚なる宿に退りて便を等小六をいまだ認らずやと問を目四郎聞あへず否お
ん目への被らねども那藤白の密議によりてさこのふまでも這里の内外と張濟せし事あれば
かん容貌さへ澄音さへいとよく認りてい也鳥夜にも愆いひじといふに著演又示して懐き
る鼻紙刺の墨袋をうち開きて有るつ金三兩を取出しつ目四郎に與へて又示すやう汝の
且這金をもて等脚神腰刀雨衣までも買整て旅装して小六を俟ね時日はいまだ定得ずそ
の又後に知らせべし快々立ねと急せば目四郎の件の金を戴き収め後日を契りて告別しつ平
塚なる旅舎を投て退りけり。

第十回

相摸川に小六横死を示す
遊行寺に著演蟬蛉を葬る

館小六の這朝例如く疾起て奴婢之助に大學の句讀を授果し比養父著演が梅澤よりいと
はやく還り來にければ速しく出迎て恙なきを祝し路の疲を問慰めて俱に早飯を食けるに著
演の容ありとてせわしく箸を闊きて又支關のかたに出けり小六の親の生平にあらで慌だ

しきを訝りて來ぬる容の誰なるらんと思ふものからうち出てよしを問んはさすがよてそが
儘書齋に退きしに猛可に胸のうち騒がれ何となく鬱結れし氣を霽さんとおもひつゝ徐に
庭に立出てひとり彼此を見互すに離舎の縁頰の頭を開し兎花の籬笆も眞白になるまで最
盛りありければ且く其處よ鵠立む程に那密談の緯の趣目四郎が懺悔の忠告及著演が答し言
の首より尾まで圖らずも咸聞果て或の驚き或の憂ひて竊に書齋へ退きつ獨熱思ふやう那目
四郎とやらん鳥許の癖者奇矯抗の取るよしなきも大人の熱善に感悟して鳩毒還て良藥
になりしも至誠の致す所今にはじめぬとあがら大人の徳こそ有がたけれ然るにても去歲の
秋まで我とら知るよしなかりける我身の素生を目四郎に知られたれども世に洩さでこゝに
九年の光院を歴て親に仇なす安同に告られたるの鬼神でも前知しがたき時節到來竟に脱れ
ぬ枉屈神の崇を今さらいかいせん遮莫我身の故に大恩受し養父母の罪なれんを知らず
貌に亦何處へか立退くべき然として俱に手を束ねて討兵の爲に捕れて親子齋一死んの益なし
所詮事の破れぬ先に那底倉なる安同が旅館へ獨潛入て盛よとるあらば鎌倉武士も京家に
も安同あらで我が素生を知りたるものゝあるとなければ禍頭に消滅して養家に恙あかるべ